

ソヴィエトにおける英語学

——イリシの《英語史》——

岡 部 匠 一

本稿は ИЛЬИШ の⁽¹⁾《英語史》の紹介であり、なんら独創性を要求したり、問題を提起するものでなく、日本の Anglicist の一人として、紹介、導入されることが極めて少ない、Soviet における、英語学研究への、naive な assimilation の試みである。もし何等かの問題が、提起されるとすれば、それは、過去の斯学における、ゲルマン的、ロマンス的、発想と approach に対する、スラヴ的要素の、言わば、英語学的 occultation からでる問題と考えられるが、筆者の現在の姿勢は、前回のスミルニツキー <СМИРНИЦКИЙ> に対した場合と同じく、le degré zéro de l'écriture 的なものに止まっている。学問的 personality の cadre の mesh による濾過、分析、総合を試み、通時的、共時的なソヴィエト英語学の把握、鳥瞰、その立体的な構成と、願うには、この分野において、乗つて立つ giants たる先達の肩もなく、少なくとも、現在は、膨大な資料の海を前にして、浜辺に、⁽⁴⁾小石を拾う外ない。ИЛЬИШ の⁽⁶⁾《英語史》は、戦後の英語史に関する正統的なものが少なく、英語学概説的色彩を持つものに、‘英語史’を求めることが多いので、その傾向を、均衡状態に複したいとの願いと、今一つは、OE の syntax への一石を狙い、取りあげた。

Syntax は OE においては、accidence に比して、知られている西欧の文献では、Text 的なものをも含めて、扱われることが少なく、簡略に流れ、また、比較的僅かしか、研究の名に値するものが、出されていない現状なので、特につけ加えた。

翻案的訳出を試みたのは、英語史における常識とも言うべき、最初の § 50、古代英語の

(1) Б. А. ИЛЬИШ, ИСТОРИЯ АНГЛИЙСКОГО ЯЗЫКА, МОСКВА, 1958, 366 pp.

(2) “ソヴィエトにおける英語学 —スミルニツキーの古代英語—”, 高知女子大紀要 VIII, No. 2 (1959), pp. 37—65.

(3) Stephen Cippmann, The Image in the Modern French Novel: “it (le degré zero de l'écriture) …… aims at purely functional and translucent medium which would be *a mean to an end, not in any way an end in itself*, …… l'écriture se réduit alors à une sorte de mode négatif dans lequel les caractères sociaux ou mythiques d'un langage s'abolissent au profit d'un état neutre et inerte de la forme.” (italics is mine)

(4) “If I have seen further it is by standing on the shoulders of giants,” Isaac Newton, quoted by Philip Cane, Giants of Science (New York, 1959) p. 1.

(5) 戦後に表われた英語史の title をもつもので、standard work と見なされるものは、Albert Croll Baugh, A History of the English Language, (New York, 1936,) 509 pp. の英国版 (London, 1951) を含めても、わずかに、Fernand Mossé, Esquisse d'une histoire de la langue anglaise (Paris, 1947) XV + 268 pp. と、G. L. Brook, A History of the English Language (London, 1958) 224 pp. しかない。

(6) 戦後のもので popular なものは、C. L. Wrenn, The English Language (London, 1949) 236 pp. Simeon Potter, Our Language (Pelican Books, 1950) 202 pp. の 2 冊でこれに、A. H. Marckwardt, Introduction to the English Language (Oxford, 1942), と M. M. Bryant, Modern English and Its Heritage (New York, 1948) が加えられよう。

Ablaut⁽¹⁾を含めた、母音と子音の、音韻組織⁽²⁾までと、§ 170～§ 219 までの、第2章 <英語の起源>⁽³⁾の末尾におかれている詳細な синтаксис である。<古代英語>において、Смирницкийの手になる синтаксис よりも、一般概説的性格をもつ Ильиш の<英語史>の синтаксис が、詳細委曲を尽しているなどは、英語学におけるスラヴ的 irony の, réalisation などと、片づけられない、今後に俟つ something を含むように思われる。

Terminology にあてた、訳語は試案であり、在来の、我々に親しい西欧の英語学におけるそれとは、かなり、その一つ一つの術語の内包や、更にまた、術語体系全般にわたって、ずれがあるように思われる。今後の、研究に俟ち、精してゆきたい。

本書の成立、その他については、訳出した⁽⁵⁾序論⁽⁶⁾に窺えると思うので省き、本書は、Soviet における、英語史に関する The standard work であることと、戦後の <英語史> 文献中において、Mossé, Brook⁽⁷⁾の線は Ильиш で一応 culminate していて、その後を表われた Brunner⁽⁸⁾は、古典的体系と系列に立ち、違つた平面上にあつて、Ильиш の <英語史>は、彼には、知られていなかった様に思われることを、附言しておきたい。

序 文

この本の第四版の発行までに、殆ど、20年の才月が流れた。この年月の間に、我が国においても、また、諸外国においても、英語史に関する、多くの新しい、研究が、表われた。これらの研究は、言語の発達の過程を、より深く、よりよく、そして、多くの場合において、新しい視点から、解明する可能性を与えている。これらの新しい研究に照して、以前の本書の版における叙述の資料の一部は、古い時代のものとなつた。斯学の発達の現在の水準に適応して新しい版が、作られた。この斯学における根本的な問題の幾つかを、私は、この版の準備に際して、採りあげた。

本書には次のような課題が含まれている。すなわち、旧版よりも、より多く、言語の歴史の分野における、実際の学問的な問題のコースに読者を導き、この問題の解決に、独立して当れる能力を作りあげるのを促進することである。

更に、この教科書には、著しく、ゲルマン諸語全般に関する智識が、補足してある。この新しい分野(部分)は、他のゲルマン諸語、および、他のインドヨーロッパ諸語の中においての英語の位置を、読者が自ら会得するのを助け、又、同時に、英語自身に個有の多くの現象を、よりよく理解する可能性を与えるであろう。

最後に、初版の、構成上の欠点を、完全に改正するように心掛けた。根本的な欠陥は、私には、次の点にあるように思われる。すなわち、叙述において、第一義的なものと、第二義的なものが、分離されていなかった。すなわち、学生が、学ばなければならないものと、校正される材料として、補助的に与えられているものの間の、境界が引かれていなかった。こ

-
- (1) аблаут (2) фонетический строй (3) происхождение английского языка
 (4) А. И. СМЕРНИЦКИЙ, ДРЕВНЕАНГЛИЙСКОГО ЯЗЫК (МОСКВА, 1955) 317 pp.
 (5) предисловие (6) введение
 (7) F. Mossé, Esquisse d'une Histoire de la langue anglaise (Paris, 1947) XV+268 pp.
 G. L. Brook, A History of The English Language (London, 1958) 224 pp.
 (8) K. Brunner, Die englische Sprache, ihre Geschitliche Entwicklung I Bd, (neu Aufl., Tübingen, 1960) XXII+416 S. Vii

の補助的な資料は、古いテキストの分析と読書に際して、利用されうるものである。この版においては、補助的、あるいは、資料的な性格をもっているものはすべて、小さい文字で与えてある。⁽¹⁾

序 論

英 語 史 の 対 象

Б. Ильиш

§ 1 現代英語を研究すると、我々は、英語の語イ組織⁽²⁾や、音韻、および、文法構造⁽³⁾において、現在英語の観点から見れば、全然不可解な無数の現象を見いだす。

語イ組織の分野においては、英語と、ドイツ語の間には、著しい共通性が明らかになる。例えば、‘лето’ は英語では ‘summer’ であり、ドイツ語では ‘Sommer’ である。‘зима’ は英語では ‘winter’、ドイツ語では ‘Winter’、‘нога’ は、英語では、‘foot’、ドイツ語では ‘Fuß’、‘длинный’ は、英語では、‘long’ ドイツ語では ‘lang’、‘петь’ は、英語では、‘sing’、ドイツ語では ‘singen’、‘сидеть’ は英語では ‘sit’、ドイツ語では、‘sitzen’ である。又、一方において、多くの場合、私は、語イ組織の分野において、英語と、フランス語の共通性に、気がついた。例えば、‘осень’ は、英語では、‘autumn’、フランス語では、‘automne’、‘пека’ は、英語では、‘river’、フランス語では、‘rivière’、‘скромный’ は英語では ‘modest’、フランス語では、‘modeste’、‘менять’ は英語では、‘change’、フランス語では、‘changer’、‘осуждать’ は英語では、‘condemn’、フランス語では、‘condamner’、等である。この様な例の数は、著しく、増すことができる。この様な対応⁽⁵⁾は、ある程度、フランス語、あるいは、ドイツ語を知っている誰にも、容易に認められる。現代英語の範囲において、この対応を説明することは、不可能ではない。が、この対応の原因は、多かれ、少なかれ、遠い歴史的な過去に、隠されている。そして、英語の歴史につくことによつてのみ、見出されうるのである。

又、同様に、言語（英語）の音韻構造の領域において、すなわち、より正確に言えば、語の、発音と、綴字の間の、⁽⁶⁾相関の分野において、現代英語の観点からは、説明できない非常に多くの現象が、存在する。例えば、なぜ、sign, light, naught, know, gnat や多くの他の綴字の語において、いかなる音をも表わさない文字が書かれるのか？ なぜ ea の文字結合⁽⁹⁾が、種々な音を speak, great, bear, heard, heart, の語において、表わしているか？⁽¹¹⁾又、なぜ、sun, cut, butter はにおいて、[ʌ] という音は、u の文字で表わされ、一方、love, son, brother の語においては、o の文字で表わされるのか？

これら、および、他の多くの類似の問題において、解答は、ただ、言語の歴史的な研究によつてのみ、見いだされうる。これらの問題のいくつかは、非常に遠い昔に沈潜を必要とする。その時代にこそ、今日の我々まで保存されている現象が、根ざしているのであるから。

最後に、無数のこのような現象は、文法的構造の分野においても、見られる。例えば、なぜ、名詞 foot, goose, mouse が、⁽¹³⁾一般的な規則に反して、⁽¹⁴⁾複数形を語幹母

(1) 本稿においては、§ 20 の substratum theory, § 36 の celtic language, § 39 の social organization of germanic tribes がそれである。

(2) словарный состав

(3) фонетический и грамматический строй

(4) общность

(5) эти соответствия (соответствие)

(6) произношение

(7) написание

(8) области отношений (область отношения)

(9) звук

(10) буквы (буква)

(11) сочетание букв

(12) углубление

(13) существительные

(14) форм множественного числа

(1) 音の変化によつて形成する一方, sheep, deer, の名詞が, 単数と同じ型態を, 複数形においても, もっているのはなぜであるか? は, 現代的観点からは不可解である。あるいは, 又, (2) なぜ, 動詞, can, may, will は, 一般的な規則から外れて, 3 人称単数, 直接法, (3) 現在時制の語型において, 弁別的な語尾を, 全然もたないのかも不可解である。

これらすべての現象は, 英語の発達の, 多少とも, 遠い, あれこれの時期に遡り, 英語の発達の研究なくしては, 説明されえないものである。

これらの原因のいくつかには, それを知ることによつて, 英語の歴史の知識は, 英語の老練な教授者の, 理論的な準備における, 有機的な構成部分になる。

§ 2 それのみならず, 他の配慮も払われている, それは, この様な研究を教授者の準備に不可欠な要素となすものである。

あれこれの言語の研究は, 具体的なその言語の資料に対して, 現代の言語科学の適用に基礎をおき, 又, この言語科学の基礎は, 言語学の入門の課程において, 学ばれるものである。例えば, 音韻法則の概念の(4)ようなものの導入は, この課程で与えられるが, このような概念は, 英語の発達の一定の段階における, 英語に起つた具体的な現象の研究に, 適用されるのである。《言語の語イ組織の発達》とか, 《文法構造の完成》や, (5) その他多くの一般的な概念が, 対応する英語の諸現象に適用される。

それゆえ, 英語の歴史の流れにおいて, ソヴィエト言語学の一般的な原理と, 現代英語の具体的な事実の間には, 有機的な関聯がつけられている。これらの具体的な事実(6)は, 実際においては, 学生には理解されているものである。

§ 3 科学的な学科としての英語史の対象は, 英語の存在した最も古い時代から現代までの英語の発達の体系的な叙述である。

英語史の研究は, 現代英語を, より深く認識する可能性, すなわち, 複雑な発達の過程, 及び, 種々な事実の相互作用の結果として理解する可能性, 又, 他の言語の中における, 英語の位置を規定する可能性を与える。

これと並んで, 英語史は, 英国史, および, 英文学史に対する緊要な補助学科でもある。英語史の課題は, その事実の記録ばかりでなく, 英語の発達の合法則性の確立である。

言語における変化は, 国民の言語活動と, 創造において, 行われる。そして, 国民の生活の種々の面と関聯している。(7) それと同時に, この関聯は, 非常に複雑で, 多様であり, 英語の種々の面に, 様々に, 現われることをも又, 以上の事と共に, 注意することが必要である。また, 次の事を考慮するが妥当である。すなわち, あらゆる場合において, 英語の発達を

- | | | |
|---|---------------------------------------|------------------------------------|
| (1) корневой гласны | (2) изменение (корневого гласного) | |
| (3) единственное число | (4) глаголы (глагол) | (5) лица (лицо) |
| (6) цзъявительный наклонение | (7) настоящее время | |
| (8) языковедческая наука | (9) звуковой закон | (10) понятие |
| (11) определенный этап | (12) развитие словарного состав языка | |
| (13) совершенствование грамматического стороя | | |
| (14) советское языкознание | (15) общий принцип | (16) факт |
| (17) взаимодействие | (18) история Англий | (19) история английской литературы |
| (20) дисциплина | (21) закономерность | (22) изменения (изменение) |
| (23) речевая деятельность | (24) сознание | (25) строга |
| (26) сфера | | |

動かしている力⁽¹⁾を、設定することが、必ずしも容易とは限らない。それゆえ、例えば、語イ組織の発達⁽²⁾が、英語の使用する人の、社会的な生活⁽³⁾の条件から、比較的容易に説明されるとしても、音韻組織⁽⁴⁾の発達に関しては、問題は、よりずつと、難かしいことが分る。この分野においては、今後の研究を必要とする、まだ多くの未解決の問題が残っている。

§ 4 英語史は、他の諸科学⁽⁵⁾と接触している。英語史は、英国民の生活の、具体的な歴史的条件と、英語の発達との関聯において、英国史に立脚している。英語史は、現代英語を研究している、他の諸科学——理論音声学⁽⁶⁾、文法論⁽⁷⁾、語イ論⁽⁸⁾とも、密接に關聯している。英語史は、英語の発達における、音韻現象⁽⁹⁾、文法現象⁽¹⁰⁾、および、語イ的現象を表わし、又、英語の現在の体系の起原を設定する。

§ 5 英語の発達の研究において、この発達の、一般的な方向⁽¹²⁾についての問題が、当然起つてくる。英語の文法的構造は、すべての言語におけると同様に、その歴史において、漸進的に、発達している。この発達は、まさに、何によるものであるか？ 英語の語イ組織は、英語の歴史を通じて、変化し、又、豊かになつてきた。この本の叙述の展開につれて、この様な問題、および、他の類似の問題を、我々は、取扱わなければならない。この際、このような多くの問題に関して、斯学における、色々な見解⁽¹³⁾が、述べられていることに、注意しなければならない。可能である場合には、我々は、この本の叙述の中で、これらの問題を考察し、現在の観点から、根本的な問題を、特に注意する積りである。

§ 6 本書における英語史の記述は、次のシステムにより、組立てられた。各章の最初において、ある一定の時間に、その中で英語が発達してきた、具体的な歴史的事情が叙述される。更に、これと密接に関連して音韻の発達⁽¹⁴⁾および、正字法⁽¹⁵⁾の変化⁽¹⁶⁾の叙述が続いている。各篇は、文法構造と、その時代において、そこに生じた変化の叙述⁽¹⁷⁾で、終つている。本書のこのような構成は、各時代の、英語の完全な、又、全面的な特性をなるべく与えることを目的としている。

ゲルマン諸語総説⁽¹⁹⁾

§ 7 広大なインドヨーロッパの語族⁽²⁰⁾、この語族に、ヨーロッパの諸語⁽²¹⁾*の圧倒的多数は、属しているのであるが、この印欧語族は、いくつかの下位語族から成つている。ゲルマン語は、この下位語族の一つを構成している。

- | | |
|--|------------------------------|
| (1) движущие силы (движущая сила) | (2) общественное бытие |
| (3) фонетический строй | (4) область |
| (5) научные дисциплины (научная дисциплина) | (6) теоретическая фонетика |
| (7) грамматика | (8) лексикология |
| (9) лексические явления (лексическое явление) | |
| (10) современная система языка | (11) происхождение |
| (12) направления (направление) | |
| (13) суждения (суждение) | (14) историческая обстановка |
| (15) фонетическое развитие | |
| (16) орфография | (17) изменение в орфографии |
| (18) характеристика | |
| (19) общие сведения о германских языках (общее сведение) | |
| (20) индоевропейская семья языков | (21) ветви (ветвь) |

* フィン語、エストニア語、マリ語、モルドヴァ語、チュヴァシ語；グルジア語、アゼルバイジャン語や若干の他のカフカースの言語；ハンガリー語やバスク語は除かれる。

現代において、ゲルマン諸語は、多くの国に拡がっている。ドイツ語⁽¹⁾——ドイツとオーストリアと、スイスの一部、オランダ語⁽²⁾——オランダ、スウェーデン語⁽³⁾——スウェーデン、ノルウェー語⁽⁴⁾——ノルウェー、デンマーク語⁽⁵⁾——デンマーク、アイスランド語⁽⁶⁾——アイスランド、英語——英国ばかりでなく、又、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリア、および、大英帝国の諸聯邦の諸国の一部にも、又、拡まつている。

古代においては、ゲルマン諸語の拡散地域は、非常に、限定されていた。それゆえ、一世紀においては、ゲルマン語は、現代のドイツ、および、ドイツと密接に隣接している地域、および、スカンディナヴィアにおいてのみ話された。

ゲルマン語は、非常に多くの特徴によつて、三つの支語族に、分割される：1) 東ゲルマン語族⁽⁷⁾、2) 北ゲルマン語族⁽⁸⁾、3) 西ゲルマン語族⁽⁹⁾。

東ゲルマン語族は、すでに、何世紀もの間に、死語である。古代東ゲルマン諸語から、我我には、唯、一語だけが、良く知られている。すなわち、ゴート語である。この言語で書かれた膨大な書写文献が、我々に、残っている：4世紀に、ゴート族の司祭、ヴィルフラによつて、ギリシャ語から訳された福音書である。すべての北ゲルマン、および、西ゲルマンの諸語は、今日に至るまで、保存されている。ゲルマン諸語は、印欧語族の中で、根本的なくつかの特性⁽¹⁰⁾によつて、特別な支語族として、分離される。この特性の存在は、あれこれの言語を、ゲルマン支語族に帰するための規定となる。このような特性は、後に、研究されるであろう。(§ 15 および、以下)。

古代ゲルマン諸族と、その分類⁽¹¹⁾

§ 8 ここで、どのような種族が、古代ゲルマン諸語を話していたかの問題にもどる。研究されているこの時代における、古代ゲルマンの種族は、《未開》⁽¹²⁾の術語で示される社会的な発展段階に見出される。エフ、エンゲルスは、その《古代ゲルマン族の歴史に関して》⁽¹³⁾の、最初は原文で、1935年に、ロシア語の翻訳で、発表された、特殊な小論文で、又、その著作《家族、私有財産、および、国家の起原》⁽¹⁴⁾の、7章と8章において、古代ゲルマン種族の社会的構造と、ゲルマン国家の発生の、詳細な特性を与えている。

§ 9 古代ゲルマン族に関する我々の概説は、古代の作家の証言に基いている。彼等は、種々の理由によつて、ゲルマン族に興味を持っていたのである。

これ等の著述家⁽¹⁵⁾の中で、もつとも古代の者は、ギリシアの旅行家であり、また、天文学者でもあるピイフィ⁽¹⁶⁾(あるいは、ピチェアス, Pytheas)は、マシーリアの出であり、(今日のマル

- | | | |
|---|--|---|
| (1) немецкий язык | (2) голландский язык | (3) шведский язык |
| (4) норвежский язык | (5) дотский язык | (6) исландский язык |
| (7) группы (группа) | (8) восточногерманские языки (sig. язык) | |
| (9) северногерманские языки | (10) западногерманские языки | (11) мертвый язык |
| (12) готский язык | (13) письменный памятник | (14) готский епископ |
| (15) Вульфилла | (16) евангелие | (17) характерные признаки (характерный признак) |
| (18) германская ветвь | (19) древнегерманские племена | (20) варварство |
| (21) Ф. Энгельс | (22) К истории древне германцев | (23) подлинник |
| (24) происхождение семьи, частной собственности и государства | (25) писатель | |
| (26) свидетельства (свидетельство) | (27) автор | (28) Пифь |

セーユ⁽¹⁾ 紀元前4世紀の人であつた。彼は自分の船で、ヨーロッパの西岸を廻航した。そして、ラ・マンシ⁽²⁾を横断した。そして、多分、バルチック海⁽³⁾に達したであろう。ピシアスの著作⁽⁴⁾は、我々には、残されていない。唯、わずかの断片⁽⁵⁾が残されている。これらの断片は、画紀的な著作《地理学》⁽⁶⁾の著者（紀元後1世紀）、ギリシアの地理学者ストラボン⁽⁷⁾や、老プリニー⁽⁸⁾の諸著作に引用されている。

次の時代の著述家は、ローマの政治家であり、司令官でもある、作家、カイ、ユーリー、セザール⁽⁹⁾（B. C, 100—44）である。そのガリア戦記覚え書⁽¹⁰⁾（“Commentarii de bello gallico”）において、シーザーは、ライン河において戦闘し、交渉があつた、ゲルマン族に数章をささげている。ゲルマン族は《氏族、種族として》生活していたというシーザーの記述は、この時代には、ゲルマン族には、氏族制度が存在していたことの、明確な証言であるので、最も貴重なものである。シーザーのこの著作から、ゲルマン族は、この時代においては、遊牧民⁽¹¹⁾の生活様式⁽¹²⁾を営んでいたことを知る。シーザーより、約一世紀後に、老プリニー（23—79, A. D.）は、その大著《博物学》（“Naturalis Historia”）において、ゲルマン族について書いた。プリニーは、エンゲルスが模範的であると言つている、ゲルマン種族の分類を、我々に残した。

§ 10 プリニーによつて与えられた、紀元後一世紀のゲルマンの種族は次の六つのグループに分けられる。

1 ビンデル族⁽¹⁶⁾（この中には、特に、ゴート族⁽¹⁷⁾とブルグント族⁽¹⁸⁾が入る）；彼等は、ゲルマン族によつて占有されていた地域の東方の地に生活していた。

2 イングボン族⁽¹⁹⁾（あるいは、イングベエオン族⁽²⁰⁾）；彼等は、ゲルマン族によつて占められていた地域の北西部に住んでいた。すなわち、現代のオランダを含む北海の沿岸地域である。

3 イステボン族⁽²²⁾（あるいは、iskeボン族⁽²³⁾）；彼等は、ゲルマン族によつて占められていた南方の地域に、すなわち、現在、南部ドイツの地域に住んでいた。

4 ゲルノミオン（あるいは、ゲルミノン族）；彼等は、ゲルマン族により占められていた地域の南部、すなわち、現在の南ドイツに住んでいた。

5 ペーフキン及びバスタルン族⁽²⁴⁾；ルーマニアの古代民族ダク族⁽²⁵⁾と隣接して居住していた（すなわち、現代のルーマニアの地域に）。

6 ギルレビオン族⁽²⁶⁾、スカンディナヴィア半島に居住していた*。プリニウスのこの分類を引用して、エフ・エンゲルスは、ドイツの有名な言語学者ヤコブ・グリムに続いて、この分類に唯一つの訂正を加えた。彼は、プリニウスの第5番目の種族（ペーフキン及びバスタルン族）は、第1番目のヴィンディル族をも含むべきであることを示した。このためには

- (1) Марсель (2) Ла-Манш (3) Балтийский море
 (4) сочинения (сочинение) (5) отрывки (отрывок) (6) География
 (7) Страбон (8) Плиний Старший (9) Кай Юлий Цезарь
 (10) Записка о галльской войне (11) Райн (12) роды и родовые союз
 (13) родовой строй (14) кочевой образ жизни (15) Естественная история
 (16) Виндлы (17) готы (18) бургунды (19) ингевоны (20) ингвеоны
 (21) Голланд (22) истевоны (23) искевоны (24) певкины (25) бастарны
 (26) даки (27) Румын (28) гиллевион (29) Яков Гримм
 * cf. C. Plinius Secundus. Naturalis Historia IV, 26, 28.

二つの考慮が払われている。第一は、第5群の種族は、ヴィンディル族と同様に、東方に住んでいた。第二に、プリニウスは、この群にいかなる一般的な名称を与えずに、その構成に表われる唯二つの代表的な種族を挙げている。(ペーフキン及びバスタルン族)、それ故、もし、プリニーの第5群の種族を第一群に含めるならば、我々は、次のようなゲルマン族の分類をうる。

1) ヴィンディル族, 2) インゲボン族, 3) イスチボン族, 4) ゲルミオン族, 5) ギルレヴィオン族。

§ 11 紀元前一世紀のプリニーによつて行われたこのゲルマン族の分類が、根本的に全く言語的な性質にもとずいて19世紀の言語学者によつてなされたゲルマン諸語の分類といかなる関係を有するかを、今や説明すべきである。もしこの二つの分類が両立することが容易に分かるならば、これは、プリニーの分類の確実さのより一層の証拠となるであろう。このようにして、エフ・エンゲルスは、二つの分類は、全く自然に次の型に重ねられると述べている。*

ゲルマン種族	ゲルマン諸語
1 ヴィンディル……………	東ゲルマン語
2 インゲボン } ……………	西ゲルマン語
3 イスチボン } ……………	
4 ゲルミオン } ……………	
5 ギルレヴィオン……………	北ゲルマン語

それゆえ、プリニーにより提起されたゲルマン種族の分類と、19世紀の言語学者⁽¹⁾によつて研究された古代ゲルマン諸語との比較研究は、プリニーの分類の正しさを証明する。この分類は、現代には一般に認められている。

プリニーより後の次の時代には、ローマの著述家が、ゲルマン語族について書いている、高名な歴史家⁽²⁾、コルネリウス、タキトス⁽³⁾である。彼のあまり大部ではない著作《ゲルマニア⁽⁴⁾》(完全な表題: “De situ, moribus et populis Germaniae”)と2世紀にわたる古代ゲルマン諸族の社会的な構造の特徴を与えている。タキトスの著作を、エス・エンゲルスは十分に、その著作《古代ゲルマン種族の歴史について》⁽⁵⁾において用いている。

ゲルマン種族の文字⁽⁶⁾

§ 12 古代ゲルマン種族の文字について言えば、私は、まず第一に、この種族が使用したアルファベット⁽⁷⁾を考察する。第二に、主要な書写文献⁽⁸⁾を考えてみよう。

アルファベット

§ 13 ゲルマン族は、その独自の書写文献の創作に際して、三つの異なるアルファベットを用いた。そして、これらのアルファベットは、時代的には、相重なっている。

(1) языковеды (языкавед) (2) историк (3) Корнелий Тацит (4) Германия
 (5) общественный строй (6) письменность германских племен
 (7) алфавиты (алфавит) (8) письменные памятники (письменный памятник)

* Ф. Энгельс. истории древних германцев, москва, 1938, 21 pp.

古代ゲルマン文字で書かれた一番古い文献は、いわゆるルーン・アルファベット⁽¹⁾、すなわち、
 ルーン文字⁽²⁾で書かれた。ルーンアルファベット、すなわちルーン文字のアルファベットは、
 我々には親しいアルファベットには似ていない。それゆえ、例えば「a」の音を示すルーン
 文字は、F⁽³⁾のような外観を持ち、「e」の音を我々はルーン文字M⁽⁴⁾で表わす等である。ずつ
 と以前から、ルーンアルファベットの起原の問題が起つたのは当然である。たとえ、一致し
 たこの問題の解明は、現代までえられてはいないとしても、研究者達の意見は、大体、次の点
 に帰している。すなわち、ゲルマンのアルファベットは、ラテンアルファベットから借入さ
 れたか、あるいは、おそらくは、ラテン語に近い、ある他のイタリック語のアルファベット⁽⁵⁾
 から借用されたものであろう。ルーン文字において、ラテン文字がうけた、この変容は、大部
 分は、後期の古代ゲルマン族における文字の書き方によつて説明される。問題は、最初に、
 文字は、なんらかの染料によつて書かれることはなく、木や骨に刻まれたり、あるいは、石
 に刻まれたのである。木に刻む場合は、あれこれのラテン文字⁽⁶⁾の形からでた、完全な線は書
 かれなかつた。それゆえ、例えば、水平な線は引かれなかつた。たとえ、彫刻用の道具によ
 つて、水平の線が引かれるとしても、すなわち、木の繊維の間に道具で、水平な線が引かれ
 るとしても、その道具は、ただその繊維をたがいに分けるだけである。が、彼がその刃物を
 引き出せば、線維はふたたび1線になつてしまい、いかなる線も引けなくなる。これゆえ、
 ルーン文字⁽⁷⁾の構成⁽⁸⁾においては、水平な線がないのである。ルーン文字は斜線⁽⁹⁾で代用されてい
 るのである。非常に骨折つて、木に、曲線を刻むことができた。それゆえ、その曲線は、ロー
 マ文字の線で代用されるのである。ルーン文字のいくつかの他の特性は、まだ、十分に説明
 されていない。それゆえ、ルーン文字においては、上から下の隅に行く線、曲つた線は、さ
 けられている。曲線は短縮され、そして、下の隅、あるいは、上の隅からただ、その文字の
 線の間までしか達していない。ラテン文字を、ルーン文字に変える実例としては、次のよ
 うな場合があげられる。Eは、M⁽¹⁰⁾になり、HはH⁽¹¹⁾、SはS⁽¹²⁾、あるいはH⁽¹³⁾となる。

ラテン文字のDからルーンの記号D⁽¹⁴⁾が発達した。これは歯茎無声摩擦子音（現代英語の
 think あるいは、path の場合における [θ]）を表わす。

ルーンアルファベットの創造された時代と場所は、はつきりとは定められない。が、こ
 の文字は、ゲルマン諸族の植民地⁽¹⁵⁾が、ローマ帝国の植民地と接触する地方で大体、紀元後II
 —III世紀に、創られた（すなわち、ドナウ河の流域で）、ということが推測されるだけであ
 る。最も初期のルーン文字は、明らかに、この時代にまで遡る。

ルーンアルファベットは、多様なゲルマン諸族によつて用いられた。ゴート族、アングロ
 ・サクソン族⁽¹⁶⁾、そして、スカンディナヴィア諸族⁽¹⁷⁾によつて。ルーンの文字は、非常に多くが、
 スカンディナヴィア半島の大きな石碑に残っている。又、動かすことのできる物にも、文字が

- | | | | |
|--|-----------------------------|----------------------------|---------------------------|
| (1) рунический алфавит | (2) руны | (3) руна | (4) мнение исследователей |
| (5) итальянский алфавит | (6) руническое письмо | (7) буквы (буква) | |
| (8) краска | (9) начертание~inscription | | |
| (10) горизонтальные линии (горизонтальная линия) | (11) состав рунических букв | | |
| (12) косые линии (косая линия) | (13) кривые линии | (14) руническое письмо | |
| (15) особенности (особенность) | (16) переделка~alteration | | |
| (17) переднеязычный глухой щелевой согласный | (18) территория | | |
| (19) надписи (надпись)~inscription (銘刻した文字) | (20) германские племена | | |
| (21) готы | (22) англо-саксы | (23) скандинавские племена | (24) камни (камень) |

残っている。(1) 槍、かぶと、指環等に)。英国には、現在まで、いわゆるルーンの十字架が(4)残っている。(スコットランドの) ルットヴェル村にある大きな石の十字架であり、その上に、十字架に関する、宗教詩の一部分が、ルーン文字で刻まれている。他の有名な初期の英国にあるルーンの文献は、鯨の骨で作られた小箱(その持主の名にちなんで、いわゆる、(6)《フランクの小箱》と呼ばれているもの)に書かれた文字である。(9)この碑文は、鯨の骨に関するテーマのいくつかの戦争詩である。

その後、ルーンアルファベットは、種々のゲルマンの種族において、様々な変容を遂げてきた。新しい文字が(11)補足された。そして、いくつかの古いものは、慣用からすたれた。それゆえ、(13)＜古代＞と(14)＜近代＞のルーンアルファベットを分けるのが慣例である。

アルファベットの第二の時期、これを我々は、ゲルマン族において見るのであるが、これは Wulfila のゴートアルファベット(15)である。Wulfila によつてなされたゴート語による聖書の翻訳は、独自のアルファベットで書かれている。この基礎となつているものはギリシア・アルファベット(17)に、いくつかのラテン・アルファベットと、ルーン・アルファベット(18)を補足したものと考えられる*。現代におけるゴート語のテキストの転写版には、ラテン語の用いられるのが慣例である。

アルファベットの第三、そして、最後の時期のゲルケン諸族が用いたものは、ラテンのアルファベットである。書く技術の変化と関連して、ラテン文字は、ルーン文字を駆逐した。(刻む技術は、羊皮紙とかパピルス(21)え、染料を加える技術と交替した。)(22)そして、キリスト教の広布と関連して、ラテン語で書かれた、キリスト教の種々の写本(26)が表われた。ラテン・アルファベットは、古代ゲルマン語に存在していた、すべての音を表現するためには、当然適していなかった。それゆえ、ラテン・アルファベットは、あれこれの古代ゲルマン語の具体的な音声状況に依存して補足されたり、調整されたりする過程を経てきた。磨擦子音[θ]の表示のために、特別に、かつてラテン文字の D から生じたルーン文字の Þ が用いられた。古代英語におけるラテン・アルファベットの組織と音声と文字の関係は、§ 48 と § 50 で詳説される。

ゲルマン諸語の書写文献

§ 14 一番古い書写文献は、すでに述べたように、ルーン碑文であり、その一部は、恐

- | | | | |
|--|--|------------------------|----------------------|
| (1) копьё | (2) щлем~helmet | (3) кольцо | (4) Рутвелский крест |
| (5) религиозная поэма | (6) рунический памятник | (7) надпись | (8) надпись |
| (9) стихотворные строки | (10) видоизменения (видоизменение) | | |
| (11) новые знаки (новый знак) | (12) употребление | (13) старший | (14) младший |
| (15) готский алфавит | (16) своеобразный алфавит | (17) греческий алфавит | |
| (18) добавление | (19) латинские транскрипции (латинская транскрипция) | | |
| (20) техники письма | (21) пергамент | (22) папирус | (23) краски (краска) |
| (24) христианство | (25) тексты (текст) | (26) латинский язык | |
| (27) древнегерманский язык | (28) изображение | | |
| (29) фонетические условия (фонетическое условие) | (30) переднеязычный щелевой | | |
| (31) система латинского алфавита | (32) звуко-буквенные соотношения | | |
| (33) рунические надписи (руническая надпись) | | | |

* ゴート語のアルファベットを、いわゆるゴシックと混同してはならない。ゴシック文字は現在のドイツ語の文献に用いられ、またラテン文学の変種である。(原註)

らく、2, 3世紀に遡るものであろう。しかし、これらは、多少とも、断片的な写本であり、完全に、古代ゲルマン諸語の構造に関する推測の材料は少ししか与えない。広く、一貫性ある書写文献の中で最も古いものは、Wulfila によるゴート語の聖書である(4世紀)。これは、いくつかの手写原稿で保存されている。この中で重要なものは、いわゆる《銀の法典》(“codex Argenteus”, 6世紀)でスウェーデンのウプサラの大学の図書館に保存されているものである。

年代順で次に続く一貫性をもつ文献は、古代高知ドイツ語の《Hildebrand の讃歌》であり(8世紀のものであるとされている、叙事詩の断片)、また、《Beowulf》(古代英語の叙事詩で、明らかに、8世紀に作られ、我々には、10世紀の手写本で伝えられているもの)である。

さらに、古代スカンディナヴィアの叙事詩の写本で、いわゆる《最古の Edda》の形で統一されている選集がある。この中には、13世紀に書かれた讃歌が含まれている。

ゲルマン諸語の叙情詩の文献は、いわゆる頭韻詩で書かれた。この詩形構造の基本法則は、次のように要約されうる。各詩行は二つの行(半行)よりなっている。が、各半行には、二つの強勢をおかれたシラブルがある。更に、最初の半行で、一つ強勢がおかれたシラブルの最初の子音は、第二の半行における、一つ強勢がおかれた語の最初の子音と一致する。残りの強勢をおかれたシラブルは、第一の半行の最初の子音と一致する。それゆえ、各詩行において、最低2つ、最高4つの強勢がおかれた、全く、同一の子音で始まるシラブルがある。例えば次の Beowulf の詩行に見られるように。

Wæs sēg rimma ȝǣst ȝrendel hātan
(その魔神はグレンデルと呼ばれた)

もし、強勢されたシラブルが、母音で始まるならば、すべての母音は、互に韻をふむ。この事は、例えば、《Beowulf》の次の詩行に見られる。

Him sē yldesta andswarode
(彼に最年長の者が答えた)

このような、母音相互の頭韻は、恐らく、次のことによつて説明される。すなわち、母音で始まる語にあつて、母音の前では、特別な音——いわゆる声帯の閉鎖によつて作られる《強帯気音》(英語の声門閉鎖音)が発音される。それゆえ、本質的には、この音に、押韻はその基礎をおいているのである。

-
- (1) отрывочные тексты (отрывочный текст) (2) суждения (суждение)
 (3) готское евангелие Вульфилы (4) рукописи (рукопись) (5) Серебряный Кодекс
 (6) Швеция (7) Упсал (8) связанные памятники (связный памятник)
 (9) Песнь о Гильдебранде (10) эпическая поэма (11) отрыв эпической поэмы
 (12) Беовульф
 (13) древнеисланские эпические тексты (древнеисланский эпический текст)
 (14) сборник (15) поэтические памятники (поэтический памятник)
 (16) аллитерационный стих (17) полустиге (18) слог (19) Грендел
 (20) гласный звук (21) аллитерация (22) твёрдый приступ (23) голосовые связи
 (24) смычка

ゲルマン諸語の音韻的特性⁽¹⁾

第一次子音推移⁽²⁾

§ 15. ゲルマン語派の最も本質的な特徴は、子音の体系⁽³⁾、すなわち、第一次子音推移の存在である。第一次子音推移の法則で記述された法則性は、19世紀の初頭に比較言語学によつて確められた。この点において、重要な貢献は、デンマークの言語学者ラズムス・ラスク⁽⁴⁾ (Размус Раск 1787～1832) と有名なドイツの言語学者であり、民話の採集者の Jacob Grimm⁽⁵⁾ (1785～1863) によるものである。この法則の最初の体系的な記述は、1882年に現われた Jacob Grimm の⁽⁶⁾ ≪“Deutsche Grammatik”⁽⁷⁾≫ の第二巻において与えられた。他のインドゲルマン諸語と対応するゲルマン諸語（まず第一に、ラテン語、ギリシア語、サンスクリット、ロシア語）を対置して、我々は、緊密な類親関係を観察する。この連関は、次の表によつて表現されよう。

音		例	
IE	Gme		
p	f	Lat. pater ‘отец’	fadar
		Gk. patēr	E. father
		Skt. pitar	Gr. Vater
		Lat. plēnus ‘полный’	Goth. fulls
		Gk. plēos	E. full
		Russ. полныйй’	Gr. voll
t	p	Lat. trēs ‘трѣ’	Goth. preis [θrizs]
		Gk. treis	E. three
		Lat. tū ‘ты’	Goth. pū
		Russ. ты	
k	h	Lat. noctem ‘ночь’ (acc.)	Goth. nahts
		Gk. nýkta	Gr. Nacht
		Lat. octō ‘восемь’	Goth. ahtau
		Greek. oktō	Gr. acht
b	p	Russ. слабый	Goth. slēpan ‘спать’
			E. sleep
		Russ. болото	E. pool ‘лужа’

(1) фонетические особенности германских языков

(2) первый перебой согласных この子音の推移は第二次推移から区別して第一次と呼ばれるのがふつうである。この第二次推移は高地ドイツ語の諸方言（七世紀から八世紀のドイツ低地の諸方言）において起つた。（原註）

(3) германские ветви (германская ветвь)

(4) система согласных звуков (5) закономерности (закономерность)

(6) сравнительный языкознание (7) заслуга (8) Размус Раск (9) Яков Гримм

(10) немецкая грамматика (11) твердые соотношения (твердое соотношение)

d	t	Lat. duo ‘два’	Goth. twai
		Gk. dyo	E. two
g	k	Lat. decem ‘десять’	Goth. taihun [‘teχun]
		Gk. déka	E. ten
		Lat. iugum ‘игó’	Goth. juk
		Russ. игó	E. yoke
bh	b	Lat. grānum ‘зерно’	Goth. kaúrn [korn]
			E. corn
		Skt. bhrātār ‘брат’	Goth. broþar
		Lat. frāter	E. brother
		Gk. phrātōr	
		Skt. bharami ‘несу’	Goth. bairan [‘beran]
dh	d	Lat. fero	E. bear
		Gk. phérō	Gr. ge-bären ‘рождать’
		Skt. madhu ‘мед’	OE. medu
		Russ. мед	
		Skt. madhyas ‘средний’	Goth. midjis
		Lat. medius	
gh	g	Lat. hostis ‘враг’	Goth. gasts ‘гость’
		Russ. гость	Gr. Gast.

この表において見られるように、インドゲルマンとゲルマン語の子音間の対応は、三つのカテゴリーに分類される。

1 インドヨーロッパの無声破裂音⁽¹³⁾ (**p, t, k**) は、ゲルマン語においては、無声摩擦音⁽¹⁴⁾ (**f, þ, h**) に対応する。

2 インドヨーロッパの有声破裂音⁽¹⁵⁾ (**b, d, g**) は、ゲルマン語では無声の破裂音 (**p, t, k**) に対応する。

3 インドヨーロッパの有声破裂帯気音⁽¹⁶⁾ (**bh, dh, gh**) は、ゲルマン語の有声破裂音⁽¹⁷⁾ に対応する (**b, d, g**)。

§ 16 第一次子音推移を基礎として表われたすべての個々の対応が、一様に、明白ではないことは注意すべきことである。まず第一に、全く確証ある例は、IE. **b**—Gmc. **p** の対応にはない。しかし、**p** の音は、古くから、ゲルマン語の語において、なぜだか、概して、非常にまれにしかないことを認めねばならない。引用された例 (Russ. слабый—E. sleep と Russ. болото—E. pool) は、意味の完全な一致に欠けているにもかかわらず、満足すべきものと考えうる。

まず第一に、最後の群の対応 (IE. の有声破裂帯気音—ゲルマン語の有声破裂音に対応す

(12) соответствия (соответствие) (13) глухие смычные (глухой смычный)

(14) глухие щелевые (глухой щелевой) (15) звонкие смычные

(16) звонкие смычные придыхательные (17) совпадения (совпадение ~ coincidence)

*: 文字 **p** は古代ゲルマン語では無声前舌摩擦音を示し、英語の単語 thin, path, truth の **th** の語結合によって示される音のように発音される (原註)。

る)を扱う方が適切であろう。問題は、有声破裂帯気音は、事実、サンスクリット⁽¹⁾のみに見られる。しかるに、他のゲルマン語を除く IE の諸言語においては、有声破裂帯気音は一方では、(ラテン語やギリシア語におけるごとく)、無声摩擦音、他方においては、(ロシア語におけるように)、無帯気の有声破裂音に対応している。この様な場合においては、この語のインドヨーロッパの語形の代表として、サンスクリットに存在する語形をとるのが慣例である。なぜならば、サンスクリットは、特に、一番古い子音の状態を保存していると推定されるからである。

特に困難なのは、第一次推移の一番最後の要素である。すなわち、IE の **gh** と、ゲルマン語の **g** の対応である。この場合には、対応するサンスクリットの語形はない。有声破裂帯気音の **gh**^{*} は、ラテン語の **h** (*hostis*) と、ゲルマン語の **g** (Goth. *gasts*) の対応に基いてのみ、再構されうるのであり、⁽⁷⁾ **gh** と ⁽⁸⁾ **g** の意味の間の意味連関に関しては、この語の第一の意味 ⁽⁹⁾ **gh** ‘見知らぬ人’ から再構される。この意味から、次の二つの意味が発達した。1) ⁽¹⁰⁾ **gh** 敵意ある他人、⁽¹¹⁾ **gh** ‘敵’、2) ⁽¹²⁾ **gh** 親しい見知らぬ人、⁽¹³⁾ **gh** ‘お客’。

インドヨーロッパおよびゲルマン諸語における第一次推移の法則により再構された子音⁽¹⁴⁾ 対応は、次のような意味において、科学的に説明される。すなわち、ゲルマン語の音は IE の言語基底に存在した、⁽¹⁵⁾ 最初の、IE の音の発達の結果を示している。この意味において、第一次(子音)推移の法則は、次のような定式を使う: IE の **p** は、ゲルマン語においては、**f** に変った。IE の **t** は、ゲルマン語においては、**p** に変った。あるいは、短かくして

IE.	Gmc.	IE.	Gmc.	IE.	Gmc.
p	> f	b	> p	bh	> b
t	> p	d	> t	dh	> d
k	> h	g	> k	gh	> g

ここでは、記号>は<に変わる>を表わす。

§ 17 第一次子音推移の法則に対して、いくつかの補足的な註を、次の場合には加える必要がある。すなわち、種々の原因によつて、ゲルマン語において、第一次子音推移の一般法則によつて期待される発達の結果でない場合を、我々は知つている。

まず第一に、次の様な対応を我々は認めることができる。

	IE.	Gmc.
Lat.	<i>noctem</i> ‘ночь’	Goth. <i>nahts</i>
Gk.	<i>nýkta</i>	Gr. <i>Nacht</i>

- (1) санскрит (2) звонкие смычные без придыхания (придыхание ~ 帯気)
 (3) представление (4) форма (5) состояние
 (6) соответствующие формы санскрита (соответствующая форма—)
 (7) восстановление (8) враг (9) гость (10) чужеземец
 (11) враждебный чужеземец (12) дружественный чужеземец
 (13) германские звуки (германский звук) (14) язык-основа (15) закон первого перебора

(1) дополнительные замечания (дополнительное замечание)

* 星標—アステリスク(*)は、与えられた音、あるいは語形は、テキスト(写本)において確認されず、再構されたことを示している(原註)。

Lat. octo ‘восемь’	Gr. acht
Gk. októ	Goth. standan
Lat. stare ‘стоять’	E. stand
Gk. histemi ‘ставлю’	
Russ. стоять	

ここで、我々は、IE の **t** は、推移⁽¹⁾を受けなかつたことを知る。すなわち、**p** に変らずに、ゲルマン諸語において、**t** の形で残存している。この特別な発達は、与えられた場合において、この音が現われる、音声環境⁽²⁾によつて説明される。この音の前には、上のすべての語において、無声摩擦音⁽³⁾ (**h** あるいは **s**) が立つ。もし音 **t** が、一般的法則に一致して、**p** に変るならば、二つの摩擦音の連続結合を使つた、子音結合⁽⁴⁾がえられる。が、その様な音結合はゲルマン諸語において、さけられている。それゆえ、このような場合においては、子音の **t** は、周囲の音声環境⁽⁵⁾によつて推移を受けない。

より複雑な現象は、Verner (Вернер) の法則に普遍化されている。

ヴェルナーの法則

§ 18 ゲルマン語においては、いくつかの場合に、第一次子音推移の法則に対応しない現象が、一部の子音において見られることは、すでにのべた。すなわち、インドヨーロッパの無声破裂音のいくつかの語においては、ゲルマン語では、予想される無声摩擦音ではなくて、有声破裂音が対応する。例えば、Lat. pater, Gk. patēr, Skt. pitar, Goth. fadar, OE, fæder; この場合には、IE. の **t** は、ゲルマン語では **d** に対応している。同様に、Gk dekás (dozens)—Goth. Tigus; この場合には、IE. **k** は、Gmc. **g** に対応する。この外見上の第一次推移法則からの例外は、1877年に、デンマークの言語学者 karl Verner によつて与えられた。

Verner の法則の名を与えられている法則において、第一次推移の法則に対する次の補足的定式⁽¹¹⁾が与えられている。もし IE の無声破裂音に、アクセントのない母音が先行するならば、第一次推移に基いて、これから作られた無声摩擦音は有声化される。しかし、その後で、この有声摩擦音は、有声の破裂音⁽¹²⁾に⁽¹³⁾変る。すなわち、ギリシア語 patēr ‘отец’⁽¹⁴⁾においては、無声破裂子音 **t** が、強勢のない母音の後に立つ。このような条件においては、推移によつて、**t** からえられた無声摩擦音 **p** は、有声化される、すなわち、有声摩擦音 **ð** に変る。これは、また後に、有声破裂音の **d** に推移する。それゆえ、このような場合においては、我々は、第一次推移からの例外を問題としているのではなくて、推移に対して、ゲルマン語において得られた、子音のそれ以後の発達を問題としているのである。まず、なによりも、強勢の位置によつて、お互に分離している一対の語の対置によつて、Verner の法則の本質を示すことができよう。

例: Gk. déka, Russ. десять—Goth. taihun, が, Gk. dekás, Russ. десяток—Goth. tigus.

- (1) перебой (2) вид (3) фонетические условия (фонетическое условие)
 (4) глухой щелевой (5) общие закономерности (общая закономерность)
 (6) окружающие фонетические условия (7) закон вернера
 (8) кажущийся исключения (9) дотский лингвист (10) Карл Вернер
 (11) формулировка (12) звонкий щелевой (13) звонкий смычный
 (14) германское слово (15) глухой смычный согласный (16) неударный гласный

それゆえ、Verner の法則の作用によつて、推移と対応して無声破裂音から生じた無声摩擦音以外に、第一次推移と関係のない、一つの無音摩擦音 **s** が現われる。もし、これに先行する母音が、強勢⁽¹⁾を持たないならば、**s** は、ゲルマン語においては、**z** に推移する。更に、後に、この **z** は、西ゲルマン、および北部ゲルマンの諸語において（しかし、ゴート語においてではないが）**r** に推移した。この後者の現象は、**ロタスイズム** の名を与えられている。これは、次のような語の対置によつて、弁別的に示されう。Goth. *hausjan* 'hear' — OE *hieran*, Gr. *hōren*; Goth. *laisjan* 'learn' — OE, *læran*. Gr. *lehren*.

それゆえに、動詞語型変化の体系⁽³⁾において、しばしば見られる現象は、ある語型⁽⁵⁾においては、強勢は語根⁽⁶⁾におちるが、他の語形においては、接尾語⁽⁷⁾におち、ある動詞の型態の体系においては、語根の変異形⁽⁸⁾が用いられ、ヴェルナーの法則に対応する子音によつて、互に分離されているのである。動詞の語型変化の体系の領域においては、ヴェルナーの法則による交替⁽⁹⁾が起る。この交替は、通常、子音の文法的交替⁽¹⁰⁾と呼ばれる。文法的交替の最初の体系は、次のような階を含んでいた。**f/b**, **P/d**, **h/g**, **hw/w**, **s/r**.

時の経過と共に、この体系は、個々のゲルマン語、一部は、古代英語において働いた音韻変化⁽¹¹⁾の結果として、曖昧にされたいくつかの要素に存在している。我々は次に、古代英語の文法的交替の体系を研究しよう。

古代英語における強勢の体系⁽¹²⁾

§ 19 ヴェルナーの法則と関連して、ゲルマン語において、再構された子音体系が強勢の状態に依存していることは、ゲルマン語の起源の問題の解明に対して、第一位の意義をもつ、今一つの問題を提起する。事実⁽¹³⁾は、すべてのゲルマン語の書写文献⁽¹⁴⁾において、その一番古いものをも含めて、強勢は、常に語の最初の音節⁽¹⁵⁾におかれていることである。これは、一方においては、強勢のおかれていない母音の接尾語の扱いから、他方においては、頭韻から明らかである。しかるに、ゲルマン語の語を、対応するギリシア、サンスクリット、およびスラブ系の語形と対置することに基礎をおくヴェルナーの法則は、第一音節に強勢⁽¹⁶⁾がおかれなかつた場合があつたことを示している。ここから、一つだけ推測が可能である：最初に、ゲルマン語においては、自由強勢⁽¹⁷⁾が存在していた。そして、これは、歴史時代の他の IE の諸言語に残つている。スラブ語、ギリシア語（ある制限を附して）、サンスクリットに。それゆえ、我々が、すでに古代ゲルマン書写文献⁽¹⁸⁾においてみた、第一音節へ固定された強勢⁽¹⁹⁾の体系は、強勢体系の根本的変化の結果を表わし、最初の自由強勢の体系の、新しい第一音節への固定的強勢⁽²⁰⁾の体系による置換を示している。この転回は、すでにみたように、重大な結果を生んだ。

- | | | | |
|---|-----------------------------|-----------------------------|-------------------------|
| (1) ударение | (2) ротацизм | (3) спряжение | (4) система спряжения |
| (5) форма | (6) корень | (7) суффикс | (8) варианты (вариант) |
| (9) чередования (чередование) | (10) вид | (11) фонетические изменения | |
| (12) система ударения в германских языках | | | |
| (13) письменные памятники германских языков | (14) начальный слог слова | | |
| (15) трактовка | (16) германские слова | (17) вывод | (18) свободное ударение |
| (19) первый слог | (20) фиксированное ударение | (21) система ударения | |
| (22) вытеснение | (23) открытие | | |

Substratum theory⁽¹⁾

(複 層 理 論)

§ 20 本質的、かつ特徴的な現象——第一次子音推移、ヴェルナーの法則、ゲルマン語における強勢の体系の変化——は、根本的な問題を提起する。子音体系のどのような変化が、強勢の一つの体系の、全く異なる原理に基礎をおく、他の強勢の体系による置換を、もたらすのか？

この問題は、色々な学者（研究者）によって、色々な解釈され、現代にいたるまで、問題となつている。

根本的には、明らかに、二つの解釈の方法の可能性がある。一つは、外部からのなんらかの影響を受けない、ゲルマン諸語自体において存在する内在的な事実を探索する方法であり、もう一つは、ゲルマン語の、音韻構造に対して影響を与えた外部的事実からする探究である。

まず第一に、この二つの点を詳説しよう。この点では、長い間、複層すなわち、《底層》⁽⁵⁾理論の名で知られている理論が行われていた。

根本的なこの理論の内容は、次のようなものである。子音推移と同様に、ゲルマン諸語における強勢体系の変化は、この言語を話していた種族の社会生活における事件によつて引きおこされた。この理論と一致して、次のように仮定すべきである。すなわち、ゲルマン語は、インドヨーロッパ諸語を話していた種族が、明らかに、ある非インドヨーロッパ語を話していたある他の種族を、部分的に征服した結果型成された。この征服された種族は、勝利者の言語を習得した。が、しかし、その言語を習得しながら、後に彼等が語るようになった、その言語の中に、自分の言語の中に存在するいくつかの発音上の癖を持ちこんだ。この発音上の癖は、この混合の結果発生したゲルマン語において反映されている。強勢の体系に関しては、必然的に次のように仮定される。征服された種族の、最初の言語においては、第一の音節に定められた強勢の体系が存在していた。この強勢体系は、ゲルマン語に摂取された。子音の体系に関しては、ここで問題はより複雑になる。有名なフランスの言語学者 Antoine Meillet, 複層理論の明白な擁護者の一人は、子音推移の三つの全段階（無声破裂音から無声摩擦音、有声破裂音から無声破裂音、有声帯気破裂音から有声破裂音）への推移を一つの原則で説明しようとする興味ある試みをなした。すなわち、唇による言語の調音と比較した、声帯による調音の遅れによる説明である。音声構造面におけるゲルマン諸語の特性的現象は、このような考え方においては、征服された下層——底層の影響の結果である。何ら歴史的な証拠文献が残っていないゲルマン種族の歴史のその様な初期の時代について、い

(1) теория субстрата (2) принципиальный вопрос (3) изамена

(4) поиск решения (5) подслон (6) покорение

(7) произносительные привычки (произносительная привычка)

(8) французский лингвист (9) Антуан Мейе (10) переход (11) запаздывание

(12) явления особенности германских языков (13) субстрат

(14) исторические свидетельства (историческое свидетельство)

* cf. A. Мейе, Основные особенности германской группы языков (русский перевод, Москва, 1952, 39pp&ff. (原註)。

かに問題があろうとも、この理論は、歴史的な資料⁽¹⁾により、確められないし、また、論駁されることもない。この理論はその本来の信憑性の段階⁽²⁾の観点からのみ評価されるべきである。

復層理論の反対者は、この理論は、確実な確証を使えず、議論の余地があることを、指摘し、このゲルマン諸語の発達の内部における、すべての観察される音韻現象によつて、説明を考えることを望んでいる。しかしながら、この研究方法においても、今日に至るまで、何らかの確固たる結果に達することに成功していない。それゆえ、たとえば、甚だ問題を含む試みがまだある。それは、強勢の助けによつて、意味の実質的な担い手である語の音節、基幹音節⁽⁴⁾を分離するゲルマン族の傾向によつて、強勢体系の変化を説明する試みである。

この大きな根本的な問題は、将来の研究を必要とする。それと同時に、他のインドヨーロッパ、および、非インドヨーロッパの諸言語の歴史における類似の現象を考慮する必要がある。

西ゲルマン語における子音の二重化⁽⁶⁾

§ 21 西ゲルマン語においては、子音の分野において、独自の現象が観察される。これは、子音の二重化と名づけられるものである。この現象の本質は、次のようなものである。すべての（*r*を除く）子音は、短母音の後にきて、もしその子音の後に *j* の音がくるならば、二重化される。すなわち、古代英語においては、*sætian* < *settan*⁽⁷⁾、におけるように。文字では、長子音は、子音字の二重化⁽⁸⁾によつて示され、この現象を示すために、また、《西ゲルマンにおける子音の二重化》⁽⁹⁾の術語も使われている。この過程の音韻的な意味は、明らかに、先行する子音による、音 *j* の同化にある。この現象は、第二次子音推移、強勢体系の変化と同様に、言語下層⁽¹⁰⁾の影響の結果を示していることは、かなりありうることである。後に *ff* は *bb* になる。

この子音の長音化のいくつかの類例は、ウクライナ語⁽¹¹⁾に見られうる。例えば、ロシア語の ‘жить’ ‘暮し’ は、ウクライ語では、‘життя’⁽¹²⁾ であり、ロシア語の ‘прибытие’ ‘打ちつける’ はウクライ語では ‘прибуття’ である。この点において、先行する子音による音 *j* の同化と、文字では、二重の子音字で表わされる、長子音の型成が起る。

古代英語における子音の長音変化の例。

* <i>sætian</i>	>	<i>settan</i>	‘置く’ (cf. Goth. <i>Satjan</i>)
* <i>stæpian</i>	>	<i>steppan</i>	‘行く’
* <i>sægian</i>	>	<i>secgan</i>	‘言う’
* <i>ræcian</i>	>	<i>reccan</i> (<i>reccean</i>)	‘差し向ける’ (cf. Goth. <i>rakjan</i>)
* <i>framian</i>	>	<i>fremman</i>	‘遂行する’
* <i>tælian</i>	>	<i>tellan</i>	‘伝える’
* <i>sælian</i>	>	<i>sellan</i>	‘与える’
* <i>cnusian</i>	>	<i>cyssan</i>	‘押す’

(1) исторические данные (2) собственная убедительность (3) противник

(4) корневой слог (5) западногерманское удлинение согласных

(6) долгий согласный (7) удвоение согласной буква

(8) заподно-германское удвоение согласных

(9) ассимиляция звука *j* предшествующему согласному (10) языковой субстрат

(11) аналогия (12) украинский язык

*swæfian > sweffan > swebban ‘殺す’

*hleahian > hliehhan, hlyhhan ‘笑い出す’ (cf. Goth. hlahaian)

母 音

§ 22 ゲルマン語に特有な、いくつかの特徴的な現象が母音の領域において見られる。ゲルマン語を他の IE 諸語から分離する特性が、この母音において見られる。

ゲルマン語の根本的な相違は IE の短母音 **o** と **a** と、IE の長母音 **ō** と **ā** の変化である。

IE の短母音 **o** と **a** は、ゲルマン語においては、短母音 **a** として表現されている。すなわち、

IE.	Gmc.	IE.	Gmc.
Russ. яблоко	G. Apfel	Lat. noctem	Goth. nahts
Russ. ночь	Gr. Nacht		
Lat. octō	Goth. ahtau		
Gk. oktō	Gr. acht.		
Russ. восемь			

IE の長母音 **ō** と **ā** は Gmc. では長母音 **ō** として、表現される。すなわち、

IE.	Gmc.	E.	Gmc.
Lat. frāter	Goth. brōþar	Lat. flōs	OE. blōma
Gk. phrātōr	OE. brōþor		

それゆえ、ゲルマン語の最古の時期におけるこの推移の結果においては、短母音の **o** も、長母音の **ā** も表わしていない。その後、この二つの音は、いろいろな源から、種々のゲルマン語に現われている。

ゲルマン語の母音変化⁽⁶⁾

§ 23 母音の体系において、ゲルマン諸語は、一つの重要な特性を持つている。これは、ほぼすべての体系に、その痕跡を残した。ゲルマン諸語においては、次に続く音に、母音の質が従属する関係が表われている。この法則は、ラテン語とか、ギリシア語のような型の IE の言語には、完全に異質のものである。この法則の一番古いものを、我々は、‘割れ’⁽¹⁰⁾と言う名が使われた現象にみる。

割れは、2 対の母音に関するものである：**e** と **i**、および、**o** と **u** の対に関するものである。これらは、次のようなやり方で作られる。

1. ゲルマン諸語の語根における IE の **e** には、もしその後に **i**、**j** がきたり、あるいは、他の子音と鼻子音⁽¹²⁾の結合がくるならば、ゲルマン語の **i** に対応する。他の場合において

- (1) отличие (2) краткие гласные (3) долгие гласные (4) процесс
 (5) различные источники (6) германское преломление (7) система вокализма
 (8) отпечаток (9) принцип (10) преломление (Brechung)
 (11) две пары гласный звуков (12) носовой согласны

は、我々は、ゲルマン語において **e** を見る。

Lat. medius	—	OE. middle	‘средний’
Lat. ventus	—	OE. wind	‘ветер’
Lat. edere	—	OE. etan	‘есть’
Lat. ferre	—	OE. beran	‘нести’

このすべての現象が、その音韻的意味という点から、同様に明らかであるわけではない。が、後続音節の **i** あるいは **j** の影響⁽¹⁾によることは全く明らかである。ここにおいて問題は、同化⁽²⁾、すなわち、先行する音の発音における後に続く音の調音の予期⁽³⁾である。《鼻音+子音》⁽⁴⁾の群の影響⁽⁵⁾に関しては、その音韻的意味は不明である。この問題は 特別の研究を必要とする。

2. **o** と **u** の音に関しては、母音変合法則は、次のようなやり方で働く： IE の語根の **u** には、もしこの後に、**u** か、鼻子音と他の子音の結合が立つならば、ゲルマン諸語においては **u** が対応する。その他の場合においては IE の **u** には、ゲルマン諸語では **o** が対応する。例：skt. sunus ‘son’ — OE. sunu Lat. iugum ‘yoke’ — OE. geoc (<зoc>⁽⁶⁾).

以上が、ゲルマン諸語全体に対する、母音変化の一般的法則である。が、しかし、ゴート語はこの関連において特別な地位を占めている。母音変化の法則は、すでに述べられたように、ゴート語においては実現されていない。ゴート語は、次のものよりなる他の法則で支配されている。ゴート語にあつては、すべての‘古い **e**’⁽⁷⁾は、**i** になり、ただ、子音 **r**, **h** および **h** の前においてのみ、この **i** は、ふたたび **e** になる。また同様に、すべての古い **u** は、ゴート語においては、**u** として残り、子音 **r** と **h** の前においてのみこれは **o** になる。すなわち、Lat. sedere — Goth. sitan, しかし、Lat. ferre — Goth. baíran Lat. sequi — Goth. saihan.

ゴート語においては文字 **ai** は多くの場合には、短母音 **e** を表わす。本稿においては、このような場合には、**i** の文字の上に、強勢符がおかれている。また同様に、文字 **au** は、短母音 **o** を表わすことができる。この場合には、強勢記号を文字 **u** の上におくのが通例である。

母音交替 (母音転換) <Ablaut>⁽¹¹⁾

§ 24 インドゲルマン諸語においては、特種な母音変化がある。これは、ふつう Ablaut^{*} という術語で呼ばれている。この現象は、ロシア語にも見られる。例えば、次の様な関係である：везу / воз (運ぶ / 運送荷物), выведу / вывод <вывести ‘導き出す’ ‘結論’>, поднесу / поднос <‘近くに持つてくる’ ‘運び来ること’>, гремит / гром <‘とどろく’>, ‘雷’>, выберу / выбор <выбрать ‘選挙する’ ‘選挙’>, раздеру <разделять / раздор

(1) влияние (2) ассимиляция (3) предвосхищение (4) носовой + согласный

(5) группа (6) фонетический смысл (7) закон преломления

(8) общая закономерность (9) другая закономерность

(10) старое **e**: 《старое **e**》と言う術語によつて、IE からゲルマン語に伝えられた音 **e** が示される (原註)。(11) чередование гласных

* 英国の言語学者達は、この母音変化を ablaut あるいは, gradation の術語で示す。フランス人は、ふつうはギリシア語の要素から作られた術語, apophonie を用いる (原註)。

<divide/discord> ‘умереть/мор <死ぬ/疫病>, затереть/затор <擦り始める/群衆>, また同様に, стелю/стол <広げる/テーブル>。

ギリシア語においては、動詞変化の分野において Ablaut は、はつきりと表われている。特に動詞変化の体系⁽¹⁾において、例えば、動詞 leipō (残す) から aorist (歴史的過去時制) の語型 élipon と完了形語型 léloipa が作られる。この場合に、この動詞の語根は、Ablaut による母音変容によつて、お互に分離されている、三つの変種⁽²⁾ lip / leip / loip である。この母音変容は、すでに考察したように、ゲルマン諸語において、大きな役割を演じている。

Ablaut の起源に関する問題は、何十年もの間の研究課題であつた。大体において、言語学では、次の様な見解が行われている。その考え方に従えば、Ablaut の影響の下に現われる、三つの語根の変種は、強勢の条件による三つの階として観察される。IE 諸語の根本的な母音変容の型は、e / o / zero (階) の変容であるように思われる。これらの変種は、次のような強勢の条件と関連している：完全な強勢にあつては、o grade (最高階)、弱化的強勢においては、e grade (中階)、完全な無強勢においては、zero grade (すなわち、完全な母音の消失)、が見られる。

§ 25 古代ゲルマン語に存在した Ablaut の体系⁽⁴⁾は、ゴート語の強変化動詞と名づけられる資料に、観察されるのが適切である。4世紀のゴート語の聖書⁽⁵⁾において、この体系は非常にはつきりと認められる。なぜならば、古代英語を含む、他のゲルマン諸語の最古の文献において、この体系は、非常に著しい変化を受けている。ゆえに、これらの言語に最初の法則を識別することは、非常に困難であるから。

ゴート語においては、次のような強変化動詞の型態の体系⁽⁶⁾が見られる。

class	Inf.		pt. sig.	pt. pl.	2nd ptl.
I	reisan	‘おきる’ ⁽⁷⁾	rais	risum	risans
II	kiusan	‘とり出す’ ⁽⁸⁾	kaus	kusum	kusans
III	bindan	‘しばる’ ⁽⁹⁾	band	bundum	bundans
IV	stilan	‘盗む’ ⁽¹⁰⁾	stal	stēlum	stulans
V	giban	‘与える’ ⁽¹¹⁾	gaf	gēbum	gibans

これらの語型から分るように、母音変容は、次のような種⁽¹²⁾を持っている。

I.	i:	ai	i	i
II.	iu	au	u	u
III.	i	a	u	u
IV.	i	a	ē	u
V.	i	a	i	i

もし、第一のクラスにおいては、すべての4つの語型に対しては、共通な要素 i が含まれ

- (1) ситема спряжения (2) разновидность (3) ступень (4) система аблаута
 (5) готское евангелие (6) система форм сильных глаголов (7) вставить ~ get up
 (8) выбирать ~ choose (9) связывать ~ tie together (10) красть ~ steal
 (11) давать ~ give (12) вид

ているならば、これは、Ablaut 系列 ⁽¹⁾**i/a zero** ⁽²⁾の核となつている。もし、この様にして、第2のクラスにおいて、すべての語型に対し、共通要素 **u** が含まれるならば、これは、母音変容系列の **i/a/zero** の要素となつている。第2のクラスは、この連関においては、すべてのクラスの中で、最も明らかである。幾分複雑な問題は、第3のクラスにある。もし、我々がここに母音変容の核を見とするとするならば、ここでは、我々は、**i/a/u** 系列を使つている。⁽³⁾しかし、この **u** は、適去複数と第2分詞の語型に対する特徴的なものであるから、鼻子音（この場合には **n**）の発達の結果として説明される。この鼻子音は、全然その前に母音がない時には、音節型成音⁽⁴⁾になつた。それゆえ、第3のクラスは客易に、同一の **i/a/zero** ⁽⁵⁾の変容型に帰着せられうる。

第4クラスにおいては、第2分詞の語型に、母音 **u** を見る。これは、第3群動詞の分詞に存在する、これに対応する母音と同様に説明されるべきである。のみならず、我々は、ここで、過去時制複数の語型に、長母音の **ē** を、また、認めている。この長母音の **ē** は、今まで、我々が研究してきた、母音変容の体系からでるものであり、明らかに、特別の説明を要求するものである。

この現象の説明は、非常に、多様なものである。これらの説明のうちで最大の信憑性を持つものは、過去時制複数の語型における長音の **ē** は、その起源において、特別な Ablaut の型に帰せられるというものである。すなわち、同じ質の他の母音と共に、短母音の変容を含む、量母音変容⁽⁶⁾である。それゆえ、第4クラスのこの母音変容の根底には、**e/ē** の変容がある。これに対して、ラテン語におけるいくつかの動詞の現在時制と完了時制の語型の対応が認められる。すなわち：動詞 *sedeo* (сидеть) ‘坐つている’、完了型 *sēdi*; 動詞 *legō* <I read> から完了型 *lēgi* となる。母音変容 **i/a/zero** ⁽⁷⁾の母音変容の根底に、ここでは、全く別の原則、すなわち、短母音 **e** と、長母音 **ē** の量の変容が見られることに注意されたい。⁽⁸⁾

第5クラスは、表から見られるように、根本的な特性において、第4クラスと一致して、第4群から、唯、第2分詞の語型においてのみ異なる。第5群の特徴は、交替した母音の後では、いつでも、破裂子音、あるいは、摩擦子音が立つことである。これゆえに、第2分詞型においては、鼻子音がない。この子音から、第3および、第4群に見られるような母音 **u** が発達することがある。明らかに、第5群の分詞の母音 **i** は、不定詞より導入されている。⁽⁹⁾

それゆえ、5つの第一群動詞の基礎には、単一の **e/o/zero** ⁽¹⁰⁾の母音変容系がある。この grade は、ゴート語にあつては、**i/a/zero** の種をうる。ただ、第4および第5群においては、この根本的な系は、いくつかの他の要素によつて複雑化される。

ゲルマン諸語における文法構造の主要特性⁽¹¹⁾

実体詞（名詞）語幹⁽¹²⁾

- | | | |
|---|----------------------------|---|
| (1) ряд | (2) зерно | (3) форма множественного числа прошедшего времени |
| (4) причастие второго | (5) сонорны согласны | (6) слогаобразующий |
| (7) тип чередования | (8) количественный аблаут | (9) принцип |
| (10) количественное чередование е краткого с ē доргим | (11) черта | (12) своеобразие |
| (13) инфинитив | (14) единное зерно аблаута | |
| (15) основные явления грамматического строя германских языков | (16) именные основы | |

§ 26 ゲルマン語における語イは、他の IE 諸語におけると同様に、一つの一般的原則に基づいている。しかし、この型は、IE のすべての言語において、同一の明確さを持つては現われない。多くのゲルマン語の中で、我々に伝えられた、ゴート語の写本から、この原則は、比較的容易に明らかになる。他のゲルマン諸語、特に、古代英語において、この原則は、すでに、最も古い文献において、見られるが、語の構造に起つた、変化のために曖昧になつてゐる。それゆゑ、ゲルマン諸語に存在する名詞の構成原理の分析には、ゴート語の資料から始めるべきである。

ゲルマン語に存在する最も原始的な名詞の構造は、他の IE 諸語におけると同様に、次の点にある。語は、三つの要素から成る。1) 語根、2) 語幹構成接尾語、3) 格屈折語尾。これらの要素の各々の機能を見よう。語根の機能は、全く明らかである。語根は、語の實質的意味を表わす。格屈折語尾の機能も、容易である。これらは、名詞の文法的役割を表現する。すなわち、文における他の語との関係と同時に、名詞における数の格を表現する。語幹構成接尾語の機能は、決定するのが、はるかに難しい。実際に、ゲルマン語の最も古い写本が帰せられるこの時代の言語と言う観点からすれば、この語幹構成接尾語は、なんらの意味的な役割を演じていない。それゆゑ、この要素の原初の機能の考察は、仮定的なものではないが、この仮定を支える、非常に重大な論拠が与えられうる。

明らかに、語幹構成接尾語の最初の機能は、意味の群による名詞の分類の手段として役立つたという点にある。どのような規準によつて、名詞は、あれこれのクラスと関係づけられるかは、明言することは、非常に難しい。

ゴート語において、我々は、弁別的意義特徴によつて統一されている、名詞の一群のみを認める。すなわち、親族関係を表現する名詞は、語幹構成接尾語 **r** の助けを借りて作られる。すなわち、fadar ‘父’ brōþar ‘弟’、swistar ‘妹’ 等である。他の名詞の群に対しては、何等かの弁別的意義特徴は、発見されていない。どうみても、この弁別的意義特徴は、原始的思考を特徴づける概念に基いている。

§ 27 ゴート語においては、複数与格のいくつかの名詞の型に、語幹構成接尾語を、かなり容易に認めうる。cf. dagam ‘day’, gibōm ‘贈物’, gastim ‘お客’, sunnum ‘息子’。この語型の各々は、三つの要素に分析される。すなわち、dagam の語型は、語根 **dag-** と、語幹構成接尾語 **-a-** と、格屈折語尾 **-m** からなる。gibōm の語型は、語根 **gib-** と、語幹構成接尾語 **-o-** と格語尾 **-m** からなつてゐる。それゆゑ、まず第一に、格屈折語尾は、単に、**-m** しかないが、これに先行する母音、すなわち、**-a**、**-ō**、**-ī** あるいは、**-u** は、語幹構成接尾語である。明らかに、語幹構成接尾語は、またこれらの名詞の複数対格の語型にも見られる。

- (1) одинаковая отчетливость (2) принцип структуры существительного
 (3) готский материал (4) корень (5) основообразующий суффикс
 (6) падежная флексия (7) вещественное значение слова
 (8) грамматическая роль существительного (9) категория числа в существительном
 (10) тексты (11) семантическая роль (12) первоначальная функция
 (13) суждение (14) веские доводы (веский довод) (15) принцип
 (16) отчетливый семантический признак (17) родство (18) первобытное мышление
 (19) понятие (20) дательный падеж множественного числа
 (21) нескольких типов существительных
 (22) формы винительного падежа множественного числа

cf. dagans, gibōs, gastins, sununs. 他の格型にあつては、この語尾は、すでに全然認められない。例えば、単数所有格⁽¹⁾においては、dags, giba, gasts, しかし、sunus の語型においては、語幹構成接尾語は、はつきりと認められる。

語のこのような原初的な三層構造は、ゲルマン諸語の最も古い発展段階では、二つの部分に組織し直される。この過程の本質は、語幹構成接尾語⁽⁴⁾は、言語のより後期発展段階においては、その意味を失い、これと関連して、音韻的変容を受けたことにある。すなわち、この要素は、非常に密接な要素として、格屈折語尾と融合しているのです、全然区別することができない。語幹構成接尾語は、格屈折語尾と密着し、これと融合している。この点との関連において、《語幹》⁽⁶⁾の概念の意味が変つている。もし、後期の段階において、語幹が、語根と語幹構成接尾語との融合からなるならば、語幹構成接尾語が、格屈折語尾に融合している、より後期の時期においては、このような名詞に対する《語幹》⁽⁷⁾は、語根と一致する。先行する時代からこの時期に継承された語型は、再構成を受けた。語幹構成接尾語は、その意味を失ない、語幹構成接尾語でなくなつた。すなわち、語構成の可分的要素⁽⁹⁾でなくなつた。

語 幹 の 型⁽¹⁰⁾

§ 28 古代ゲルマン諸語の名詞⁽¹¹⁾の体系においては、次の語幹の型が分離される。

1 母音語幹は、-a-, -o-, -i-, -u- である。この名詞の格変化は、通例、強変化と⁽¹²⁾呼ばれている。

2 -n- 語幹。この名詞の変化は、普通弱変化⁽¹⁴⁾と呼ばれる。

3 他の子音⁽¹⁵⁾に基く語幹は、-s- と -r- である。

4 語根幹。名詞のこの型は、他の名詞からの、幾分、それ自身独立しているものからなる。この型の名詞には、決して、語幹型成接尾語の語尾がなく、格屈折語尾が、語根と、直接に密着している。それゆえ、語根は、語幹と一致する。

ゲルマン語の名詞変化のこの型式と、他の IE の諸語の名詞格変化型式⁽¹⁷⁾の間に、すなわち、ロシア語やラテン語の格変化型式との間に、一定の対応を確立することができる。この対応は、個々に格変化型の各々のタイプを研究する際に述べられる。

形 容 詞⁽¹⁹⁾

形容詞の変化⁽²⁰⁾

§ 29 ゲルマン諸語における形容詞の変化は、複雑さをみせており、これは、他の IE 諸語には見られない。事実、例えば、ラテン語においては、形容詞の変化は、原則的には、⁽²¹⁾名詞の変化から分離されない。それゆえ、形容詞の bonus 'good' は第1および第2の変化

- | | |
|--|---------------------------------|
| (1) именные падеж единственного числа | (2) трехчастная структура слова |
| (3) стадия развития | (4) фонетическая деформация |
| (5) единство | |
| (6) основа | (7) формы |
| (8) переосмысление | (9) отделённый элемент |
| (10) типы основ | (11) система существительных |
| (12) склонение | |
| (13) сильное склонение | (14) слабое склонение |
| (15) корневые основы | |
| (16) падежные флексии (падежная флексия) | (17) типы |
| (18) соответствие | |
| (19) прилагательное | (20) склонение прилагательных |
| (21) принципиально | |

に基いて語尾変化される。bonus の女性変化型の語型⁽¹⁾は、第2変化名詞 hortus ‘garden’ と同様に語尾変化される。また、中性の語型 bonum は、第2変化名詞 vallum ‘valley’ と同様に変化する。しかし、また女性変化の語型 bona は、第1変化名詞 silva と同様に変化する。問題のこのような状態は、確かに、より古い状態を表現している。当時には、まだ、名詞と形容詞の間は分離していなかった。そして、単一の名詞の枠⁽³⁾が存在していた。

ゲルマン諸語にあつては、最古の文献から、すでに、全く違つた様相が見られる。形容詞の変化は、名詞の変化から、二つの傾向によつて孤立している。

1 各々の形容詞は、強変化（すなわち、母音語幹に基いて）と同様に、また、弱変化 -n 語幹に基いて）もされうる。

2 形容詞の強変化は、名詞の強変化とは完全に一致せずに、名詞変化から次のような関連において区別される：いくつかの格語型は、代名詞の格変化⁽⁶⁾と対応する。それゆえ、形容詞の強変化は、完全に代名詞と、形容詞の所有格型⁽⁷⁾との結合となつて表われる。

形容詞の強変化の起源は、明らかに、次のような現象と関連がある。

古代の IE 諸語においては、たとえば、古代ギリシア語においては、形容詞から、語幹⁽⁸⁾ -n をもつ名詞が作られた。Gk. strabós ‘藪睨み’ から ‘Strábōn’ ‘藪睨みの人’ ができ、名詞として使われている。そして、これから、有名な天文学者であり、地理学者の Strabon の個有名詞⁽⁹⁾がでる。‘platýs’ ‘平坦な’ から Plátōn ‘平坦’、‘肩幅の広い’。これは、古代ギリシアの哲学者 Platon の名前である。このような名詞は、それゆえ、個有名詞に対する同格語⁽¹¹⁾の機能において用いられる。すなわち、<Johan, the blind> <盲目の Johan>。そして、形容詞は個有名詞の修飾規定語になる。それゆえ、極めてありそうなことは、ゲルマン諸語においては形容詞の強変化が起つたことである。語幹構成接尾語 -n の助けによつて、まず最初に、与えられた形容詞によつて表現された性質をもつ対象を表わした名詞が作られた。そして、後に、この名詞自身が今度は、形容詞になつた。

動 詞

§ 30 ゲルマン諸語における動詞の体系、そして更に、古代英語の動詞の体系は、色々な要素から成っている。大多数の動詞は、Ablaut の助けによつて、過去時制と第2分詞の語型から作られる強変化動詞と、dental suffix -d- (-t-)⁽¹⁴⁾によつて、これらの語型から作られる弱変化動詞である。

強 変 化 動 詞

§ 31 強変化動詞の語型の体系は、母音変容 (Ablaut) の法則⁽¹⁵⁾に基いている。この法則は他の IE 諸語の動詞の体系にも起つている。特に、それは、ギリシア語に表現されてい

- | | | |
|--|-------------------------------------|---------------------------|
| (1) форма мужского рода | (2) форма среднего рода | (3) единый разряд имени |
| (4) иная картина | (5) направления (направление) | (6) склонение местоимений |
| (7) именные форм (именная форма) | (8) существительные с основой на -n | |
| (9) собственное имя | (10) Платон | (11) приложение |
| (12) Иоан слепой | | |
| (13) система глагола | (14) переднеязычный суффикс | |
| (15) принцип чередования гласных (аблаута) | | |

る。動詞における母音変容の要素は、ラテン語に存在している。すなわち、動詞 *pellō* ‘追う’ から、完了形の語型 *pepulī* (**pepoli*) が作られる。この場合には、語根 *pel/īol* の変種に Ablaut *e/o* の痕跡が見られる。

歴史時代において、我々はゲルマン諸語に、二つの時制の体系を見る。現在時制と過去時制である。しかし、多くの資料、特に、ギリシア語の対応する現象より判断すると、この時制分離は、比較的后期の現象であることを示している。それゆえ、最初、ゲルマン語においては、他の IE 諸語におけると同様に、時間によつては分離されず、動詞の相、すなわち、時間における動作の特性的な経過を、互に分離する語型によつて区分されていた。

このような相は、明らかに三種あつた。継続相、瞬間相、結果相。継続相は、ある完成状態に対して、無関係に、流動しているものとしての行為を表現する。瞬間相は、完成状態への指向しているものとしての行為を表現する。最後に、結果相は、結果、すなわち、新しい状態に完成され、導かれたものとしての行為を表現する。この相のカテゴリーと、母音の質を、互に弁別する語根の変種とが結ばれている。この型のはつきりとした体系を、我々は、ギリシア語において、見る。*leipō* ‘留まる’ (継続相), *ēlipō* 瞬間相 (aorist) *leloipa* ‘結果相’。

この原初の三つの体から、ゲルマン語の強変化動詞の時制が生ずる。すなわち、継続相から、現在時制、瞬間相から、過去時制が生ずる。結果相の運命は独特なものである。結果相の意味には、二つの時間の要素が結合している。その動作自体は過去に属するが、その結果は現在に属する。それゆえ、結果相においては、前者と同様に、後者の傾向の発達の可能性の基礎がおかれた。そして、実際に、色々な動詞におけるこの結果相の運命は、種々である。強変化動詞の体系において、結果相は瞬間相と結合して、過去時制を与える。一方、過去現在動詞においては、結果相が、現在時制に変つている。

ゲルマン諸語における過去時制の体系の型成における瞬間相と結果相の関与の程度の問題は、若干、問題を残している。

強変化動詞の語型

§ 31 各々の強変化動詞は、四つの主要な語型によつて特性づけられる。1) 不定詞、2) 過去時制単数、3) 過去時制複数、4) 第2分詞。

すべての強変化動詞は、母音変容に基いて7つの群に分類される。最初の5つのクラスは Ablaut に関する部分 (§ 25) において研究された。

第6群は、最初の5つの群とは全く他の原則に基いている。ここにおいて、我々は、母音変容 *a/ō/ō/a* を見る。このような形においては、この母音変容は、理解し難いものである。

- | | | |
|--|--------------------------------------|----------------------------------|
| (1) форма перфекта | (2) вариант | (3) следы аблаута (след аблаута) |
| (4) система двух влемен | (5) настоящее время | (6) прошедшее время |
| (7) данные | (8) глагольные виды (глагольный вид) | (9) протекание |
| (10) длительный вид | (11) мгновенный вид | (12) результативный вид |
| (13) завершение | (14) видовая категория | (15) аорист |
| (16) времена германских сильных глаголов (время германский сильного глагола) | | |
| (17) претерито-презентный глагол | (18) формы сильных глаголов | (19) инфинитив |
| (20) единственное число прошедшего времени | | |
| (21) множественное число прошедшего времени | (22) причастие второе | |

この説明には、ゲルマン語の短母音 **a** は、大多数の場合において、IE の短母音 **o** に対応するものであることを考慮することが必要である。それゆえ、最初の IE の母音変容、これに 6 群の語型は遡るのだが、その変容は **o / \bar{o} / \bar{o} / o** の型を持っていた。これは、短母音 **\bar{o}** と、長母音 **\bar{o}** の量の母音変容である。

ゲルマン諸語においては、**o > a** の推移⁽²⁾の結果、量の母音変容に、質的な要素⁽³⁾が結合された。たとえば、ゴート語において：⁽⁴⁾*farān -fōr-fōrum-farans* ‘ride’。

第 7 群は、特に解明を要する。ゴート語においては、第 7 群の動詞は、次のような語型の体系を持っている。

	不定詞	過去単数	過去複数	第 2 分詞
a)	<i>haitan</i> ‘呼ぶ’	<i>haihait</i>	<i>haihaitom</i>	<i>haitans</i>
b)	<i>lētan</i> ‘残す’	<i>laflōt</i>	<i>laflōtom</i>	<i>lētans</i>

VII(a) の型の動詞においては、いかなる母音変容もない。VII(b) の型の動詞においては、 **\bar{e} / \bar{o} / \bar{o} / \bar{e}** の母音変容が生ずる。これは、短母音 **e / o** の IE の母音変容と並行に、長母音の分野において表われる。

二つの型に共通に、過去時制の語型においては、重複⁽⁶⁾が表われる。すなわち、始めの子音の語根と母音 **e** からできている、特別な音節が、語根の前に存在していることである。この重複⁽⁶⁾は、ゴート語においては第 7 群を特徴づける指標⁽⁷⁾である。完了形における重複は多くのラテン語の動詞においても、同様に見られる。すなわち、*pellō* <押す> — *pepulī*; *mordeō* <噛む> — *momordī*; *currō* ‘走る’ *cucurri*, 等である。ギリシア語、およびサンスクリットにおいては、重複は、すべての動詞の完了型を拘束する指標となつた。この根底には、明らかに、強調の繰り返しの要素がある。これと似た現象を、我々は、‘彼は速く速くに住んでいた’ (Он жил далеко-далеко), あるいは、‘海は、青く青くあつた’, (Море было синее-синее), にみる。特に、ロシア語においては、次のような文と、完了形における重複が対比されうる。‘私はノックした, ノックした, が, (戸は) 私には決して開かなかつた’。‘Я стучал-стучал, но мне так и не открыли’ ここでは、動詞の語形の繰り返しは、動作への関心を示している。

弱 変 化 動 詞⁽¹¹⁾

§ 33 dental suffix の助けによつて、過去時制と第 2 分詞を作る動詞を、弱変化動詞と呼ぶ。この動詞は、ゲルマン諸語の特性を型成している。他の IE の諸語においても、また、何等かのこれに類似の現象は全然見られない。この群の動詞のカテゴリーに関する起原についての問題に関しては、すなわち dental suffix の起原に関する問題は、二つの視点から、述べられる。

この中から、第一の視点に従えば、dental suffix -d- は、動詞‘行う’⁽¹³⁾の接尾語型成辞⁽¹⁴⁾と

- (1) вид (2) переход (3) качественный момент (4) ехать
 (5) разъяснение (6) удвоение (7) характерный признак
 (8) обязательный признак (9) эмфатическое повторение
 (10) я стучал-стучал но мне так и не открыли (11) слабые глаголы
 (12) специфическая особенность (13) делать (14) суфигированная форма

なる (OE. *dōn*, Gr. *tūn*)。これは、一般的には非常にありうることであるが、この仮定⁽¹⁾に有利なことが特に、ゴート語の語型について言われうる。cf. Gothic: 弱変化動詞 *hausjan* ‘hear’ の過去時制、一人称単数; *hausida*, 一人称複数; *hausidēdum*, 重複をもつた語型; *dēdum*。この語型は、この suffix が複数においてとるのであるが、確実に、ドイツ語における動詞 *tun* の過去複数, *taten* の語型はこれと対応する。

第2の視点によれば、弱変化動詞の起原は、第2分詞の語型に求めるべきである。この分詞は、他の IE 諸語において次のような分詞型と対応する。たとえば Russ. “битый”⁽²⁾, “бр⁽³⁾итый”, “кры⁽⁴⁾тый”, “тер⁽⁵⁾тый”, “молот⁽⁶⁾ый”, あるいは, dat. *amātus*, *delētus*, *lectus auditus*, この対応においては, IE. *t* ~ Gmc. *d* の対応は, Verner の法則によつて説明される。この視点は、十分満足できる程度まで、ゲルマン語の弱変化動詞の第2分詞の起原を説明するが、過去時制の語型の説明に対しては納得できないように思われる。なぜなら、過去時制における分詞の suffix の転移はほとんどありえないから。それ故弱変化の過去時制の起原の説明のために、第1の理論の方が、よりはるかに信憑性がある。

それゆえ、ゲルマン語の弱変化動詞の体系全体の起原の説明に、もつとも考えられうるものは、接尾語型成動詞 *do*⁽⁷⁾ の助けによつて、過去時制が作られるようになり、分詞は、他の IE の諸語に残っている *-t* に終る分詞に対応すると言う説明である。弱変化動詞の体系をそのように理解することは、一つの道に流れこんでいる起原的には相異なる二つの要素の結果であることを示している。

比較的により後期の発展段階において起つた、ゲルマン諸語における弱変化の過去時制は、すでに、相のカテゴリーに対する何等の関係をもたずに、その最初から、時制のカテゴリー⁽¹⁰⁾を表現した。

§ 34. ゴート語においては、弱変化動詞の4群が存在し、これらの群は、互に、語幹型成接尾語⁽¹¹⁾によつて分離される。

	Inf.	sig. pt.	pl. pt.	2nd. participle
I	<i>hausjan</i> ‘hear’	<i>hausida</i>	<i>hausidēdum</i>	<i>hausips</i>
II	<i>salbōn</i> ‘oil’	<i>salbōda</i>	<i>salbōdēdum</i>	<i>salbōps</i>
III	<i>habban</i> ‘have’	<i>habaida</i>	<i>habaidēdum</i>	<i>habai⁽⁸⁾ps</i>
IV	<i>fullnan</i> ‘fill’	<i>fullnōda</i>	<i>fullnōdēdum</i>	—

この例から見られるように、第1群の語幹型成語尾は *-j-* であり、2群は、*-o-* であり、第3群は、二重母音 *-ai-* であり、しかし、この *-ai-* 不定詞の語型においては、消えている。第4群は、*-n(o)-* である。

まず最初に、これらの接尾語⁽¹²⁾の各々は、明らかに、一定の意味を持つていた。すなわち、一般的な意味特性をもつた、動詞群を型成した。しかし、もし、我々が、あれこれの群に属するゴート語の動詞をとり、ある群の構成部分となる、動詞における一般的意義素が何から⁽¹³⁾

-
- (1) предположение (2) бить ~ beat (3) брить ~ shave (4) крыть ~ cover
 (5) тереть ~ rub (6) молотъ ~ grind (7) перенесение (8) делать
 (9) категория вид (10) категория времени
 (11) основообразующие суффиксы (основообразующий суффикс)
 (12) определенное значение
 (13) общие семантические особенности (общая семантическая особенность)

成つてゐるかを再構しようと試みるならば、そのとき、我々は、第4群動詞との関係においてのみ、満足な解答を見出す。

これらすべての動詞は、自動詞であり、新しい状態への移行を表現した。例えば、動詞 fullnan は、⁽¹⁾‘みたす’⁽³⁾を表わした。そして動詞 fraquistnan は、⁽²⁾‘亡びる’⁽⁴⁾、動詞 gahailnan は、⁽⁵⁾‘治ゆする’。ゴート語の、接尾語に対応する現代までの英語の suffix は、例えば、動詞 weaken, stiffen, redden, その他である。最初の三つのゴート語の動詞に関しては、我々はその語幹型成接尾語の原初の意味の再構に成功してはいない。明らかに、これらの動詞群の原初の構造は、多く類推によつて型成されて完成したものである。それゆえ、この三つの群の各々は、すでに意味において、互に類似していない動詞であることが分つた。

II 英語の起源⁽⁸⁾

序 論

§ 35 英語は、Anglo-Frisian 語派⁽⁹⁾から生じた。この語派は、西ゲルマン下位語族⁽¹⁰⁾の一支語派をなしている。4世紀に Britain 島に移住したゲルマンの一種族⁽¹¹⁾は、古代の史家達が伝えているように、⁽¹²⁾三つの種族からなる。Angles, Saxons と Jutes である。これらの種族は、⁽¹³⁾次の地域の土地を占めていた： Angles は、現代のドイツとデンマークの境界とシラ川⁽¹⁴⁾の間の、南部 Schlerwig に住んでいた。Saxons は Angles より南部、現在の Holstein に； Jutes 族は、Angles から北方、今は Denmark の領地である、現在の Schleswig⁽¹⁵⁾の地域に住んでいた。Rhine 河と Ems 河⁽¹⁶⁾の間の北部の海岸（現在、オランダの一部になつてゐる地域）⁽¹⁷⁾を占めていた Frisian や、Ems 河と Elbe 河の間に住んでいたハフカ族と Angles は密接な関係があつた。これらの種族は後に6世紀頃、西に移動した。Saxons は、Gaul（現在のフランス）の北部沿岸に現われた。そして、この種族の分派した種族は、5世紀に、⁽¹⁸⁾すでに大西洋岸のルアール河⁽¹⁹⁾に達していた。

大西洋岸の Britain 島⁽²⁰⁾についての最初の歴史の記述は、4世紀にまで遡る。このときに、マツシーリ（現在のマルセーユ市）の出である、ギリシアの宣教師ピフェイ⁽²¹⁾（Pytheas）は、自分の船でヨーロッパ周航の宣教旅行を行つて、Britain 島南東の kent 州の海岸に着いた。⁽²²⁾英国はこの時代には、ケルト族によつて住まわれていた。——彼等は Briton 族と Gael 族⁽²³⁾であり、この両種族は、相異なるケルト語を話していた。

§ 36 ケルト語は、二つの基本的な語群⁽⁴⁰⁾に分けられる。Gaulo-Breton 語族⁽⁴¹⁾と Gael 語族⁽⁴²⁾

- | | | | |
|--------------------------------------|---------------------------|------------------------|--------------------|
| (1) непереходный глагол | (2) переход | (3) наполняться | (4) погибать |
| (5) исцеляться | (6) первоначальный состав | (7) аналогия | |
| (8) происхождение английского языка | (9) англо-фриское наречие | | |
| (10) западногерманская группа языков | (11) древние историки | (12) англы | |
| (13) саксы | (14) юты | (15) материк | (16) река Шла (ь?) |
| (17) Гольштинин | | | |
| (18) Шлезвиг | (19) Дания | (20) Рейн | (21) Эмс |
| (22) Фризы (Фрисланд人) | | | |
| (23) голландия | (24) район | (25) хавки (?) | (26) Галлия |
| (27) Франция | | | |
| (28) Атлантический Океан | (29) Луар | (30) Британский остров | (31) Массиль |
| (32) Марсель | (33) Пифей | (34) Европа | (35) Британия |
| (36) Кент | | | |
| (37) кельтский племена | (38) бритты | (39) гаэлы | (40) группы |
| (41) Галло-бретонская группа | (42) гаэльская группа | | |

である。Gaulo-Breton 語族は、次の下位語派を含んでいる。1) Gaul 語⁽¹⁾; Gaul 語, ゴール (現在のフランス) の住民が話した言語と, 2) Britain 語派⁽²⁾; この語派は, 英国の西部 wales のウェールズ語⁽³⁾ (あるいは cymrl 語⁽⁴⁾) と, 英国の南西部コーンウォールの (8 世紀に死滅した) Cornwall 語と⁽⁵⁾, フランス北部の Bretagne の Breton 語を含んでいる。Gael 語族は, 1) Ireland 語⁽⁸⁾, 2) Erse と呼ばれる Scotland 語と⁽⁹⁾, 3) イギリスとアイルランドの間に⁽¹⁰⁾ある, マン島の言葉 Man 島語である。

ローマ人の征服⁽¹¹⁾

§ 37. Julius Ceasar⁽¹²⁾ を指揮者とするローマ人は, 55年に初めて Britain 島に移動した。この最初のローマ軍の出現は, しかし, 実質的な結果を持たなかつた。英国への短期間の定住の後に, ローマ軍は, Gaul に帰つた。54年に Ceasar は, ふたたび Britain 島に進み, Briton 人を撃破し⁽¹³⁾, Thames 河に達した⁽¹⁴⁾。しかし, この時のローマ軍の Britain 島への進入は, ごく僅かなものであつた。恒久的な Britain 島への移住は, 43年 Claudius 皇帝のときに始まつた。Briton 人を征服して, ローマ軍は, この土地に定住して, 多くの野営地を設置した。この中から後に英国の都市が発達した。紀元後80年に, Dominius 皇帝のもと, ローマ軍は, フロート (現在の kraid) 河とバドートリ (現在の Forth) 河に達した。それゆえ, この野営地に属する地域から現代の Edinburgh と, Glasgow を含む Scotland の一部が現われた。ブリテン島は, この時代にはローマの領土になつた。この植民は, Gaul における程ではないとしても, ブリタニアに深い影響を与えた。ローマ文明一碎石道路, 石作りの城壁は, 完全に, 国の外見を変えた。都市においては, ラテン語は, ケルト方言を駆逐し, 郊外にも, 恐らく, 幾分の普及を見た。4 世紀に, ローマ帝国へのキリスト教の導入と共に, キリスト教は, Briton 人の中に拡まつた。

5 世紀の始めまで, ほとんど 4 世紀にわたり, ローマ軍は Britain 島を支配した。5 世紀の始め, 410年に, 彼等に攻撃をかけたゲルマン族から, Italy を除禦するために, ローマの軍隊は, Britain 島から召還された。(この年にローマの街は, アラリフ帝の指揮するゴート族に占領された)。そして, Briton 人は, ブリテン島をおびやかしたゲルマンの種族との闘いにおいて, 独自の兵力を備えていた。

アングロ, サクソン征住⁽³¹⁾

§ 38 5 世紀の中頃に, ゲルマン族の Britain 島の征住が始まつた。古い記録は, この

- | | | |
|--|---------------------------------------|---|
| (1) галльский язык | (2) британские языки | (3) Уэльский язык |
| (4) кимрский язык | (5) корнский язык | (6) Бретания (7) бретонский язык |
| (8) ирландский язык | (9) шотландский язык | (10) мэнкский язык. |
| (11) римское заваевание | (12) Юлий Цезар | (13) бритты (14) река Темз |
| (15) римляне римлянин | (16) прочное заваевание | (17) император Илавдий |
| (18) военные лагеря (военный лагерь) | (19) Глотт (Клайд) | (20) Бодотрий (Форт) |
| (21) Эдинбурга | (22) Глазго | (23) Шотландия (24) Римская цивилизация |
| (25) шоссейные дороги (шоссейная дорога) | (26) мащные стены (мащёная стена) | |
| (27) кельтские диалекты | (28) римские легионы (римский легион) | (29) город Рим |
| (30) Аларих | (31) англо-саксонское заваевание | (32) древнее предание |

侵略の時期として449年として、侵略軍の指揮に当つた、二人の指揮者 Hengest と Horsa の名前をあげている。

侵略者と Briton 人の闘争は、この世紀の中頃に始まり、約600年頃終つた。この時代に、Briton のアルトウル王⁽¹⁾の伝説像⁽²⁾は属する。

Britain 島を占領して、ゲルマン族は、種族単位で、その内部に移住した。Angles は、Thames 河⁽⁴⁾から北部の Forth of Froth⁽⁵⁾の地域の大部分を占めた。Saxons は、Thames から南部と、Thames 北部の若干の土地を占めた。Jutes は、英国の南東部端 Kent の半島⁽⁶⁾および weight 島⁽⁷⁾を占めた。

Angles, Jutes, Saxons の Britain 島の時代に、彼等の言語は、大陸のゲルマンの諸語から分離し、特別な道によつて、その後の発展に進んだ。5世紀、この移住の時代から、英語の歴史が始まつた。英語の伝播⁽⁸⁾の最初の土地は、(南西端の半島) Cornwall と、(Anglia の中央部の西側の) Wales を除く(狭い意味で)アングリアの地。この西部の地域⁽¹¹⁾を、

Briton 人は持つていて、その地域は、かなり後に征服された。9世紀に cornwall⁽¹²⁾, 11世紀に stletkleid⁽¹³⁾, そして、wales は、13世紀になつて始めて征服された。Scotland の北部の高山地帯は、ローマ軍も、ゲルマン族も、まだ、そこに侵入していなかつた時は、Picts および Scots⁽¹⁵⁾の種族によつて、植民されていた。Scot 人の言語は、ケルト語族に属しているが、現在でも、北西部の Scotland に残つている Ireland⁽¹⁷⁾も、また同様に、ケルト人のものとなつていた。最初のアイルランド征服の試みは、12世紀に遡る。

§ 39 英国を征服、移住したゲルマン諸族の社会的な組織⁽¹⁸⁾は、まだ氏族組織であつた。しかし、すでに、ブリテン島への移住までに、この氏族組織において、急速な分解が始まつた。《分解の Tempo は、ブリテン島への移住によつて、非常に強められた。ブリテン島沿岸への最初の侵入は、多分小さな先遣部隊⁽¹⁹⁾によつて果された。そして、氏族の土地の境界を守つていた農夫と比較して、軍人層の富の蓄積と、威信の増大を促進した。》；《英国への移住に伴う、終ることを知らぬ戦による侵略に伴う、重大な結果は、独自なやり方での無数の融合において、征服者と、被征服者を混淆し、戦争による組織を強め、これに応じて、民族組織を弱体化したことである。これらの事実⁽²¹⁾は、王の権力を強めた。この時期の終りには、王は、始めは弱いが、はつきりと規定された国家権力への要請をもつて現われた。それゆえ、王は、その国土の唯一人の、最高の所有者となつた》。同じくこの時代に、英国においては、封建制度が発生した。《すでに 600 年頃から、封建的貴族⁽²²⁾の特徴が、認められた。農夫達⁽²³⁾は、強くキリスト教化のきざしを見せ始めた。土地の私的な所有⁽²⁴⁾は、すべて規定されたものとなり、移住民は、いたるところで、明瞭な社会的階級に分化し始めた。と同時に、その祖国において、アングロ、サクソン族を結びつけた、より自由な氏族組織の型成は、戦争による侵

(1) Артур (2) легендарный образ (3) германцы (4) Темза

(5) Ферт-оф-Форт (6) полуостров Кент (7) остров Уайд (8) распространение

(9) область (10) Англия (11) Корнуэлл (12) Стрэтклайд (13) Уэльс

(14) пикты (15) скотты (16) язык скоттов (17) Ирландия

(18) родовая организация (19) отряды

(20) А. Л. Мортон, История Англии (русский перевод) М., 1950, стр. 36. (原註)

(21) ibid., pp. 37 (原註) (22) феодалный лорд (23) керл

(24) частная собственность на землю

略の結果生じた国家の解体を生み、絶えまなく戦争の司令官の働きを遂行していた国王の権力の大きさに従う領土の分割が始まった。またそれ故、戦争は日常的な事柄になつていた。⁽¹⁾》

定住した最初の時期に、征服者達が話していた、種族的な方言は、上の事柄と関連しながら、漸次、地域方言⁽²⁾に⁽³⁾変つて行つた。

英 語 史 の 時 代 区 分⁽⁴⁾

§ 40 英語の歴史は、3期に分けるのがふつうである。1)古代英語期⁽⁵⁾ (あるいは Anglo-Saxon⁽⁶⁾), 2)中世英語期⁽⁷⁾, 3)近代英語期⁽⁸⁾。この時期には、およそ、次の時代の区分が対応する。

古代英語 (あるいは, Anglo-Saxon) 期——ゲルマン民族の英国への侵入の時代, 5世紀の中頃, あるいは, 我々に残されている最も古い書写文献の時代の7世紀から1100年まで。

中世英語期——1100年から1500年まで。

近代英語期——1500年から現代まで。

近代英語期の範囲において、およそ1500～1600年に含まれる、初期近代英語期⁽¹⁰⁾が分けられる。各時期間の境界をしめす日附(1100, 1500)は、およそであり、条件付の意味を持つて⁽¹¹⁾いる。この数字は、単に、11世紀と12世紀の言語、あるいは、15世紀と16世紀の言語の間に、本質的な差異が存在するという事実の図式的な表現でしかない。この日附の余りに数字的な理解; 1789, あるいは1917のようなものは、英語の歴史のすべての面の完全な歪曲を結果として伴うものである。

古代英語期と中世英語期の間の境界を示す日附は、他の歴史的な日附、イギリスのノルマン征服⁽¹²⁾の年、1066年と密接に結びついている。中世英語期と、近代英語期の間の境界は封建主義の衰退と Tudor 王朝の絶体主義⁽¹³⁾の発生⁽¹³⁾の時期に対応する。この変動の表現は、赤バラの内戦(百年戦役)(1455～1485)であつた。

§ 41 英語史の三つの時期の各々は、一定の特徴⁽¹⁵⁾によつて特徴づけられる。英国の言語学者 Henry Sweet (1845～1912) は、音声的型態の特徴⁽¹⁶⁾に基き、この時期の次の特性をあげている。

古代英語期—完全屈折の時期 (full endings⁽¹⁸⁾); 強勢がおかれていない語尾に、任意の母音が立つ。すなわち, sunu, 'son' sinzan 'sing'

中世英語期—水準語尾の時期 (levelled endings⁽¹⁹⁾); すべての母音がおかれていない語尾は、(書くときには、文字 e で表わされる) 弱母音 [ə] の型のもとに一様に水準化された。
例: sune, 'son', sinzan 'sing'.

(1) ibid., стр. 42 (2) племенные диалекты (3) местные диалекты

(4) периодизация истории английского языка (5) древнеанглийский (язык)

(6) англо-саксонский (7) среднеанглийский (8) новоанглийский

(9) хронологические вехи (хронологическая веха) (10) ранненовоанглийский период

(11) условное значение (12) завоевания Англии норманнам

(13) возникновения абсолютной монархии Тюдоров

(14) междоусобные войны Алой и Белой Розы (15) определенные признаки

(16) Английский лингвист Генри Суит (17) фонетико-морфологический признак

(18) полные окончания (19) нивелированные окончания

近代英語期—消失語尾の時代⁽¹⁾ (lost endings); 語尾の弱母音は、消滅する: son, sing.

英語の歴史の時代区分の原則に関する問題は、大きな関心をもたらす。正確な時代区分は、ソヴィエト言語学の規範に一致する。すなわち、人間の活動の特定の相として言語の特性⁽²⁾を研究する必要がある。そして、言語の歴史とその言語を話す国民の歴史とを結ばなければならない。

この観点から英語史の伝統的な時代区分⁽³⁾、すなわち、英語の歴史を三つの時期に分割すること——、古代、中世および近代英語期への分割——を取扱う場合には、この区分が、大体これらの時期の要求を十分に満足させることを示すことが必要である。

事実、一方においては、強勢のおかれていない語尾での母音の扱いのような本質的な特徴—音韻構造、と同時に、文法構造の発達をも表現する特徴—にも立脚しているので、この時代区分は、英語の発達における重要な法則性を表現している。

他方においては、古代および中世の間の境界は、ノルマンの征服と封建主義の発達と一致する。が、中世と近代の境界は、英国の形成に対応する。このような連関は、上に挙げた時代区分が、英語の歴史と英国の歴史の結びつきを表現しているものであることを示している。

英語史研究の史料⁽⁷⁾

§ 42 古代の時期の英語の研究にさいして、根本的な資料⁽⁸⁾としては、書写文献⁽⁹⁾が役に立つ。これらの文献は、その時代の語彙や型態や構文の明確な構図を与える。音韻に関しては、書写文献の示すものは、必ずしも、全く、明瞭で、完全とは言えない。一方において、時たま、同一の文字が、異つた音を表現している（特に、文字においては、開母音と閉母音の変種⁽¹³⁾が区別されていない場合が起こる）；他方において、保守的な独特の綴字法⁽¹⁴⁾によつて、しばしば、音韻変化は綴字による表現が行われ⁽¹⁵⁾ない。そして、ある文献の正字法は、その文献よりも、はるかに、より古い文献の発音を示している⁽¹⁶⁾。

音韻に関連して、書写文献に対する補助的資料としては、次のものが役立つ⁽¹⁷⁾。

1) 資料的⁽¹⁸⁾文字: 個人的な手紙や、遺言や、日誌や、官庁書類等に残っている。資料的⁽¹⁹⁾文字は、しばしば、音韻的である。すなわち、非常に音声表記的なものである。それ故、語の音声的構造⁽²³⁾を確定するのに役立つ。

2) 韻: 一方においては、お互いに韻を踏んでいる語の綿密な研究、他方においては、類似の文字で書かれているにも拘らず、韻を踏んでいない語の研究は、その時代の発音に対する、本質的な探究を許すものである。もちろん、この韻という特徴は、確実なものでないことは、言うをまたない。なぜならば、不確実な韻、特に、伝統的な綴字韻⁽²⁴⁾（いわゆる

- | | | | |
|-------------------------------|--|------------------------------|----------------|
| (1) утраченные окончания | (2) специфические особенности языка | | |
| (3) традиционная периодизация | (4) норманское завоевание | | |
| (5) развитие феодализма | (6) английская нация | (7) основной материал | |
| (8) письменные памятники | (9) лексик | (10) морфология | (11) синтаксис |
| (12) фонетика | (13) открытый и закрытый варианты гласного звука | | |
| (14) свойственная орфография | консерватизм | (15) фонетические изменения | |
| (16) произношение | (17) дополнение | (18) малограмотные написания | |
| (19) частные письма | (20) завещания | (21) дневники | (22) документы |
| (23) рифмы | (24) традиционные орфографические рифмы | | |

rhymes to the eye) と呼ばれているものがあるから。例えば、現代英語の far: war, love: move. 一方また、light: write のような韻は、この文献のこの綴字法においては、語 light における文字 **gh** は、すでに発音されていなかったということが、相当確実に推測される。

3) 英国の文法学者、また外国の文法学者による音の記載⁽²⁾；そのような記述は、しばしば16～17世紀に見られる。このような資料は、大きな注意をもつて扱う必要がある。なぜならば、この時代には、科学的な音声学は存在せず、それゆえ、音の記載は、非科学的な性格をもっていたから、のみならず、文法も、因習的正字法の影響を多分に受けていたからである。

§ 43 非常に多くの場合において、すでに、英語の古代文献へつくことは、英語の現象の歴史的説明に対しては不十分であることを示している。我々に残されている最も古い時代の文献は、7世紀の終りに遡る。より古い時代からは、いかなる書写文献も残っていない。一方、すでに、最も古い時代の文献において、無数の、主として、音声構造面の現象は完成されていた。そして、より古い時代に生じた、推移過程の完成された結果が存在している状態であった。より初期の時代に属する他のゲルマン諸語の資料による智識⁽⁶⁾が、我々の自由にならない以上、その音韻の推移過程に先行した語型は仮定的な再構型に限定しなければならない。

しかし、ここでは、ゴート語の助けがある。ゴート語から我々には、非常に古い時代に遡る文献が残されている。すなわち、4世紀に、ゴート人の司祭 Wulfila によつてなされたバイブルの翻訳である。

ゴート語は、ゲルマン語の他の語派、東ゲルマン語に属しているにも拘らず、また英語、あるいは、他のゲルマン諸語の祖語でないにも拘らず、ゴート語の資料は、ゲルマン諸語に存在する語型の分析に、非常に大きな利益を与える。この資料のおかげで、全く仮定的にのみ再構されうる語型が、文書記録の裏付けをうるのである。

それゆえ、このゴート語によつて、他のゲルケン諸語における、Ablaut 現象のような、はるかに根本的な別の現象の研究が、可能になった。非常に有効な補足的な光を、またゴート語は、古代英語を含む、他のゲルマン語の格変化や、動詞変化の体系に対して投げかける。

それゆえ、本稿においては、くり返し、ゴート語との対置による助けを求めている。なぜならば、そのような対置は、英語の無数の重要な現象を、深く説明する可能性を与えるから。

III 古 代 英 語

ブリテン島でのゲルマン諸王国の型成⁽¹⁸⁾

-
- (1) написание (2) описания звуков (описание звука) (3) научная теория фонетики
 (4) консервативная орфография (5) обращение (6) данные
 (7) эти фонетические процессы (8) гипотетическое восстановление
 (9) готский епископ Вульфила (10) перевод Библии (Библия) (11) предок
 (12) данные (13) документальное подтверждение (14) трактовка
 (15) склонение (16) спряжение (17) сопоставление
 (18) образование германских государств на территории Британий

§ 44 ブリテン島に定住したゲルマン諸民族は、七つの独立の異教的な諸王国を型成した。⁽¹⁾この諸王国間で、4世紀の才月の間に、各王国間で優位を競う戦いが行なわれた。ケン⁽²⁾ト、サセックス⁽³⁾、エセックス⁽⁴⁾、ウエセックス⁽⁵⁾、マーシア⁽⁶⁾、東部アングリアと⁽⁷⁾、二つの地域、⁽⁸⁾ベルニキア⁽⁹⁾と⁽¹⁰⁾デイレから成るノーサンブリアである。この戦いにおいて、ノーサンブリア⁽¹¹⁾、次にマーシアに勝利が帰した。828年に、アングロサクソン諸王国の戦いは、ウエセックス⁽¹²⁾が決定的な勝利を占めた。ウエセックスの王の⁽¹³⁾エグベルフトは、マーシアとノーサンブリアを従えた。この時代からウエセックスの歴代の王は、アングリアの王となり、そしてウエセックスの首都の⁽¹⁴⁾ウインチェスター（ロンドンの南西、約100km）は、アングリアの首府でもあった。

この時代には、アングロサクソンのブリテン島は、ほとんど完全にヨーロッパから、分離⁽¹⁵⁾されていた。そして、特に、ローマからは、597年に、法王グレゴリー一世は、ゲルマンの移住民族の間に、キリスト教を⁽¹⁶⁾広めアングリアを自己の政治的範囲の下に治める目的で、アングリアに⁽¹⁷⁾宣教師を送った。キリスト教は、アングリアに、また、アイスランドから⁽¹⁸⁾浸入した。アイスランドは、ゲルマン族の侵略を受けなかつた。アイスランドの、オスヴィニ⁽¹⁹⁾（642～670）大王のもとに、キリスト教はノーサンブリアに⁽²⁰⁾広大な範囲を獲得した。7世紀に、キリスト教は全アングリアに⁽²¹⁾広まった。ラテン語は、この時代においては、西ヨーロッパに対しては、教会と神学の汎ヨーロッパ的言語⁽²²⁾であつた。ローマとアングリアの新しい交渉の樹立の結果、教会、神学の言語⁽²³⁾としてラテン語が導入された。

このローマ、ラテン文化の新しい関係の結果は、ラテン語の語イの、新しい、第二の波⁽²⁴⁾の、英語への侵透であり、その語イの大部分は、ギリシア語起原の語イであり、直接、あるいは間接に、宗教的な教会に関する概念の面と結ばれている語イである。

古代英語期における文献⁽²⁵⁾

§ 45 古代英語の文献は、その構成によつて二つのグループに分けられる。ルーンの文⁽²⁶⁾献とラテン文字の文献⁽²⁷⁾である。

ルーン文字のものは、今日ではわずか、二、三の碑文的文献⁽²⁸⁾が残っているにすぎない。その中でもつともよく知られているのは、ルトウェルの十字架に書かれた文字である。このテ⁽²⁹⁾クストは、大きな石の十字架に刻まれていて、この十字架はスコットランドの南西部のルト⁽³⁰⁾ウェルの村の近くに立っている。このテキストは、あまり大部ではない、宗教的な内容をも⁽³¹⁾

- | | | |
|---|---------------------------------------|----------------------------------|
| (1) семь самостоятельных варварских государств | (2) Кент | (3) Суссекс |
| (4) Эссекс | (5) Уэссекс | (6) Мерсия |
| (7) Восточная Англия | (8) Берникия | |
| (9) Дейра | (10) Нортумбрия | (11) Мерсия |
| (12) Эгберхт | | |
| (13) Уэссекские короли | (14) столица Уэссекса город Уинчестер | |
| (15) англо-саксонская Британия | (16) Европа | (17) Рим |
| (18) папа Григорий I | | |
| (19) миссионер | (20) Ирландия | (21) король Освин |
| (22) Латынь | | |
| (23) Международный язык | (24) церковный язык | (25) римско-латинская культура |
| (26) серия | (27) греческое происхождение | |
| (28) письменность древнеанглийского период (письменность~written languages) | | |
| (29) рунические памятники | (30) памятники латинского шрифта | |
| (31) руническое письмо | (32) надпись | (33) надпись на Рутвелский крест |
| (34) Рутвел (Ruthwell) | | |

つ詩篇⁽¹⁾である。

今一つのよく知られているルーンの文献は、いわゆる、“ルーンの小箱⁽²⁾”に書かれたもので、この小箱は鯨の骨で作られていて、フランスで、クレルモン、フェラン⁽³⁾ (Clermont-Ferrand) の街の近くで発見されたもので、今日では、ロンドンの大英博物館に収められている。ルーン文字のテキストは、鯨のヒゲについてのテーマに関して書かれている、いくつかの詩篇から成っている。このテキストは、恐らく八世紀まで遡るものであろう。

ローマ文化へのアングロサクソン族の加入の後で、ルーン文字は、ラテンのアルファベット⁽⁴⁾によつて駆逐された。古代英語の音韻体系は、かなり、ラテン語の音韻体系とは異なっていたので、ラテン語のアルファベットは、古代英語の音韻の表現のためには、不十分であつた。アングロサクソンの写字生(書記)達は、いくつかの文字をルーンのアルファベットから移入して、この不足を補充している。他の場合には、二つのラテンのアルファベットの文字が、二つの異なつた意味において用いられている。それゆえ、例えば、古代英語の文字において、文字 **ƿ** (ラテンの文字 **g** の変形⁽⁵⁾) は、いくつかの違つた音を示した。種々な音が、また、文字 **c** によつて表わされた。ルーン文字から二つの記号が移入された。ルーン文字の **þ** は、歯茎摩擦子音に。(この子音の表現のためには、また記号 **ð** も用いられる。)そして、また音 **w** を示すために、特殊なルーン文字が用いられた。

今日、我々に伝えられている最も古い古代英語の文献は、8世紀に遡る。5世紀から6、7紀の英語に関しては、後期の英語の資料を、他のゲルマン諸語の資料、特に、ゴート語のそれとの対置に基いて、我々は、ただ、仮説を立てうるにすぎない。

§ 46 古代英語の最も初期の時代から、三つの主な方言⁽¹¹⁾が認められる。ノーサンブリアン方言⁽¹²⁾ (Northumbrian) は、ハンバー河の北方に住んでいたアングル人が、しゃべつていた。マーシア方言⁽¹³⁾ (Mercian) は、ハンバー河とテムズ河の間に住むアングル人の言語であり、ウエセックス方言⁽¹⁴⁾、すなわち、ウエストサクソン方言⁽¹⁵⁾ (West Saxon) は、テムズ河南部のサクソン人の言語であつた。第四の、より重要でない方言は、ケント方言⁽¹⁶⁾ (Kentish) であり、ジュート人の言語であつた。ウエセックスの政治的優位の確立は、ウエセックス方言の地位に影響を及ぼした。9世紀の間に、ウエセックス方言は、この時代の支配的な書きコトバ⁽¹⁷⁾ (文語) となつた。

§ 47 古代英語期の主要な文献は、次のように主要な方言に基いて分けられる。

ウエセックス方言 — アルフレッド大王⁽²⁰⁾ (849~900) の著作⁽²¹⁾： 1) 法王グレゴリー一世⁽²²⁾ (540~604) によつて著された *Cura pastoralis* 《牧者心得》の、アルフレッド自身の序文を

- | | |
|--|--------------------------------------|
| (1) стихотворение религиозного содержания | (2) Руническая шкатулка |
| (3) Франция | (4) Клермон-Ферран |
| (5) Британский музей в Лондон | |
| (6) звуковая система древнеанглийского языка | (7) писцы (писец) |
| (8) видоизменение | (9) переднеязычный щелевой согласный |
| (10) гипотезы (гипотеза) | (11) основные диалекты |
| (12) нортумбрийский диалект | |
| (13) Хембер | (14) мерсийский диалект |
| (15) уэссекский диалект | |
| (16) западносаксонский диалект | (17) кентский диалект |
| (18) гегемония | |
| (19) письменный язык | (20) король Альфред |
| (21) сочинения (сочинение) | |
| (22) Обязанности пастыря | |

つけたラテン語からの翻訳; 2) 5世紀の人, スペインの僧侶, オロセウス⁽¹⁾ (Orosius) の手になる (“Historia mundi adversus paganos”) 《世界史》のラテン語からの翻訳。この翻訳の中に, すなわち, オーゼレ⁽³⁾とヴルフスタン⁽⁴⁾の旅行記において, アルフレッド⁽⁵⁾ (Alfred) 自身の手に成る本文が挿入されている; 3) ローマ哲学者, ボエセウス⁽⁶⁾ (Boethius) の手になる《哲学の慰め》 (“De Consolatione philosophiae”) の翻訳; “Anglo-Saxon chronicle” 《古代英語年代記》の古代の部分 (891年まで)⁽⁷⁾。僧院長, エルフリック⁽⁸⁾ (Aelfric.) の著作 (10c.)。ヴルフスタン (Wulfstan.) の説教集 (11 c. の始め)。

ノーサンブリア方言: ルトヴェルの十字架と, フランクの小箱に書かれたルーン碑文⁽¹¹⁾, 福音書の翻訳⁽¹²⁾とカドモン (Caedmon) の讃歌⁽¹³⁾, いわゆる《ベーダ (Beda) の臨終の歌》⁽¹⁴⁾。

マーシャ方言: 詩篇⁽¹⁵⁾ (9世紀) と讃歌⁽¹⁶⁾の翻訳。

ケント方言: 詩篇 L-LXX と古代の勅令の翻訳⁽¹⁷⁾。

この方言で書かれた文献の, 量と質との連関において, ウェセックス方言の圧倒的な優勢は, この時期におけるウェセックス方言の支配的な地位を確立した。

言語的な観点においては, 古代英語の文献の中で, 韻文作品は, 特別な地位を占めている⁽¹⁹⁾。これに属するものは, 作者不詳の詩, ベイオウルフ (“Beowulf”), 韻文《創世記》 (“Genesis”), 《出エジプト記》 (“Exodus”), ユーディス (“Judith”), 僧侶キューネウルフ (Cuthnewulf) の詩, 《エレナ》 (“Elene”), 《アンドレイ》 (“Andreas”), 《ジュリアーナ》 (“Juliana”) 等である。これらの詩の中には, ウェセックス方言の語型と並んで, かなり多数のアングリア方言の語型がみられる⁽²⁰⁾。明らかに, これらの作品は, いくつかの散文のテキストとして, 始めはアングリア方言で書かれたものであるが, ウェセックスの主導権時代に, 写字生達は, 多くのアングリア方言の語型を, ウェセックス方言の語型で書きかえた。そのために, この詩の中で, 我々に伝えられている手写原本には, 色々の方言の要素が結合している⁽²¹⁾, 混然とした英語の構図が示されている⁽²²⁾。

音 韻 構 造⁽²⁴⁾

母 音

§ 48 二重母音を含めて, すべての古代英語の母音は, 長母音と短母音があつたと考えられる。古代英語の手写原本においては, 母音の長いことは, しばしば文字の上におかれた (‘) の記号によつて, 示されている⁽²⁵⁾。

- | | | | |
|---|--|-------------------------------|---------------|
| (1) испанский монах | (2) Оросий | (3) Охтхер | (4) Вульфстан |
| (5) путешествие | (6) римский философ Боэций | (7) Утешений философии | |
| (8) Англо-саксонская хроника | (9) Эльфрик | (10) проповеди Вульфстана | |
| (11) Рунические надписи | (12) перевод евангелия | (13) Гимн Кэдмона | |
| (14) Предсмертная песнь Бэды | (15) перевод псалтыри | (16) гимны | |
| (17) псалмов | (18) древние грамоты (грамота) | (19) поэтические произведения | |
| (20) Веовульф | (21) поэтическая версия | (22) Книги Бытия | (23) Исход |
| (24) Юдифь | (25) Кюневульф | (26) Елена | (27) Андрей |
| (28) Юлиана | | | |
| (29) уэссекские формы (уэссекская форма) | (30) английские формы (английская форма) | | |
| (31) переписчик | (32) рукописи (рукопись) | | |
| (33) картина смешанного языка ~ cf. mische langue | (34) фонетический строй | | |
| (35) долгота гласные | | | |

母音：	a	æ	e	i	o	u	y	a	二重母音 ⁽¹⁾	ea	eo	ie	io
	ā	ǣ	ē	ī	ō	ū	ȳ			ēa	ēo	īe	īo

æ は、現代英語の man とか hat の語における [æ] のように発音された。また、ǣ が、これに対応する長母音であつた。y はドイツ語の Mütter (母親) の ü のように発音された。また ȳ はドイツ語の Gemüt の ü のように発音された。

すべての二重母音は下降母音⁽²⁾であつた。二重母音の初めの構成音が、音節型成音素⁽³⁾である。

ā は、n と m の前でのみ見られ、あるときは a、あるときは o によつて示される。man, monn; ‘人’; land, lond ‘土地’; nama, noma ‘名前’。多分、この音の音価は、a、o の間で動いていると考えられる。

a は、ゴート語の a に対応する。a は、次の音節に軟口蓋系列の母音⁽⁶⁾ (奥母音) がくるときには、主として開母節⁽⁷⁾において表れる。例 dagas ‘日(複数)’、(ゴート語 dagōs); caru ‘心配’; macian ‘なす’。閉音節⁽⁸⁾においては、a はまれにしか表れない。例: habban (Gothic. haban); asce ‘灰’; wascan ‘洗う’。

ā̄ は、任意の音節に立つことができる。この ā̄ は、ゴート語の ai に対応する。例: stān ‘石’ (Gothic. stains), hātan ‘呼ぶ’ (Gothic. haitan), Cnāwan ‘知る’。

æ は、ゴート語の a に対応する。æ は、閉音節⁽¹⁰⁾に表われる。例: dæg ‘日’ (Gothic. dags); bæd ‘命じた (pt. sig.)’。次の音節の母音が、前舌系列に属するならば、開音節⁽¹¹⁾においては、dægēs ‘days’; wæter ‘水’ (Gothic. watō), となる。

ǣ には、二重の起源が考えられうる。

1) ǣ¹ は、ゴート語の ē に対応する。この ǣ は、例えば、第 4 群、及び、第 5 群の強変化動詞の過去複数に表われる。stælon ‘盗んだ’ (Gothic. stēlom,); bæron ‘運んだ’ (Gothic. bērum); spræcon ‘話した’; mæton ‘計る’。また他の場合にも用いられる。例: dæd ‘功績’ (Gothic. dēps)。

2) ǣ² は ā の i mutation の結果であり、ゴート語の ai に対応する。この ǣ は、第 1 群弱変化動詞の語形に表われる。hælan ‘治療する’; dræfan ‘追跡する’; ælfan ‘退ける’。

e も、また、二重の起源が考えられる。

1) e は、ゴート語の i、あるいは e に対応する (cf. § 23); 第 3、第 4、第 5 群の強変化動詞の不定詞の語型において表われる。helpan ‘助ける’; stelan ‘盗む’; sprekan ‘話す’; beran ‘運ぶ’: (Gothic. hilpan, stilan, bairan)。

2) e は、æ, あるいは ā に対する i-umlaut⁽¹³⁾ の結果である。例: setten ‘置く’; senzan ‘焼く’; bendan ‘曲げる’。

ē は、ふつうは、ō に対する i mutation の結果である。ē は、しばしば、第 1 群弱変化動詞の語形に表われる。例: dēman ‘約束する’; cēpan ‘保存する’。

i は、不変の i と、可変の i が考えられうる。不変の i は、ゴート語の i に対する、が、

(1) дифтонги (дифтонг) (2) нисходящие [дифтонги] (3) первая составная часть
 (4) слогаобразующий элемент (5) характер этого звука
 (6) гласный заднего ряда (7) открытый слог (8) —г (9) любой слог
 (10) гласные следующего слога (11) передный ряд (12) перегласовка на i от ā
 (13) i-умлаут от æ или ā (14) устойчивый-i (15) неустойчивый-i

しかし、この **i** は、**y** と混合しない；例：bindan ‘しばる’ (Gothic. bindan); niman ‘とる’ (Gothic. niman)。

可変の **i** は、二重母音 **ie** の単母音化の結果である。⁽¹⁾ そして、しばしば、**y** と交替する。
例：nicht ‘夜’ (nieht, nyht)。

i もまた、不変、または、可変である。可変の **i** は、一般に、ゴート語の **ei** に対応する《ei の発音は **i** である。》。不変の **i** は、第1群強変化動詞の不定詞において表われる。
例：writan ‘書く’; bidan ‘期待する’; gripan ‘つかむ’ (Gothic. greipan)。可変の **i** は、**ie** から生じ、**y** と交替する。例：hi ‘彼等’ (hie, hy)。

o は、ゴート語の **u** あるいは **au** (cf. § 23) に対応する。この音は、第2群、第3群の **b**, **c**, および第4群の強変化動詞の第2分詞の語形に見られる。⁽²⁾ coren ‘chosen’, worden ‘became’, golen ‘盗まれた’ : (Gothic. kusans, waurpans, stulans)。

a は、⁽³⁾ 鼻子音の前で、**a** から変化した：mon ‘人’ (Gothic. manna), hond ‘手’ (Gothic. handus)。

ō は、ふつうは、ゴート語の **ō** に対応する、例：gōd ‘よい’ (Gothic. gōps); この **ō** は、第4群強変化動詞の、過去時制の語形にみられる：scōc ‘shook’, hlōh ‘laughed’。

u は、ゴート語の **u** あるいは、**au** (cf. § 23) に対応する；第2、第3群強変化動詞の、過去複数の語形にみられる、例：curon ‘chosen’ bundon ‘bound’, hulpon ‘helped’, wurdon ‘became’ (Gothic. kusum. bundum. hulpum, waurpum)。

ū は、一般に、ゴート語の **ū** に対応する。**ū** は、次のような語にみられる；例：hū ‘now’, hūs ‘house’ (Gothic. hūs), が、またいくつかの第2群強変化動詞の不定詞の語形にもみられる；例：lūcan ‘閉じる’, buzan ‘曲げる’。

y は、不変、または、可変である。不変の **y** は **u** に対する **i**-mutation の結果である；
例：wyllan ‘woolen’, gylden ‘golden’。可変の **y** は、**i** と交替する。⁽⁴⁾

ȳ はまた、可変と不変の **ȳ** が存在する。可変の **ȳ** は大多数の場合において、**u** に対する **i**-mutation の結果である；例：mȳs ‘mice’, fȳr ‘fire’, 可変の **ȳ** は、**i** と交替する。⁽⁵⁾

短二重母音 **ea**, **eo**, **io**, **ie**, そしてまた、長二重母音 **ie** は、⁽⁶⁾ mutation, gradation, palatalization の結果である。⁽⁷⁾

長二重母音 **ēa**, **ēo** は、ゴート語の二重母音に対応する。

ēa は、⁽⁸⁾ ふつうは、ゴート語の **au** に対応する。**ēa** は、bēam ‘tree’, dēap ‘death’ の型の語にみられるが、また、強変化第二群動詞の過去単数の語形にもみられる；例：cēas ‘chose’, lēac ‘closed’ (Gothic. daups, kaus, lauk)。

ēo は、ふつう、ゴート語 **iu** に対応する。**ēo** は、第2群強変化動詞の不定詞においてみられる；例：cēosan ‘choose’, bēodan ‘offer’ (Gothic. kiusan, bindan)。⁽⁹⁾

io は、大多数の場合において、**ēo** の変種である。⁽¹⁰⁾

(1) монофтонгизация дифтонга **ie** (2) форма причастия второго

(3) носовые согласные (4) нестойчивое **y** чередуется с **i** (чередование ~ alteration)

(5) долгие дифтонг (долгий дифтонг) (6) перегласовка (7) преломление

(8) палатализация (9) слово типа bēam (10) вариант **ēo**

母 音 変 容

§ 49 4世紀のゴート語にかなりはつきりした形で残っているゲルマン語 Ablaut の原初体系は、もつとも初期の古代英語の文献において、個々の母音の多様な変化の結果として、かなりの変容を見せている。それゆえ、例えば、ゴート語においては、第1群強変化動詞において、**i/a/zero grade** の、現在の母音変容系の原型が、全く完全に残っていて、すべての語型に、基礎母音 **i** の要素が見られる；(Gothic. reisan-rais-risum-risan)。だが、ゴート語の二重母音 **ai** が、長母音 **i** に対応している古代英語においては、この原初体系は、ゴート語ほど、はつきりとは認められない；(OE. risan-rās-rison-risen)。なканずく、より大きな変容が、強変化動詞の第2群に表われている。この動詞群においては、古代英語における **ēo** が、ゴート語の二重母音 **iu** に対応している。そして、古代英語の **ēa** はゴート語の **au** に対応している。cf.: Gothic. biudan-bauþ-budum-budans: OE. bēodan-bēad-budon-boden. この例においては、原初の Ablaut Series の構成⁽⁴⁾ (すべての語型において、要素 **u** を見せている **i/a/zero grade** の母音変容)は、ほとんど完全に消滅した。古代英語における詳細な Ablaut の記述は、強変化動詞の記述との関連において、§ 126で述べる。

Ablaut は、いくつかの場合において、語型成の手段として表われる：cf, 例: belifan ‘remain’ — lāf ‘remainder’, forlēosan ‘lose’ — lēas ‘devoid of’, beran ‘carry’ — bær ‘stretcher’, faran ‘travel’ (by land or sea) — for ‘journey’, rīdan ‘ride’ (on horseback) — rād ‘journey on horseback’。

子 音

§ 50 古代英語における子音の体系は、次のような、型相をもっている：唇音⁽⁷⁾ **p, b, m, f, v**；前部口蓋音⁽⁸⁾ **t, d, p, ð, n, s, r, l**；中部および、後部口蓋音⁽⁹⁾ **c, ʒ, h**。

文字 **x** は、語結合 **cs**⁽¹⁰⁾ によつて表わされる。

子音の幾つかは、多義的であつた。すなわち、多様な状態にある種々な音を表した。この現象は、古代英語において起つた、音韻変位と、密接な連関をもっている。

文字 **ʒ** は、語の種々な状態において、種々な子音を表わした；⁽¹²⁾

1 語頭においては、子音の前、あるいは、奥母音系列の母音の前、また、語中においては **n** の後では、**ʒ** は、後口蓋有声破裂子音、**[g]**⁽¹³⁾ を表わした； 例：ʒlēo ‘joy’；ʒōd ‘good’, ‘valiant’, sinʒan ‘sing’。

2 奥母音系列の母音の後、また、子音 **r** と **l** の後では、文字 **ʒ** は、後口蓋摩擦音⁽¹⁴⁾ **[ɣ]** を表わした； 例：daʒas ‘days’, sorʒ ‘anxiety’, folʒian ‘follow’。

(1) первоначальная германская система аблаута

(2) данный ряд аблаута из чередование i/a/нуль

(3) осложненный элемент i

(4) первоначальное строение ряда (5) средство словообразования (6) вид

(7) губные (labials) (8) переднеязычные (9) среднеязычные и заднеязычные

(10) сочетание (11) многозначный (12) задний ряд

(13) заднеязычный звонкий смычный согласный [g]

(14) заднеязычный звонкий щелевой согласный [ɣ]

3 語頭において、前舌系列の母音の後では、文字 ʒ は、有声口蓋摩擦子音 $[\text{j}]$ を表わした；例： ʒiefan , ‘give’, ʒēar ‘year’, dæʒ ‘day’。 ʒ の重複の代りに、 cʒ が書かれる。

構 文 論⁽⁸⁾

§ 51 古代英語の構文論は、多くの他の古代の言語と同様に、その型態論⁽⁴⁾に比して、非常に僅かしか研究されていない。構文論の分野においては、現代にいたるまで、今後の研究を必要とする多くの問題が残っている。我々は、この章で、科学的に研究され、体系的記述を許す、古代英語構文論のいくつかの根本問題を研究する。

単 文⁽⁵⁾ 文 の 要 素⁽⁶⁾

§ 52 古代英語においても、現代英語におけると同様に、文の要素は、分離される。

主要素——主語と述語、従属要素——補足語、形容詞、副詞。文においては、呼び掛け、挿入語句、語結合が、考えうる。

主 要 素 主 語

§ 53 多くの場合において、主語は主格におかれた名詞によつて表現される。例： $\text{Cōm se foresprecena hunʒur ēac swylc hider on Bryttas}$ ‘上に述べた飢餓は、またブリトン人のなかにも拡がつた’； $\text{pa stōd him sum mon æt purh swefn}$ ‘彼の夢枕にある男が立つた’； $\text{þonne wiþ norþan Dōnua æwielme and be ēastan Rīne sindon Eastfrancan}$ ‘それから、ドナウ河の北方と、ライン河の東に、東フランク族が住んでいた’。

これと並んで、主語は代名詞によつて表現される： 1) 人称代名詞： $\text{pā ārās hē from þæm slæpe}$ ‘それから彼は、睡りからさめた’； $\text{Nū hæbbe we scortlice gesæd ymbe Asia londgemæro}$ ‘今、我々は、アジアの土地について簡潔に話した’； 2) 指示代名詞： $\text{pæt wæs ʒōd cyning}$ ‘それは勇敢な王であつた’； $\text{pæt is wynsum wong}$ ‘それはうまい場所であつた’； 3) 疑問代名詞： $\text{hwā ʒestilleþ pæt ?}$ ‘だれが、彼をなだめるのか ?’； $\text{hwæt drēoʒest þū ?}$ ‘あなたは、何をしているのか ?’

- | | | |
|--|--|-----------------------|
| (1) передний ряд | (2) удвоенный ʒ —double (reduplicated) ʒ | (3) синтаксис |
| (4) морфология | (5) простое предложение | (6) члены предложения |
| (7) главные члены | (8) подлежащее | (9) сказуемое |
| (11) дополнение | (12) определение | (13) обстоятельство |
| (15) вводные слова | (16) словосочетания | (14) обращение |
| (17) существительные в именительном падеже | (18) местоимения (местоимение) | |
| (19) личное местоимение | (20) указательное (местоимение) | |
| (21) вопросительное (местоимение) | | |

客 語⁽¹⁾

§ 53 古代英語においては、現代英語と同様に、動詞的客語⁽²⁾と、名詞的客語⁽³⁾がある。

動 詞 的 客 語

§ 54 動詞的客語は、単純客語⁽⁴⁾と、複合客語⁽⁵⁾がある、動詞的単純客語は動詞的語型⁽⁶⁾によつて表現される： *pis ærendgewrit Āgustīnus ofer Sealtne sǣ sūpan brōhte iezbūendum* ‘この教書を、アウグスタスは、南方から、塩からい海を越えて島民にもたらした’； *Hæfde pā gefohten foremǣrne blæd Iudip at gupe* ‘それから、偉大で卓越した Iudip は戦闘において、戦つた’； *pā ārās hē fram pām slæpe* ‘それから彼は、眠りからさめた’。

動詞的複合客語は、動詞 *cunnan*, *magan*, *mōtan* の人称変化型と、主動詞の不定詞⁽⁸⁾からできている： *Ne con ic nōht singan* ‘私は何も唱うことができない’； *Nē hē wiht fram mē flōd-ȳðum feor flēotan meahte* ‘彼は、波の上で、私から遠く離れて、ただよい去ることができなかつた’。

名 詞 的 客 語

§ 55 名詞的客語は、いつも、複合客語である。すなわち、連結詞⁽¹²⁾と、述語部⁽¹³⁾からなつている。連結詞の機能においては、*wēsan* (*bēon*) ‘be’ が、*weorpan* ‘become’ と同様に用いられる。

述語部の機能において、種々な品詞⁽¹⁴⁾が用いられる。しばしば、この機能において、名詞、形容詞が表われる；例：*pæt wæs gōd cyninȝ* ‘それはよい王であつた’； *Hals is mīn hwīt* ‘私の首は白い’； *pā wurdon blīp burhsittende* ‘それから町の人は、喜んだ’； *underne Froncum ond Frysum fyll cyninȝes wīde wēorpep* ‘王の死は、フランク人と、フリリースランド人に、はつきりと知れわたつた’。

従 属 要 素⁽¹⁵⁾ 補 足 語⁽¹⁶⁾

§ 56 古代英語の補足語⁽¹⁷⁾は、(対格の)直接補語⁽¹⁸⁾と、間接補語⁽¹⁹⁾があり、間接補語は更に、前置詞なしの補語⁽²¹⁾と、前置詞つきの補語⁽²²⁾に分れる。前置詞なしの間接補語は、生格⁽²³⁾、与格⁽²⁴⁾、

- | | | |
|----------------------------|------------------------------------|----------------------------------|
| (1) сказуемое | (2) глагольное сказуемое | (3) именное сказуемое |
| (4) простое сказуемое | (5) составное сказуемое | (6) простое глагольное сказуемое |
| (7) глагольная форма | (8) составное глагольное сказуемое | (9) личная форма |
| (10) основной глагол | (11) инфинитив основного глагола | (12) глагол-связка |
| (13) поредикативный член | (14) части речи | (15) второстепенные члены |
| (16) дополнение | (17) дополнение | (18) винительный падеж |
| (19) прямое дополнение | (20) косвенное дополнение | (21) беспредложное дополнение |
| (22) предложное дополнение | (23) родительный падеж | (24) дательный падеж |

あるいは対格から成る。間接補語は、前置詞⁽¹⁾と各格型の名詞⁽²⁾からなる。これらの名詞は、主格、与格、あるいは対格の前置詞を必要とする。

直接補語

Hē forlēt pæt hūs pæs gebēorscipes ‘彼は、その酒宴の家をあとにした’; pā heht heo gesomnian ealle pā zelæredestan men ‘それから彼女は、すべての学識のある人を集めることを求めた’。

間接補語

与格: pām wife pā word wel licodon ‘その女は、その言葉がとても気に入りました’; wæs sē iren-prēat wæpnum gewurpad ‘そのよろいをつけた一団は、武器を身につけた’; sægde him, hwelce gife hē onfeng, ‘どんな贈物を、彼がもらうかを、彼に言いました’; mæl is mē tō fēran. ‘私の時は過ぎて行く’。

生格: hē pær bād Westanwindes. ‘彼はそこで、東の風を待った’; Ic pæs wine Deniza, frēan Scildinga frinan wille ‘私は、デンマーク人の友に、スキルデンガの領主をたずねた’。

前置詞つき補足語

Nū hæbbe wē scortlice gesæd ymb Asia londgemære ‘今、我々は、かんたんに、アジアの土地について語った’; ne frīn þu æfter sælum ‘私の消息について聞くな’; pā ārās hē fram pæm slæpe ‘それから彼は眠りからさめた’。

限定詞⁽⁴⁾

§ 57 限定(修飾)⁽⁵⁾は、非常にしばしば、形容詞⁽⁶⁾によつて表現されるがまた、代名詞(指示代名詞、所有代名詞、疑問代名詞等)、生格におかれた名詞⁽⁸⁾や、時たま、他の手段⁽⁹⁾によつて表現されることもある。例: Hē wæs swýpe spēdig man ‘彼は非常に裕福な男であつた’; Ic forþon of þyssum gebēorscipe üt ēode ‘それゆえ、私は、その酒宴をあとにした’; sunu mīn, hlýste mīnre lāre ‘わが息子よ、私の忠告を聞け’; 同格語は形容詞⁽¹⁰⁾として考えられる: Her Aepelstān cyning, eorla dryhten, beorna bēahgifa, and his brōþor ēac Eadmund æþeling, ealdorlangne tīr zeslōgon æt sæcce ‘ここで、エーゼルスタン王、貴族の王、英雄を賞する人、と、彼の弟、プリンス王子は、戦において、生涯消えない栄冠を勝

(1) предлог (2) имя в падеже

(3) “Then she asked all the learned man to assemble”. で ‘この場合は、zesomnian を直接目的語と考えるべきか? (4) определение (5) определение

(6) прилагательное (7) притяжательное местоимение

(8) существительное в родительном падеже (9) другое средство (10) приложение

ちとつた’

副詞的修飾 (状況的規定)⁽¹⁾

§ 58 古代英語において、状況的規定は、副詞⁽²⁾、あるいは、前置詞つき語結合⁽³⁾によつて表現される。

状況規定副詞の例：Him wæs ealneweg pæt land on pæt stēorbord ‘陸地はいつでも、彼には右舷にみえた’；beorgas pær ne muutas stēape stondap ‘そこでは、山も丘も、けわしく、そそり立つていない’；on fēawum stōwum stycemælum wiciap Finnas ‘いくつかの場所に、あちこちと、フィン人達は住んでいた’；hē sæde pæt Norpmanna land wære swipe lang ond swipe smæl ‘スカンディナヴィヤ人の土地は、非常に長く、非常にせまいと、彼は言つた’。

前置詞つき語結合によつて表現された状況的規定の例：pā wæs on pā tid AEperbryht cyning hātan on Cent ‘その当時、エーゼルブリヒト王はケントにいた（直訳、エーゼルブリヒトという名 <と呼ばれる> の王）’；In pyse abbudissan mynstre wæs sum brōpor ‘この女修道院長の僧院に、ある僧侶がいた’；Hē būdē on pām lande norpweardum wip pā Westsæ ‘彼は大西洋の北方にある島国に住んでいた’。

呼 び 掛 け⁽⁴⁾

§ 59 呼びかけは、名詞、あるいは語結合によつて表現され、呼びかけられる相手の人称⁽⁵⁾におかれる：sunu mīn, hlyste mīnre lære ‘我が息子よ、私の忠告を聞け’；āris fæder mīn ‘立てよ、我が父’；iā, lēof, ic hit eom ‘そうだ、いとしき者、それは私だ’。

挿入語句と、語結合⁽⁶⁾⁽⁷⁾

§ 60 pær fram sylle ābēaz medu-benc moniȝ mīne gefræge ‘たくさんの、みつの床箱が、その枠から、たれ下つているようだ’（ここでは、ベオウルフとグレンデルの戦いのときに、饗宴の広間の壁から、お客用の、みつの香りのするベンチが、折れ落ちたのである⁽⁸⁾）；Witodlice sēo stern is lācobe stefn ‘たしかにあの声は、ヤコブの声’。

語 順⁽⁹⁾

§ 61 構文的な連関の表現方法としての語順⁽¹⁰⁾は、古代英語においては、第二義的意義⁽¹¹⁾し⁽¹²⁾か持つていなかった。語の文法的機能は、多くの場合、その特殊な語型により特徴づけられ

- | | | | | |
|-----------------------------------|-------------------------------------|---|------------------|---------------------------|
| (1) обстоятельство | (2) наречие | (3) предложные сочетания (предложное сочетание) | (4) обращение | (5) лицо |
| (6) вводные слова (вводное слово) | (7) словосочетания (словосочетание) | (8) 原註 127 pp. | (9) порядок слов | (10) синтаксические связи |
| (11) второстепенное значение | (12) грамматическая функция слова | | | |

る。それゆえ、語順⁽¹⁾の変化は、他の目的、特に、文体的な目的のために用いられる。我々は、ここで、主節⁽²⁾(文)、および従属節⁽³⁾における、個々の語順の問題を研究する。

主 語 と 述 語⁽⁴⁾

§ 62. 主文における語順の研究には、二つの場合を分ける必要がある。

- 1) 文の始めに従属節がない場合
- 2) 文の始めに従属節が立つ場合

第一の型式の文においては、正常の語順⁽⁵⁾(主語——述語)は、逆の語順⁽⁶⁾(述語——主語)よりも優勢である。《Beowulf》においては、なされた計算によれば、正規の語順は63%であるが、逆の語順は37%である。

正規の語順の例: Stræt wæs stān-fāh; stīg wisode gūmum æt gædere ‘道は多彩な石で補装されていた; そして人が並んで歩けた’; Hete wæs on hrēred hord-weard oncnīow mannes reodre ‘敵意が起つた, 財産の保管者 (dragon) は人の言葉を耳にした’。

逆の語順の例: Lixte sē lēoma ‘光が輝き始めた’; Næs sēo ecg fracod hilde-rince ‘彼は劔を使わない英雄であつた’; Ne nōm hē in pām wicum, Weder-ǵēata lēod, mǣdm-ǣhta mā ‘彼はその家にとどまらなかつた, 偉大なる宝, ウェーデル・エーアト王子 (Beowulf) は’; Wæs sio swyts wadu Sweona ond ǵēata, wæl-ræs weora wīde ǵesýne ‘決死の攻撃の人々, スウェーデン人とイェタ人の血痕が近くにみられた’; Wæs sē grimma ǵæst ǵrendel hāten ‘その魔神はグレンデルと呼ばれた’; wæs sēo hwil micel ‘(その)時は長かつた’⁽⁷⁾。上にあげた例から分るように、語順の転倒は、特別な感情的 nuance の構成手法である。

第2型の文においては、一般に転倒語順がみられる。特に pā, þonne, nū ‘then’; þær ‘there’ 等の語に導かれる場合には。

詩における転倒語順の例: pā cōm in ǵangan ealdor þe ǵna ‘それから principal thane が来た’; pā wæs be feaxe on flet boren ǵrendles hēafod’; それから、髪を毛をつかんでグレンデルの頭は船に運ばれた’; þonne sægdon þæt sǣliðende ‘それから彼等は、それを船乗りに語つた’; Nū is pīnes mægnes blǣd āne hwile ‘今は、あなたの力は、しばらくの間は強い’; þær wæs mǣdma fela of feor-wezum frætwa ǵelǣded ‘多くの財宝は、この方法で積まれた’; þær æt hýðe stōd hringed-stefna ‘その港に、鉄張りの船がいた’。

散文からの例: Hēr bræc se here on Norðhymbrum þone frið ‘この年に、敵軍は、ノースアンブリアとの平和を破つた’; pā ārās hē from pām slæpe ‘それから彼は眠りからさめた’; pā het hēo ǵesommian ealle pā ǵelǣredestan men ‘それから彼女は、すべての賢者を

(1) главные предложения (главное предложение)

(2) подчиненные предложения (подчиненное предложение) (3) вопросы (вопрос)

(4) подлежащее и сказуемое (5) прямой порядок (подлежащее—сказуемое)

(6) обратный порядок (сказуемое—подлежащее) (7) обратный порядок

(8) средство создания особого эмоционального оттенка (особый эмоциональный оттенок)

(9) поэзия (poetry) ~ поэма (poem) (10) проза

(11) here: It is the word which in the chronicle is always used for the Danish force in England, while the English troops are always fyrð. (Bosworth-Toller, pp. 532.)

呼び集めるように命令した'; *ðā wundrade ic* 'それから私は、驚いた'; *ðā seglede hē þanon sūprihte* 'それから彼は、そこから南に行つた'。

明らかに副詞的修飾語は、述語と意味的に結ばれているので、述語の一部になつてゐる。

しかしながら、上のような場合において、逆の語順は拘束力を持たない、(例えば、現代ドイツ語におけるように); 従属節で始まる文においても、正規の語順が起りうる。例: *Hēr AEþelbald cyning forþfērde* 'この年に、エーゼルバルド王は亡くなつた'; *Nū ic suna minum syllan wolde gūpgewædu* 'さて、私は、自分の息子に武具を与えよう'。

§ 63. 古代英語、特に韻文の写本においては、しばしば総合的語順⁽⁴⁾と呼ばれるものが見られる。この語順においては、補足語、そして、しばしば、副詞的修飾語句は主語と述語の間にくる。そして述語は文のあとに立つ。《Beowulf》における例: *Oft Scyld Scēfing sceaðena prēatum monegum mægðum meodo-setla oftēah* 'しばしばスキルド、スケーヴァの息子は、多くの種族の敵の部隊から、みつの板を奪つた' <ここで考えられているのは、スキルドは、しばしば、敵の陣地を破壊したということである。>; *We þæt ellen-weorc ēstum miclum feohtan fremedon* '我々は戦のそのいさおしを、十分に用意して、なしとげた'; *IC hine hrædlic heardan clammum on wæl-bedde wriðan þohte* '私は、確実なやり方で、彼を死の床に結びつけようと思つた'; *Sōna him sele-pegn siðes wērgum, feorran-cundum forð wīsade* 'それから hall-thane は、遠くから来て、旅に疲れた彼を導いて行つた'。

《Beowulf》で行われた計算では、総合的語順をもつた文は、約70%ある。が、古代英語の散文においては、この語順は、次第に、分析的語順⁽⁸⁾に席をゆずる。この語順においては、補足語や、副詞的修飾語句は、述語の後に立つ。

Anglo-saxon Chronicle における総合的語順の例: *Eadmund Cyning him wīpfeah, and pā Deniscan size nāmon, and þone cyning ofslōgon, and þæt lond all geēodon* 'エドモンド王は、彼等と戦つた。そして、ディン人達は、勝利をえた。そして王を殺し、全国土を蹂躪した'; *AEþelstān cyning and Ealchere dux micelne here ofslōgon æt Sondwic on Cent, and nigon scipu gefengun and pā oþre gefliemdun* 'エーゼルスタン王と、司令官エルクセルは、ケントのソンドウィクで、大艦隊を粉碎した、そして9隻を捕かくし、残りを敗走させた'。

Anglo-saxon Chronicle における分析的語順の例: *Hēr Ceorl aldormon gefeah wip hæpne men mid Defenascīre æt Wiczanbearge* 'この年に、領主ケオルは、デヴォンシャーのウィガンベルクで異教徒と戦つた'。

総合的語順は、しばしば従属節⁽⁵⁾において起る; 例: *Ohthere sæde his hlāforde, Ælfrēde cyninge, þæt hē ealra Norþmanna norþmest būde* 'オーゼレは、自分の主人のアルフレッド大王に、自分はすべてのスカンディナヴィア人の中で一番北に住んでいると言つた'; *pā hē ðā pās andsware onfeng, pā ongon hē sōna singan* '彼は、その答をえた時に、すぐに歌い始めた'; しかし、従属節におけるこの語順は、抱束力のあるものではない(現代ドイツ

(1) обстоятельствоное слово (2) не обязателен (3) современный не мецкий язык
(4) поэтические тексты (поэтический текст) (5) синтетический порядок
(6) обстоятельствоные слова (7) 原註, 128 pp. (8) аналитический порядок
(9) подчиненные предложения (подчиненное предложение)

語におけるように); 従属節における動詞は, 主語のすぐ後にも立つことができる; 例: He cwæð þæt hē būde norþweardum wip þā Westsæ ‘彼は, 自分は大西洋の北に住んでいると言った’; He sǣde ðæt Norðmanna land wære swýpe lang and swýpe smæl ‘彼はスカンディナヴィア人の土地は, 非常に長く, 非常に狭いと言った’。

修飾語と被修飾語⁽¹⁾

§ 64 修飾語は, ふつう, 被修飾語の前に立つ。例: englisc gewrit ‘英語の文献’; ongemang oðrum mislicum and manigfealdum bisgum ‘種々雑多な物の中に’; hū gesǣliglica tida ‘何と幸福な時か! ’; sē forsprecena hungur ‘前に述べた飢饉’; eall oðre bēc ‘すべての他の本’; æfter forðyrnendre tide ‘流れた時の後で’; しかし量形容詞⁽²⁾は, しばしば, 被修飾語の後に立つ。例: ðā bēc ealle ‘すべての本’; ðonne naman āne ‘一つの名前’; his suna twezen ‘彼の二人の息子達’。

修飾語は, 呼びかけにおいて, しばしば被修飾語のあとに立つ: Wine mīn ‘私の友’, frēo-drihten mīn ‘私の主人’, Bēowulf lēofa ‘親愛なる Beowulf’。形容詞と限定の冠詞⁽³⁾からできている修飾語は, 次のような語結合においては, 被修飾語の後に立つ; 例: Sidoroc eorl sē alda ‘老スイドロック’。

生格におかれた修飾語は, ふつうは, 被修飾語の前にも立つ; 例: þāra cyninga getruman ‘王の軍隊’, Norðmanna land ‘スカンディナヴィアの土地’, Seaxna pēod ‘サクソンの種族’, monigra monna mōd ‘多くの人々の志気’。しかし, 次のような場合, 生格は, 被修飾語の後に立っている; 例: on oðre healfe ðære ēa ‘河の向う側に’。修飾語の名詞⁽⁴⁾ (同格名詞) は, ふつう, 被修飾語のあとに立つ: Ælfrēd cyning ‘アルフレッド王’, Fræna eorl ‘フレーナの伯爵’。

もし名詞に関して二つの修飾語があるならば, それらは, しばしば分れる: 一つは, 被修飾語の前に立つが, 一つは後になる; 例: micle meras fersce ‘多くの大きな淡水の湖’。

主語のない文

§ 65. 古代英語においては, 多くの場合に主語はない。一方, 無人称文において主語はなく, この文においては, いかなる動作の主語⁽⁵⁾も意味をもたない。例: hū lomp ēow in lāðe ‘どうやって道に出たか? ’; him on fyrste gelomp ædre mid yldum, þæt hit wearþ eal-gearo ‘建物が完全に出来たことを, 誰よりも早く彼は知った’。<ここでは, フローズガルが饗宴のためのホールを, 短期間に建てたことを言っている>⁽⁶⁾

また一方, 主語は文脈から容易に補足されるような文においては存在しない。例: Syððan ærest wearð fēaschaft funden, hē pæs frōfre gebād ‘始めから孤立無援だったので, 彼は, それに慰めを見いださなかつた’; alēdon þā lēofne pēoden on bearm scipes ‘そのとき, 人

(1) определение и определяемое (2) количественное определение
(3) определенный артикль (4) определение-существительное (приложение)
(5) предложения без подлежащего (6) безличное предложение
(7) субъект действия (8) 原註 pp. 130 (9) контекст

々は船の舷側に敬愛する司令官を立てた’。上の最初の例に、はつきりと見られることは、従属節の主語は、代名詞 ⁽⁴⁾hē によつて表現された主節の主語と一致することである。第二の場合において、先行する本文から、王の護衛が主語として考えていることは、明白である

不定詞と分詞⁽³⁾

§ 65 古代英語の不定詞は、種々な構文的機能を果たしている。不定詞は従属節においてもみられる。例：all ⁽⁴⁾pās ⁽⁵⁾ping ⁽⁶⁾pære ⁽⁷⁾pēode ⁽⁸⁾gedafenap ⁽⁹⁾cūp ⁽¹⁰⁾habban ‘すべての事が人々に、知られねばならない’。不定詞はしばしば ⁽¹¹⁾begin, ⁽¹²⁾can, ⁽¹³⁾want 等の動詞と共に用いられる。Hipelāc ongan sinne geseldan in sele ⁽¹⁴⁾pām ⁽¹⁵⁾hēan ⁽¹⁶⁾fægre ⁽¹⁷⁾fricgean ‘ヒーエラックは、大きな広間で、仲間に聞き始めた’；him ⁽¹⁸⁾bebeorgan ⁽¹⁹⁾he ⁽²⁰⁾con ‘彼を弁護できない、運動の動詞においては、不定詞は、しばしば、動作の目的を表わす：hē ⁽²¹⁾sige-hrēdig ⁽²²⁾sēcean ⁽²³⁾cōm ⁽²⁴⁾mærne ⁽²⁵⁾pēo-dan ‘彼は、勝ち誇つて、有名な王を訪れに来た’。

方向および目的を表現するために、また、前置詞 ⁽¹²⁾tō と、不定詞の与格型が用いられる；例：hie ⁽¹⁵⁾cōmon ⁽¹⁶⁾pæt ⁽¹⁷⁾land ⁽¹⁸⁾tō ⁽¹⁹⁾scēawienne ‘彼は、その土地を見に行つた’。この語型は、他の表現にも見られる；例：long ⁽²⁰⁾is ⁽²¹⁾tosecganne ‘話せば長い’（原義：話のためには長い）；gōddædum, ⁽²²⁾pā ⁽²³⁾hȳ ⁽²⁴⁾ær ⁽²⁵⁾forhozdun ⁽²⁶⁾tō ⁽²⁷⁾dōnne ‘善行、それを彼等は、つとに成すのをおこたつていた’；ne ⁽²⁸⁾bip ⁽²⁹⁾pær ⁽³⁰⁾ēpe ⁽³¹⁾pīn ⁽³²⁾spor ⁽³³⁾tō ⁽³⁴⁾findanne ‘おまえの跡は、たやすく見つけれられないだろう’。時々、前置詞のあとには、不変化の不定詞の語型が立つ；例：micel ⁽³⁵⁾is ⁽³⁶⁾to ⁽³⁷⁾secgan ‘多く（すなわち、長く）語る’。

詩の言語においては、運動の動詞と共に用いられた不定詞は、ときには、単に目的ばかりでなく動作の様態も表わし、その機能において分詞に近づく；例：gewāt ⁽³⁸⁾pā ⁽³⁹⁾nēosan ⁽⁴⁰⁾hēan ⁽⁴¹⁾hūses ‘その高い家に近づいたときに’；pā ⁽⁴²⁾cōm ⁽⁴³⁾of ⁽⁴⁴⁾mōre ⁽⁴⁵⁾under ⁽⁴⁶⁾mist-hlēopum ⁽⁴⁷⁾zrendel ⁽⁴⁸⁾gongan ‘グレンデルの暗い岩壁のもとに出かけて行つたときに’。

不定詞は、また、間接語法において、命令を表現するために用いられる；例：him ⁽⁴⁹⁾budon ⁽⁵⁰⁾drincan ⁽⁵¹⁾gebitrodne ⁽⁵²⁾wīndrenc ‘(彼等は)、彼に苦い酒を飲むように命令した’。

不定詞的表現⁽²³⁾（核）

§ 65 不定詞が他動詞と共に立ち、これに直接補足語がつく場合には、この二つの要素は結合して、一つの表現(核)を型成する。これは、ラテン文法の例にならつて、accusativus cum infinitivo ≪不定詞附対格≫ (accusative with infinitive) という術語でふつう呼ばれて

- | | |
|--------------------------------------|---|
| (1) субъект подчиненного предложения | (2) педшествующий текст |
| (3) инфинитив и причастие | (4) древнеанглийский инфинитив |
| (5) различные синтаксические функции | (различная синтаксическая функция) |
| (6) начинать | (7) мочь (8) хотеть (9) глаголы движения |
| (10) направление | (11) цель (12) предлог (13) дательный падеж инфинитива |
| (14) форма | (15) оборот (16) неизменяемая форма инфинитива |
| (17) поэтический язык | (18) инфинитив при глагола движения (19) образ действия |
| (20) причастие | (21) косвенный речь (22) приказание |
| (23) инфиничивные обороты | (24) переходный глагол (25) прямое дополнение |
| (26) винительный с инфинитивом | (27) термин |

いる。

古代英語においては、この表現⁽¹⁾（核）の使用は、後期、特に近代英語期における普及に比して、あまり著しいものではなかつた。

古代英語においては、《不定詞附対格》は、主として、感覚動詞⁽²⁾と共に用いられた。すなわち、*sēon* ‘see’, *hýran* ‘hear’, *gefrignan* ‘know’, そしてまた、命令⁽³⁾、あるいは仮定⁽⁴⁾、許可⁽⁵⁾等を表現する動詞と共に；例：*hātan* ‘bid’⁽⁶⁾, *lætan* ‘admit’⁽⁷⁾ ‘allow’⁽⁸⁾ 例：*geseah hē in recede rinca manize swefan sibbe-gedriht* ‘親衛隊の多くが、広間で戦い疲れて眠っているのを見た’；*ic þæt lond-būend, lēode mīne, sele-ræddende secgan hýrde, þæt hie gesāwon swylce twezen micle mearcstapan mōras healdan, ellor-gæstas* ‘私は、土地の人、わが国の人、顧問たちが、二つの非常に大きな、美しい精が沼に住んでいるのを見たと言っているのを聞いた’；*pā ic wide gefrægn weorc gebannan* ‘それから、私は、その仕事が広く発布されたのを知つた’；*pone here hē lēt mid þæm scipum þōnan wendan* ‘それから、彼は、その軍隊に、船に帰るように命じた’。

このような不定詞と対格との語結合⁽⁹⁾は、構文的単位⁽¹⁰⁾を構成し、この構文においては、名詞、あるいは代名詞⁽¹¹⁾は、不定詞によつて表現される動作を行つている人を表現している。このような表現⁽¹²⁾（核）は、他のゲルマン諸語にも見られる。古代英語においては、この表現核は非常に種々な写本において見られる。すなわち英雄譚から *Ælfric* の著作（5世紀）までの種々な写本に。

形容と分詞の語結合

§ 66 古代英語においてはまた、対格と叙述形容詞⁽¹⁶⁾、あるいは分詞が、‘数える’⁽¹⁷⁾、‘命名する’⁽¹⁸⁾、‘見る’⁽¹⁹⁾等の意味をもつ動詞と用いられている用例が見られる；例：*gesyð sorhceariȝ on his suna, bare winsele wēstne wind-gereste, rēote berofene* ‘彼は、悲しみにひしがれて、自分の息子の家の広間が、風の休み場所になり、からになつてのを見た’；*zedēp him swā gewealdene worolde dælas* ‘(神)は、世界の一部を、彼の支配のもとにおいた’；*sægdon hine sundorwisne* ‘(彼等は)、彼が特に賢いと言つた’。

時たま、古代英語においては、いわゆる分詞附絶対体構文⁽²⁰⁾がみられる。この場合には、与格が用いられる；例：*hē geseah swāpendum windum pone leg āhefenne* ‘彼は炎が吹く風によつて高まつたのを見た’；*forlætenre pære ceastre, hē cōm*, ‘彼は、その城を捨てて来た’。

- | | | | |
|--|---------------------------|-----------------------------------|---------------|
| (1) этот оборот | (2) глаголы восприятия | (3) приказание | (4) допущение |
| (5) разрешение | (6) приказывать | (7) допускать | |
| (8) позволять | | | |
| (9) сочетание винительный падежа с инфинитивом | (10) структурное единство | | |
| (11) лицо, выполняющее действие | (12) обороты | (13) текст | |
| (14) героический эпос | (15) Эльфрик | (16) предикативное прилагательное | |
| (17) считать | (18) называть | (19) видеть | |
| (20) абсолютная конструкция с причастием | | | |

否 定⁽¹⁾

§ 67 古代英語の特性は、否定語の自由な使用⁽²⁾である。否定語の多くは、一つの文においては何も限定しない。例: *ne mæg nān ping his willan wiðstandan* ‘何物も、彼の意志にさからうことはできない’; *nān man ne būde benorðan him* ‘だれも彼より北に住んでいない’; *nān he dorst nān ping āscian* ‘誰にも、彼は、あえて、何も聞こうとしない’。文中に *nān* タイプの否定語がないならば、否定の *ne* を強めるために、動詞のあとに語 *naht, noht* が立つ(この *naht (noht)* の原義は *nā-wiht*, ‘何もないもの’である)。例: *necon ic noht singan* ‘私は何も歌うことができない’。のちに、否定辞⁽³⁾ *ne* は動詞に附加されて、その否定機能は、*noht* に移される。

構文連関の表現法⁽⁴⁾

支 配⁽⁵⁾

§ 68 支配は、古代英語においても、他の屈折語⁽⁶⁾におけると同様に、非常に大きな役割を演ずる。支配の本質⁽⁷⁾は次の点にあることが知られている。すなわち、文中の他の語が、それを《支配》⁽⁸⁾するために、語は(主として、格型におかれた)、種々な語型をとる。そして、支配する語はその語型はとらない。

支配は、名詞と代名詞に関するときに、名詞、代名詞⁽⁹⁾が、ある一定の格におかれ、他の格にならないのは、支配する語が、その格を《要求する》からである。名詞と動詞がそのような語である。これと関連して、名詞支配と動詞支配が分けられる。ここでは、第一に、動詞支配⁽¹⁰⁾、それから、名詞支配⁽¹¹⁾を研究する。

動 詞 支 配

§ 69 古代英語における動詞は、名詞および、代名詞のすべての斜格⁽¹²⁾、すなわち、生格、与格、対格を、支配しうる。補足語の対格型⁽¹³⁾、すなわち、直接補語を支配する動詞は、一般に、他動詞とよばれる。これに関して、直接補語は、ふつうは、目的対象が、完全に、直接的に、動詞によつて表現される動作に影響を与えることを示している。例えば、次のような場合においては、動詞は、直接補語の対格型を支配する: *ðā cyningas, ðe ðone onwald hæfdon ðæs folces* ‘その国の権力をもつていた王’; *hīe ægðer 3e hiora sibbe 3e hiora siodo 3e hiora onweald innanbordes gehioldon ond ēac ūt hiora ēðel rȳmdon* ‘彼等は、その平和や、良俗や、その治安を国内で保ち、その領国を拡げた’; *wē habbað nū ægðer forlæten 3e ðone welan 3e ðone wisdom* ‘今や、我々は、富も、智慧も放棄した’。

(1) отрицание (2) свободное употребление отрицательных слов (отрицательное слово)

(3) отрицательная частица (4) способы выражения синтаксических связей

(5) управление (6) флективный язык (7) сущность управления

(8) управляет (9) требует (10) глагольное управление (11) именное управление

(12) косвенный падеж (13) винительный падеж дополнения (14) прямое дополнение

(15) объект

もし目的対象が、動詞によつて表現される動作に、間接的に関係するなら、補足語は、ふつうは与格におかれる。そのような間接補語の与格の格型を、次のような文における動詞が支配する; 例: *ðā cyningas... gode ond his ærendwrecum hiersumedon* ‘王達は英明で、彼の使徒として仕えた’; *wē him ne cunnor æfterspyrigean* ‘我々は、彼等に従うことができない’; *sing mē hwæthwugu* ‘私に何か歌つて下さい’; *sægde him hwelce gife hē onfenð* ‘どんな贈物を受けとるかを、私は彼に言つた’; *ðā rehton hie him ond sægdon sum hālið spell* ‘それから、彼等は、彼に話し、福音を述べた’。

また、いくつかの無人称の表現⁽¹⁾は与格を支配する、この構文においては、対象主題⁽²⁾を表現する、名詞あるいは、代名詞は与格におかれる; 例: *mē cōm swiðe oft on ðemynd* ‘私は、しばしば想い出した’; *hū him ðā spēow* ‘それから、彼は、なんと成功したことか!’。

最後に、いくつかの動詞は、補足語の生格を支配する; 例: *pā wundrade ic swiþe swiþe pāra gōdena wiotena* ‘それから私は、その立派な賢者に、非常に驚嘆した’; *hē pær sceolde bīdan westwindes* ‘彼はそこで、西風を待たねばならなかつた’。

このような生格は、明らかに、目的対象は、動詞によつて表現される動作を、部分的に含んでいるか、あるいは、その動詞に影響していることを示している。

代名詞と数詞の支配⁽³⁾

§ 69 いくつかの代名詞と数詞⁽⁴⁾は、生格を支配する。ここでは、次の様な場合である *syxa sum* ‘with four others’; *dōgra gehwīc* ‘毎日’; *pāra ān* ‘その一つ’。

形 容 詞 支 配

§ 70 形容詞は、生格、あるいは与格を支配する; 例: *godes wyrþe song* ‘神をほめる歌’; *morþes scyldig* ‘殺人の罪がある’。このような支配の根底には、明らかに、次のような格の意味が含まれている。すなわち、形容詞の生格には、ある目的対象に部分的な従属⁽⁵⁾、あるいは関与の意味がある。

与格の例: *pēah hē him lēof wære* ‘彼に親しくはあつたが’; *wæs gehwæððer ððrum lāð* ‘各々は、他を憎んでいた’。

名 詞 支 配

§ 71 名詞はふつう、生格のみを支配する。ちょうど、他の屈折語において見られるように、語は、動詞に対しては、それ自身、直接補語(目的語)となり、対格におかれるが、準動詞⁽⁶⁾においては、名詞は、生格になる。 *pæs landes scēawung* ‘国土の調査’ (cf. *pæt land scēawian* ‘国土を調査する’。

名詞は、また、他の多くの場合において生格を支配する。すなわち、他の対象と、そ

(1) безличные обороты (2) субъект (3) управление местоимений и числительных
(4) числительные (5) частичная затронутость (6) частичная причастность
(7) отглагольный

の対象の連関、対象の従属性の表現によつて、その意味を限定する他の名詞が、その名詞と結合している場合において；例：sio lār lādengeþiodes ‘ラテン語の研究’；þeod-cyninga þrym ‘王たちの言葉’。

前置詞の支配

§ 72 前置詞支配の概念は、言語の歴史において、比較的後期において表われる。初期の段階においては、前置詞は、まだ格を支配せず、ただ、格の意味を、限定しただけである。それゆえ、例えば、ラテン語においては、奪格は、それ自身、対象からの分離を表現した。そして、前置詞 *a*、あるいは *ex* は、ただ、その分離の意味をより明確にただけである。前置詞 *a* は ‘ot’ (from) を、前置詞 *ex* は ‘iz’ (out of) を意味する。ただ、より後期の英語の発達の段階において始めて、前置詞が格を支配する、すなわち、前置詞が、その格を《要求》するから、その格が立つと言う説明が行われる。

古代英語を我々は、言語の発展段階において、前置詞が格の意味の限定から、格を支配する要素に変つた時期におく。

それゆえ、例えば、任意の場所においては、運動あるいは、静止を表わして、前置詞とある格型が結ばれるならば、任意の場所の静止を考える場合には、名詞は与格におかれるが、運動を考える場合には、対格におかれる；例：前置詞 *in*: *in* Anŷelcynne ‘英国で’；*in* woruldhāde ‘この世の状態で’；前置詞 *on*: (*on*, *in*):*on* Anŷelcynne ‘英国に’；*on* ‘londe’ ‘陸に’；しかし：mē cōm on ŷemynd ‘考えが、心に浮かんだ’；pā āwendon hīe hīe on hīera āgen ŷeþiode ‘それから、彼等は、それを、自国語に翻訳した’。

この様な場合には、すでに、認められている様に、任意の場所における静止の概念は、与格で表現され、運動の概念は、対格で表現された。そして前置詞 ‘in’ あるいは ‘on’ は、ただこの概念を限定しただけである。しかしながら、古代英語の現実の構文的連関の観点からすれば、事情はすでに違つてくる。古代英語においては、前置詞はすでに、格支配の機能を備えていた。このことは、多くの場合において、その格型の意味と関連なく、前置詞が、一つの格型と結ばれていたことから明らかである。例：前置詞 ‘geond’ は、ほぼ、‘along’、‘over’ を示し、運動の概念を与えずに、ただ対格とのみ結ばれている。例：hū ŷesæliŷlica tīda ŷā wæron geond Angelcyn ‘英国全土は、当時は、なんと幸福な時期だつたらう’；前置詞 ‘tō’ は、常に、与格と結ばれていた；例：ūt wæs gongende tō nēahta scypene ‘近くの牧舎にでかけた（原義、家畜小屋）’；そして、前置詞 ‘ymb’ は、常に、対格と結ばれていた；例：hū ŷiorne hīe wæron ægþer ge ymb lāre ŷe ymb liornunza ŷe ymb pā þiowot-dōmas ‘いかに彼等は、教義や、学問や、すべての務めに勤勉であつたことか’。

他の前置詞、例えば、‘fram’、‘ofer’、‘æt’、も、同様に、ただ一つの一定の格型と結ばれていた。それゆえ、古代英語においては、前置詞支配は、構文体系の構成要素と考えるこ

(1) предмет (2) принадлежность предмета (3) понятие предложного управления

(4) отложительный падеж (5) отдаление от предмета

(6) предлог управляет падежом (7) этап развития языка (8) движение

(9) пребывание (10) реальные состояния синтаксических связей

(11) функция управления падежом (12) семантика самого падежа

(13) какойнибудь один падеж (14) синтаксическая система (15) составная часть

とができる。

一致⁽¹⁾

§ 73 構文的関係の表現手段としての一致は、古代英語においては、非常に本質的な役割を演ずる。しかし、その研究においては明らかに一致が見られる場合、すなわち、他の解釈が許されない場合と、一致が問題なのか、構文的関係の他の表現手段が問題なのか、議論の余地がある場合とを、区別する必要がある。我々はまず第一に、明白な一致の場合を研究する。

まず、第一に、修飾規定語と、被修飾規定語の一致を考える。名詞に対して用いられる修飾規定語、形容詞は、名詞と、性、数、格が一致する‘この性、数、格のカテゴリーは、形容詞においては、一致としてのみ存在する。実際、どのような意味を、性のカテゴリーは、形容詞自身に対して、持っているのか？ 見られるように、性のカテゴリーは、名詞すなわち、対象の名前の、なんなの分類の手段をも与えない。記号の枠、すなわち、それ自体としての形容詞に対しては、性のカテゴリーは、第一義的な関係をもちえない。性のカテゴリーは、形容詞においては、修飾された名詞との一致に対してのみ必要である。この考え方は、中世、および、近代英語における、形容詞の、より後期の型態の理解のために、考慮されることが必要である。

修飾された名詞と形容詞の一致の例：

1) 連体形容詞⁽¹⁰⁾： *hū gesæliglica tida* ‘なんと恵まれた時代’； *pāra gōdena wiota* ‘高貴な顧問官達’； *purh wise weahstōdas* ‘賢明な翻訳者により’； *ongemang ōprum mislicum ond manigfealdum biszum* ‘他の種々、雑多なことのなかで’； 2) 連用形容詞⁽¹¹⁾ *hū giorne hie wæron* ‘いかに彼等は勤勉だつたか’； *pætte æfre menn sceolden swā recceleāse weorpan* ‘誰でもが、そのように心配がなくなるように’。

性、数、格の一致はまた、指示代名詞をふくむ、連体限定代名詞に関するものである。例： *pā cyningas, pē pone onwald hæfdon pæs folces* ‘国民に権力を持つている王達’； *pissa woruldþinga* ‘この世的な物’； *pās stōwa* ‘この場所’。

語型変化の何らの型態をも持たない関係詞 *pe* は、被修飾語と、一致しない。cf., 例：
pāra gōdena wiotona, pē giū wæron giond Angelcynn ‘かつてアングリアにいた高貴な賢者達’； *pā bōc wendan on englisc, pē is genemned on læden Pastoralis* ‘ラテン語で、*«Pastoralis»* と名づけられている、英語に翻訳された本’。

連合⁽¹²⁾

§ 74 連合とは、語型の変化が見られず、したがって、支配もされず、それが関係して

- (1) согласование ~ concord (2) способ выражения синтаксических отношений
(3) существенная роль (4) род (5) число (6) категория
(7) названия предметы (8) способ классификаций (9) категория признака
(10) определительные прилагательные (11) предикативные прилагательные
(12) определительные местоимения (13) примыкание ~ adjoining: ただしこの用語‘英語学辞典’その他に未出；西欧言語学の文法概念にはあげられていないように思われる。

いる語と一致もしない品詞に関するものである。そのような品詞は、まず第一に、副詞である。

副詞は、文の修飾された部分と連合し、その部合の意を、色々な関係において、限定する。それゆえ、例えば、副詞は、動詞の客語を修飾することができる：⁽¹⁾Ælfred cyning⁽²⁾ hāteþ⁽³⁾ grētan Wærferð biscep his wordum lūflice ond frēondlic⁽⁴⁾ ‘アルフレッド大王は、ヴェルフエルスに、自分の言葉を、ねんごろに、温く伝えることを命じた’。ここで二つの副詞 lūflice と frēondlice は、述語 hāteþ grētan においての行為の様態の状況規定語であり、その述語の意味を限定している。上の場合において、《連合》は‘直接密着性’を示していない。なぜならば、副詞は、限定修飾された動詞から、直接目的語、wærferð biscep と、間接目的語、his wordum によつて、分離されているから。この場合には、連合の意味は、これらの語（副詞 lūflice と frēondlice）は、動詞に含まれた概念を規定して、動詞に支配されることもなく、動詞と、一致することもない点にある。

短 絡⁽¹⁰⁾

§ 74 短絡は、古代英語においては、特に大きな役割を演じていない。短縮とは、文の一部が、文の他の構成部分の中に組みこまれる、構文的連聯の表現方法と考えられねばならない。

古代英語に適用するにあたり、まず第一に、前置詞、あるいは冠詞（指示代名詞）と、修飾された名詞との間の修飾規定の短絡について述べることができる。このような短絡は、一致と並んで、修飾規定構文的特性手法の一つである。⁽¹²⁾我々は、古代英語において、例えば次のような場合において見る：purh wise wealhstōdas ‘学識のある翻訳者によつて’； ealla ðāra cristnæ ðiōda ‘他のすべてのキリスト教団’。この様な短絡は、後期の英語史の観点から、非常に興味がある。なぜならば、一致の衰亡のあとには、短絡が、事実上唯一の、修飾規定構文的特性手法になつたから。

生格におかれた名詞によつて表現される限定修飾にも、また短絡が見られる； 例：in ðysse abbudissan mynstre ‘この長老の僧院で’； purh godes giefte ‘神の恵みによつて’。

§ 75 それゆえ、上に挙げた例から分るように、古代英語における構文的連関の主要な表現手法は、支配と一致である。これと並んで、他の表現手法も交替して用いられる。が、それらの手法は、単に、補助的、あるいは従属的な意味しか持つていない。中世英語および近代英語期における、後期の英語の構造の発達には、この点においては、変化を見せた。古代英語期を特徴づける、いくつかの構文連関表現手法は、背景に退き、古代英語期においては、

- | | | |
|---|---|--------------------------|
| (1) наречие | (2) определяемый член предложения | (3) глагольное сказуемое |
| (4) Король Альфред | (5) Уэрферт | (6) образ действия |
| (7) обстоятельство | (8) непосредственная близость | (9) определяемый глагол |
| (10) замыкание | (11) способ выражения синтаксических связей | (12) применение |
| (13) средство синтаксической характеристики определения | (14) ликвидация согласования | |
| (15) основной способ выражения синтаксических связей | (16) управление и согласование | |
| (17) дальнейшее развитие строя языка | | |

単に補助的な役割しか果たしていなかった。他の構文連関表現手法⁽¹⁾が、前面に押し出されてきた。結局、古代英語期においては、まったくなかった構文連関の表現手法が表われた。文⁽²⁾における、この構文的連関表現手法の交替は、全体として見れば、英語の文法的構造の発達を示している。

複 文⁽⁴⁾
複 文 の 型⁽⁵⁾

§ 76 すでに古代英語の一番古い文献、例えば《Beowulf》⁽⁶⁾において、我々は、色々な型の複文⁽⁷⁾の体系の発達を認めた。

重 文⁽⁸⁾

§ 77 しばしば、古代英語のテキストには、複文⁽⁹⁾のより古い型を与える重文が見られる。ゆえに、よく接続詞のない、文の(等位的)接続が、行われている。例えば《Beowulf》において：fand þā þær-inne æþelinga gedriht swefan æfter symble; sorð ne cūpon, won-sceaft wera, wiht unhælo ‘宴のあとで、その人々の中に、王侯たちが眠っていた；憂いも知らず、誰にも悪意を持たないで’。

文の接続には、接続詞 and ‘and’, oppe ‘or’ ac ‘but’ が用いられる。例：wæs hē, semon, in weoruldhāde geseted op þā tide, þā hē wæs gelēferde yldo, ond hē nāfre nænig lēop geleornade ‘彼、この男は、その時まで、この世的な状態にいた、そして、彼は高齢に達していた。そして、彼は、一つの讃歌さえも学ばなかった’；ic me mid Hruntinge dōm gewyrce oppe mec dēaþ nimeþ ‘私は、武力をもつて、荣誉をうるか、あるいは、死を選ぶ’；þā Beormas hæfdon swiþe wel gebūn hira land; ac hīe nē dorston þæron cuman ‘ベルム人達は、非常にうまく、彼等の土地を耕した。しかし彼等(族人)は、その土地に、敢て来ようとしなかった’。

複 文⁽¹⁰⁾

§ 78 古代英語においては、歴史的に、複文⁽¹¹⁾のより初期の段階を示す、従属連合⁽¹²⁾が、広く、行われていた。従属連合においては、非常に多くの接続詞や、連結詞⁽¹³⁾が、用いられている。従属連合のより前期の手法の一つは、関係従属連合である。すなわち、関係代名詞や、

- (1) способы выражения синтаксических отношений
 (2) смена способов выражения синтаксических связей
 (3) развитие грамматического строя английского языка (4) сложное предложение
 (5) типы сложных предложений (6) Беовульф
 (7) развития система сложных предложений разных типов
 (8) сложносочинённый предложение (9) бессоюзное сочинение предложений
 (10) сложноподчинённые предложения—complex sentences. (11) подчинение
 (12) союзные слова (13) относительное подчинение
 (14) относительные местоимения (относительное местоимение)

関係詞の助けによる従属連合である。関係従属連合から、文の従属連合の他の面が⁽²⁾発達してくる。次に複文の色々な型を研究する。

主 語 複 文⁽³⁾

§ 79 複文は、主語の機能をはたす。それゆえ、次の二つの従属節の構造における断層⁽⁴⁾において、従属主語⁽⁵⁾が見られる：Him on fyrste gelomp, ædre mid yldum, þæt hit wearp eal-gearo, heal-ærna mæst. Scōp him Heort naman, se þe his wordes geweald wide hæfde ‘時が立つにつれて、彼は、まもなく最大の王宮は完全に、用意ができていたことを知った。それに、ヘオルトという名前⁽⁶⁾をつけた。それは、その言葉が、大きな力をもつと言う意味の名前である’。主語の従属節は、次の例に見られる：Him on mōd bearn þæt hē healreced hātan wolde, medo-ærn micel, men gewyrcean. ‘彼は、人々に、王宮、宏大なる饗宴の間、を作るように命じようと思つた’；Mē cōm swīðe oft on gemynd, hwelce wiotan iū wæron geond Angelcyn ‘どの賢者が、つとに早くアングリアにいたのか、ということ、私はしばしば、考えた；Mē pyncþ betre, gif ēow swā ðyncþ, þætte wē ēac sume bēc …… on þæt gepiode wenden ‘あなたにも、またよいと考えられるなら、我々にもまた、その言葉に、幾つかの本を翻訳することは、よいことに思われる’；ðā wæs æfter monegum dagum, þæt se cyning cōm tō þām ēalonde ‘長い才月のあとで、王が、その島に来ることになった’。

§ 79 古代英語においては、客語的（叙述的）複文は、⁽⁸⁾もちろん、みられない。

（補足語）従属節（文）⁽⁹⁾

古代英語のテキストにおいては、補足語従属節は、非常にしばしば、見られる。多くの場合において、この文は、接続詞 þæt⁽¹⁰⁾ によつて導かれる；例：Hē sæde þæt hē būde nōr-peweardum ‘彼は、自分は、北部に住んでいると言つた’。並列連合からのこの型の従属連合の起原は、非常に明瞭である。この種の文（補足語従属節）の最初の構造は、次のようなものであつた：Hē sæde þæt : hē būde nōrþeweardum ‘彼は、そのことを言つた：彼は、北に住んでいる’。それゆえ、この構造は、⁽¹³⁾二重の意味を担っている。その二重性は、þæt⁽¹⁴⁾ という語の意味と機能の変化と関連している。第一の文において、直接目的語の機能を果している指示代名詞から、þæt は、⁽¹⁵⁾従属接続詞となり、第二の文を導き、第二の文は、第一の文に従属するようになった。

(1) относительные частицы (относительная частица)

(2) другие виды подчинения предложений (3) подлежащие предложения

(4) отрыв (5) подчиненные подлежащие (6) хеорт

(7) подлежащее подчиненное (8) подчиненные предложения сказуемые (pl.)

(9) дополнительные предложения (pl.) (10) союз þæt (11) сочинение

(12) этот тип подчинения (13) конструкция

(14) изменение значения и функция слова þæt (15) подчинительный союз

類推的推移⁽¹⁾が、他の型の従属文（補足語従属節）においても起つた。例えば、次の文を見てみよう。例：hyne fyrwet bræc, hwæper collen-ferhþ cwicne gemette in þām wonz-stede Wedra pēodan ‘勇敢な戦士、ウェドラの王を、その場所に、見つけられるかどうかに、彼の好奇心は、かり立てられた；従属接続詞 hwæper は、‘二つのうちのいずれか’を示した疑問代名詞から発達してきた；この文の原初的な構成部（節）は次のようなことを示した：‘好奇心が、彼を捕えた。次の二つについてのいずれかの好奇心が：勇敢な戦士ウェドラ王を、その場所に見つけられるか、いなか’。

連結詞⁽³⁾の助けによつて、すなわち、疑問副詞⁽⁴⁾によつて、次の文の従属節は、導かれている。Men ne-cunnon, hwyder hel-rūnan hwyrftum scriþaþ ‘悪魔共が、何処に、時々、足を向けるのか、人々は知らない’。

我々によつて観察された、補足語従属文（節）の中には、いわゆる、間接話法の例⁽⁶⁾があった。この点において、間接話法と関連ある、すべての文法現象の総体⁽⁸⁾を研究できる。

間 接 話 法

§ 80 間接話法においては、従属節はふつう接続詞 pæt によつて導かれる。例：Hē cwæp pæt hē būde norþweardum ‘彼は、自分は北方に住んでいると言つた’。しかしながら、時々、従属節は、接続詞なしに、導かれる。cwæp hē wolde on morzenne mēces ecgum zetan ‘彼は、朝、剣⁽⁷⁾の刃で、彼等を殺したいと言つた’；ic wēne wit sind oferswīpde ‘私は、我々二人は、勝利をえたと思う’；cwæp hē gūð-cyning ofer swan-rāde sēcan wolde, mærne pēodar, pā him wæs manna pearf ‘彼は、卓越せる統治者、戦に優れた王は、白鳥の道（海）を越えて、来て欲しい；自分は、あなたの手を必要としているから、と言つた’。

間接疑問（文）は、疑問詞、あるいは、接続語 gif, hwæper によつて導かれる。

疑問詞によつて導かれた間接疑問文の例：men ne cunnon secgan tō sōþe, sele-ræd-ende, hæleþ under heofenum, hwā pām hlæste onfeng. ‘人々は、その大広間の最高管理者に、この世のだれが、その荷物を受けとつたのか、実際、言うことができなかった’；hine fyrwyt bræc mōd-þehyðum, hwæt pā men wæron ‘その人達がだれであるか、という好奇心が彼の心を捕えた’。

gif と hwæper の接続詞で引用された間接疑問（文）の例：fræzn, gif him wære niht zetæse ‘彼等は彼に、夜、安眠できるか、と聞いた’；nō hie fæder cunon, hwæper him ænig wæs ær ācenned ‘彼等は、彼等の父を知らなかった、この世に生まれる前に、彼が誰であつたかを’；hē nāt hwæper hē wyrpe is ‘彼は、自分が人の尊敬を受けるに値するかどうか知らなかった’。

命令は、間接話法においては、接続法⁽¹⁰⁾、あるいは、動詞 sculan と、不定詞の語結合⁽¹¹⁾で述べられる；例：bēad pæt ælc man swā dōn sceolde ‘彼は、各々の人が、そのようにする

- (1) аналогичный процесс (2) первоначальный член (3) союзное слово
 (4) вопросительное наречие (5) косвенная речь
 (6) всякая совокупность грамматических явлений (7) без союза
 (8) косвенный вопрос (9) вопросительное слово (10) сослагательное наклонение
 (11) сочетание глагола sculan с инфинитивом

ことを命じた'; hē bebēad pæt swā slēpen '彼は、彼等が、そのようにねむるように命じた'; pā ʒebudon him Perse pæt hie hæfden p̄rie winter sibbe wiþ hie 'それからペルシア人は、彼等に、彼等と三年の平和を守ることがを命じた'; hine bād pæt hē him sendan sceolde ealle '彼にすべてを送るようにと、彼に、願った'; hē ʒelærde ealle Crēas pæt hie Alexander wiþsōcen '彼は、すべてのギリシア人に、彼等が、アレキサンダーと闘うように説得した'. 複足語従属文の他の型も可能である; 例: hē nyste hwæt p̄æs sōpes wæs '彼は、何が、ここで真実であるか知らない'; ofost is sēlest to ʒecyðanne, hwanan ēowre cyme syndon '君は、どこから到着したのか、早く報告することが必要だ'.

修飾限定文⁽⁴⁾—<形容詞節>

§ 81 修飾限定複文⁽³⁾は、古代英語において、広く用いられた。これらの文は、関係代名詞 *pe* か、同じく関係代名詞 *sē*, あるいは複合(関係)代名詞 *sepe* ⁽⁴⁾によつて導かれる。

§ 82 修飾限定文⁽⁵⁾は、連体的であり、この文が関係している名詞によつて表現された、概念の大きさを限定するか、または、叙述的であり、概念の大きさを限定することなく、その名詞によつて表現された対象に関する、補足的な智識を与える。古代英語においては、この二つの型の修飾限定文⁽⁶⁾の区別⁽⁷⁾は、かなり貧弱な型式的表現⁽⁸⁾においてのみ見られる。

関係代名詞 *pe* は、ただ連体修飾限定文においてのみ用いられる。一方、関係代名詞 *sē*, および、*sepe* は、連体修飾限定文⁽⁹⁾ (節), および、連用修飾叙述文において用いられる。例: 連体修飾限定文: nalæs hē hine lāsan lācum tēodan, p̄eod-ʒestrēonum, ponne pā dydon, p̄e hine æt frumsceafta forp onsendan ænne ofer yðe umbor-wesende '子供だつた時に、誕生日に、海を越えて、送られた時に、彼がもらつた物より以上に、彼に、国宝の贈物を与えなかつた'.

連用修飾叙述文⁽¹⁰⁾: Hwæt syndon ʒe searo-hæbbendra byrnum werede, p̄e pus brontne cēol ofer laʒu-stræte lādan cwōmon, 'このように、堅固な船を、海を越え、波を越えて、ここに運んで来た、甲冑に身をかため、武器を持つているお前達は誰か?'

時折、連体修飾限定文は、他の語によつて導かれる; 例えば、*pær* ⁽¹¹⁾によつて、この語は、文脈においては、*which* ⁽¹²⁾の意味を担う; そしてまた *swā* ⁽¹³⁾によつても導かれる、この語もまた、時には、*which* ⁽¹⁴⁾の意味をになう。例: weard maðelode, p̄ær on wicʒe sæt, ombeht unforht '端に坐つていた番人は、大胆な召使いであつた'; pæt secʒan mæʒ efne swā hwylc mæʒpa, swā pone maʒan cende æfter ʒum-cynnum, 'このことは、この国に、息子を産んだすべての女について言うことができる'.

§ 82 時として名詞に対する同格の機能で、従属節が表われる。例: Ic p̄e nū pā, breʒo

- | | |
|---|---------------------------------|
| (1) подчиненных дополнительных предложений | (2) определительные предложения |
| (3) определительные подчиненные предложения | (4) сложное местоимение |
| (5) ограничительный | (6) объем понятия |
| (7) описательный | |
| (8) дополнительные сведения о предмете | (9) различие |
| (10) внешнее выражение | |
| (11) ограничительные предложения | (12) описательные предложения |
| (13) который | (14) функция приложения |

Bearht-Dena, biddan wille, eordor Scyldinga, ænre bene : pæt pū mē ne forwyrne, wið-
endra hleo, frēo-winc folca, nū ic pūs feorran cwōm, pæt ic mōte āna ond mīnra eolra
Ʒedriht, pīs hearda hēap, Heorot fæsian ‘私は今、デイン人の領主たる汝に、スキュルデ
ングの擁護をお願いしたい; すなわち、汝は、国民の友、戦士の守りの(協力)私に拒否
しないで欲しい; 私は今、非常に遠くに来た; 私の親衛隊の隊長の一人、勇敢なる隊長の一
人のヘオルト⁽²⁾を、グレンデル⁽³⁾から、救うために’。

当然に、次の場合においては、従属節は、同格(節)と考えられる、例: Ic pæs Hrō-
pƷār mæg pūrh rūmne sefan ræd Ʒelæran, hū hē frōd and Ʒōd fēond oferswyðeð ‘私は、
かくして、大らかな心をもつて、フローズガル⁽⁴⁾に忠告を与えることができた、いかに、彼が、
賢明に、勇敢に、敵を撃破するかを’。

状況規定修飾文⁽⁵⁾ (副詞節)

§ 83 古代英語における状況規定修飾文は、現代英語におけると同様に、非常に多様な
関係を表現した。従つてこれと関連して、このような文を導く、従属接続詞⁽⁶⁾は、非常に多
い。ここでは、いくつかの、最もよく行われている、状況規定修飾文の型を研究する。

時間状況規定文⁽⁷⁾ (時の副詞節)

§ 84 時の副詞節は、種々な接続詞で導かれる: pā, þonne, hwanne, ‘when’ sippan
‘since’ ær, ærƷæmpē ‘before’ þendan, oppæt, ‘while’。

例: pā hē pā pās andsware onfeng, pā onƷan hē sōna singan ‘その答を得たときに、
彼はすぐに歌い出した’; þonne hē Ʒeseah pā hearpan him nēalæcan, þonne ārās hē for
sceome from pām symble ‘琴が彼に近づいた時、彼は、はずかしげに、席宴から立ちあが
つた’。この例においては、従属節を導く接続詞 pā あるいは、þonne に、主節の副詞 pā,
あるいは þonne が対応する。この相関構文は、古代英語期には、広く用いられた。

他の接続詞をもつた時間状況規定文の例: hēold, þendan lifde, Ʒamol ond Ʒup-rēow,
Ʒlæde Scyldingas ‘生きている間は、老いても、戦に勇猛なスキュルデングを持ち満足して
いた’(すなわち、彼等が満足するように彼等を治める): nāfre him dēap scepeþ on pām
willwonge, þendan woruld stordeþ ‘世界が続く限り、その楽しき庭において、決して、彼
に、悪の種は、たえることがなかつた’; pær se ēadƷa mōt …… wunian in wonge, oppæt
wintra biþ pūsend urnen ‘千年の才月が過ぎる間、そこの庭には、神のめでし人々が住むこ
とができる’; Ʒe wāt pā nēosian, sippan niht becōm, hēan hūses ‘夜になつたので、その
高い家に近づいて行つた’。

(1) Скильдинг (2) Хеорт (3) Глендель (4) Хротгал
(5) обстоятельственные предложения (6) подчинительный союз
(7) временные предложения (8) явление корреляций

位置状況規定文⁽¹⁾ (場所の従属節)

§ 85 位置状況規定文は、比較的、まれにしか見られない。この文は、接続詞、場所の副詞⁽²⁾によつて導かれる; 例: Hwearf pā hrædlice, pæ̃r Hrōp̃gār sæt, eald und unhār mid his eolra gedriht ‘彼は、老いた白髪のプローズガルが親しい貴族達を連れて坐つていているところに、早くやつてきた’。

原因結果状況規定文⁽³⁾

§ 86 原因結果の従属節は、古代英語においては、接続詞, forp̃æmpe, forp̃æm ‘because’ で、導かれる。

例: pā cirdon hie ūp-in on ðā ēa, forp̃æm hie ne dorston forp̃ bi p̃ære ēa siðlan for unfripe; forp̃æm pæt land wæs eall ʒebūn on ōpre healfe p̃ære ēas ‘それから彼等は、河を遡つて方向を転じた。なぜなら、不安な状態のために、更に遠く河に沿つて、敢えて航行しようとはしなかつた。そしてまた、この河の一方の岸の土地は、すべて、植民されていたから’; wæs sēo hwil micel, twelf wintra tid torn ʒepōlode wine Scyldinʒa, wēana gehwylcne, siðra sorga; forðām syððan wearð ylða bearnum undyrne cūð gyddum ʒeomore, p̃ætte ʒrendel wan hwile wið Hrōðʒār ‘スキュルデング公は、大きな不幸、大きな悲哀、ためられた怒りを、20年間耐えた。なぜなら、グレンデルが、プローズガルと長い間、戦つたことは、悲しい詩において、人の子に、あまねく知られていたから’。

目的状況規定文⁽⁴⁾

§ 87 目的の従属節は、仮定法の語型を伴つた、接続詞 pæt によつて導かれた語結合⁽⁵⁾と、すべての従属節の一般的な意味によつて、特徴づけられる; 例: Swā sceal ʒeong ʒuma ʒōde ʒewyrcean, fromum feoh-ʒiftum on fæder ærne, pæt hine on ylde eft ʒewunian wil-ʒesiðas, þonne wiʒ cume, lēode ʒelæsten ‘それゆえ、若い戦士は、父の家での寛大な贈り物によつて、親切な行為をなす必要がある; と言うのは、老年になり、戦が始まつたとき、人々が、自由意志で、彼と行いを共にするように’ (若い王は、彼が老いたときに、人々が、彼と戦いに、喜んで行けるように、自分の身を持する必要がある)。

目的状況規定文は、それを避けることが必要であるような動作を表現するときは、その従属節は、接続詞 py lās (pē) ‘that ~ not’ で導かれる; 例: forþan ic lēof werud lāran wille æ-fremmende, pæt ʒe ēower hūs ʒefæstnizen, py lās hit fērblædum windas tōweorþan ‘それゆえ、私は、親愛なる国民が、法律を守るように教えることを望む、汝が、自分の家を、堅固にし、その家を、不意の突風によつてこわされないように’。

(1) предложения места (2) наречие места (3) причинные предложения

(4) предложения цели

(5) сочетание вводящего союза pæt с формой сослагательного наклонения

結果状況規定文⁽¹⁾

§ 88 結果の状況規定文は、接続詞 *pæt* によつて導かれる。これに関して、主文においては、副詞 *swā so* が立つ。もし、そのような副詞がないときは、従属節の特性は、複文の一般的意味においてのみ判断される。

副詞 *swā* をもつた例: *swā clæne hīo wæs opfeallenu on Angelcynne, ðæt swīpe fēawa wæron behionan Humbre, ða hiora ðēniŋa cūðan understondan on enŋliscen oððe furðum an ærendŋewrit of lādene on enŋlisc āwenden* ‘学問の、英国での衰退は、非常にひどいものなので、ハンバー河のこちら岸においては、非常に多くの人々が、自分自身の国の作品を英語で理解できず、また、一つの書かんさえも、英語から、ラテン語に翻訳できない’。

副詞のない例: *ēode ellen-rōf, pæt hē for eaxlum gēstōd Deniŋa frēðan* ‘勇敢なる者は行つて、デンマーク人の近くに立つた’。

条件状況規定文⁽⁴⁾

§ 89 条件状況規定文（条件節）は、接続詞, *ŋif*, ‘if’ あるいは, *næfne* ‘unless’ で導かれる例: *Hē mē habban wille dreōre fāhne, ŋif mec dēað nimeð* ‘もし、死が、私を捕えないならば、彼は私を血まみれにするだろう’; *Nis pæt seld-guma wæpnum gēweorðad, næfne his wlite lēoge, ænlic ansyn* ‘彼の外観が、欺かないものとすれば、それは、武器を尊重する人間の、低い地位ではない’。

譲歩状況規定文

§ 90 譲歩文は *pēah* (*pe*) の接続詞によつて導かれる; 例: *pone sið-fæt him snotere eorlas lýt-hwōn lōgon, pēah hē him lēof wære* ‘道理にかなつた人によつて、彼は、その旅行を非難された、彼は、彼等に親しくはあつたけれども’。

比較状況規定文⁽⁵⁾

§ 90 比較の従属節は、接続詞 *ponne* によつて導かれる。 *nalæs hī hine lāssan lācum teōdan, pēod-gestrēonum, ponne pā dydon, pe hine æt frumsceafte forð onsendon ænne ofer yðe umbor-wesende* ‘彼が子供だつた時、誕生日に、海を越えて、送られたものよりも、より以上少しも、国宝の贈物を彼に与えなかつた’; *næfre ic māran geseah eorla ofer eorðan, ponne is ēower sum secg on searwum* ‘あなた達のうちの誰か武装している人よりも、この土地で、私は、領主を決してより多く見たことはない’。

次の場合においては、接続詞 *swā* で導かれた、従属節は、比較の従属節か、あるいは、

- | | |
|--------------------------------------|---------------------------------------|
| (1) предложения следствия | (2) характер подчиненного предложения |
| (3) общий смысл сложного предложения | (4) условные предложения |
| (5) предложения сравнения | |

挿入節⁽¹⁾を、意味する。wearde heoldon in þām fæstenne, swā þām folce ær ðeomormōdum lūdiþ bebēad ‘以前に悲しみにやつれた、ユーディス⁽²⁾が命じたように要塞に、番兵を置いた。

§ 91 古代英語のテキストにおいては、また時折、一般的な性格をもつた従属節⁽³⁾があり、これに対応する一般的な代名詞、あるいは副詞⁽⁴⁾によつて導かれる。それゆえ、次の例における、補足語複合従属節⁽⁵⁾は、一般的な性格をもっている：…swā ðætte, swā hwæt swā hē of godcundum stafum purh bōceras ðeornode, þæt hē æfter medmiculum fæce …… in enǝliscgæreorde wel ðeworht forþ brōhte ‘写字生を通じて、聖書から学んだすべてを、彼は短かい時間に、完全に英語で説明することができた’。

次の場合において、一般的な従属節は、むしろ、譲歩的な⁽⁶⁾、すべての場合において、状況規定的な特性を持つている；例：hū ðedōþ þæt æþper biþ oferforen, sam hit sy sumor sam winter ‘夏でも、冬でも、どれかが凍るようにした’。

複合従属文⁽⁷⁾の構造には、非常に複雑多岐な語結合を含む、非常に多様な補足語従属節が見られることは、言うまでもない。

Résumé

This is nothing but a second series of the tentative assimilations to the English studies in USSR ; since the introduction of Jespersen's descriptive approach in English syntax by Prof. Ichikawa, most of the English studies contemporaneous with those precursors who applied themselves to their assimilations have been fruitfully taken into the body corporate of English studies in our country.

The vistas which have been with no good reason left unexplored and awaits for our researches are those studies on English which certainly have been and are being carried out in Italy, Spain and USSR.

As it is, the aim of the present writer is to cast a precarious plumb into the vast expanse and depth of unfathomed contributions of English studies, and bring them to our scholarly public in general.

This paper, concerned with Prof. Ilysh's 'History of the English language', is deliberately taken up with a view to introducing the latest work on the subject to the students and researchers in universities, colleges and scholarly institutions of this country whose specialities and interests point to this field.

(1) вводящее предложение (2) Юдифь

(3) подчиненные предложения обобщающего характер

(4) соответствующие обобщающие местоимения или наречия

(5) дополнительное подчиненное предложение (6) уступительный

(7) сложноподчиненное предложение (mixed sentence)